

鳥取市

倭文6号墳出土遺物の研究

鳥取市

倭文6号墳出土遺物の研究

出土品再整理報告書

出土品再整理報告書

二〇一八

2018

鳥取市教育委員会

鳥取市教育委員会



倭文 6 号墳出土鉄器集合

卷頭圖版 2



三角板紙留短甲



短甲内の横矧板錆留衝角付胄



辻金具

卷頭圖版 4



f字形鏡板帶



f字形鏡板の細部



銜の細部

卷頭図版 6



剣菱形杏葉



鞍金具（鞍、飾鉢）

剣菱形杏葉の細部



鉄矛・石突集合



石突 1 に付着した羽根

巻頭図版 8



鎌の小札



刀 2 の柄木および目釘

序

倭文6号墳は平成15年度に中国横断自動車道姫路取線整備促進事業に伴い発掘調査が行われ、直径13mの小型の円墳ながら、短甲1領のほか胄、馬具、太刀など数多くの鉄製品が出土しました。

これは古墳時代の鳥取市を考える上で、重要な発見であると同時に後世に残していくなければならない貴重な財産です。そのため、平成17年度から平成19年度にかけて保存処理を行い、平成25年度から資料の公開活用を行うために必要な歴史的価値を調査する事業を実施いたしました。

調査成果を取りまとめた本書が今後の公開活用を行うための基礎的な資料となり、また県内外の多くの歴史研究者に活用され、さらなる発展のための一助となれば幸いです。

終わりに、本書の刊行にあたり、ご尽力・ご協力をいただいた多くの関係者の皆様に、心からお礼を申し上げます。

平成30年3月

鳥取市教育委員会
教育長 尾室 高志

例言

1. 本書は、平成 15（2003）年度に後文 6 号墳から出土した鉄製品の再整理報告書である。再整理作業は、鳥取市教育委員会の委託を受けて、鳥取大学地域学部考古学研究室の高田健一が平成 25（2013）年度～平成 29（2017）年度にかけて実施し、報告書作成も担当した。事業の実施にあたっては、片山健太郎氏（日本学術振興会特別研究員）、鈴木一有氏（浜松市）、橋本達也氏（鹿児島大学総合研究博物館）に特段のご助力をいただいた。
2. 出土鉄製品の保存処理は、平成 17（2005）年度～平成 19（2007）年度にかけて、株式会社東都文化財保存研究所に委託して実施された。
3. 本書の編集は高田が行なった。執筆分担は、以下の通りである。

第1章、第2章、第3章1、2(1), (3), (4), 4(2), 第4章2	高田健一
第3章2(2)	鈴木一有
第3章3, 4(1), (3), 第4章1	片山健太郎
4. 卷頭図版のすべて、巻末図版の多くは、牛嶋茂氏の撮影による。また、挿図、巻末図版として掲載した X 線 CT 画像は、九州国立博物館の協力を得て撮影されたものであり、橋本達也氏による「X 線 CT 調査による古墳時代甲冑のデジタルアーカイブおよび型式学的新研究」（日本学術振興会 科学研究費 基盤研究 B）の成果の一部をご提供いただいた。X 線 CT 画像の解析作業は、星野美香氏の多大なご協力をいただいた。
5. 本書の作成にあたっては、下記の方々、機関のご助言、ご協力をいただいた。感謝申し上げる（敬称略）。
赤田昌倫、諫早直人、阪口英毅、志賀智史、鳥越俊行、宮代栄一、九州国立博物館

目次

卷頭図版	
序	
例言	
第1章 遺物再整理事業の経緯	1
1. 発掘調査と報告書の刊行状況	1
2. 遺物再整理・報告に至る経緯と事業の経過	1
第2章 古墳の位置と周辺の歴史的環境	3
1. 周辺の遺跡・古墳群との関係	3
2. 倭文古墳群の概要と6号墳の位置付け	4
3. 遺物の種類と出土状況について	6
(1) 遺物の種類	6
(2) 遺物の出土状況と棺の推定	8
(3) 棺内の遺物出土状況	9
(4) 棺外の遺物出土状況	11
第3章 遺物各説	12
1. 武器	12
(1) 鉄刀	12
(2) 鉄矛	12
(3) 鉄鏃と矢柄漆膜	14
2. 武具	16
(1) 三角板鋲留短甲	16
(2) 横矧板鋲留衝角付冑	22
(3) 小札鎧	26
(4) 小札革縫頬当	26
3. 馬具	30
(1) 蔽	30
(2) 辻金具	34
(3) 鞍	36
(4) 鐙	38
(5) 杏葉	38
(6) 鈕具	41
(7) その他の馬具	41
(8) セットとしての評価	42
(9) 出土状況からみた馬装の復原	42
4. その他	43
(1) 刀子	43

(2) 鑑	43
(3) 不明鉄製品	44
第4章 考察	46
1. 馬具からみた倭文6号墳	46
2. 千代川左岸における古墳築造動向と倭文6号墳	74

卷末図版

挿図目次

図1 X線CT撮影のようす	1	図33 刺菱形杏葉実測図(2)	40
図2 短甲のX線CT像	1	図34 刺菱形杏葉実測図(3)	41
図3 周辺の遺跡分布図	5	図35 鋼具実測図	41
図4 倭文古墳群全体図	6	図36 その他の馬具	42
図5 倭文6号墳の墳丘平面図・断面図	7	図37 倭文6号墳出土馬具の時期	42
図6 遺物出土状況と棺の推定位置	9	図38 馬装の復原	43
図7 棺内の遺物出土状況	10	図39 工具実測図	43
図8 馬具の出土状況	10	図40 不明鉄製品実測図	44
図9 鉄刀実測図	12	図41 内山敏行による「字形鏡板轡の編年	46
図10 鉄矛実測図	13	図42 別被式「字形鏡板轡の諸例	47
図11 棺外出土の鉄鎌実測図	14	図43 鏡板の構造分類	48
図12 棺外出土の鉄鎌実測図	15	図44 衛と引手の連続分類	48
図13 矢柄漆膜側面の立ち上がりと小孔	16	図45 衛の固定方法	48
図14 三角板新留短甲部分名称及び展開模式図	17	図46 引手の分類	48
図15 三角板新留短甲実測図(外面・前後)	18	図47 吊金具の分類	48
図16 三角板新留短甲実測図(外面・左右)	19	図48 繫の分類	48
図17 三角板新留短甲実測図(内面・前後)	20	図49 「字形鏡板轡の変遷	49
図18 三角板新留短甲実測図(内面・左右)	21	図50 倭・朝鮮半島における固定式遊環をもつ轡の変遷	52
図19 横矧板新留衡角付青実測図(外面)	24	図51 岡安による「字形鏡板轡の成立過程	53
図20 横矧板新留衡角付青実測図(内面)	25	図52 鉄製刺菱形杏葉	54
図21 小札鑑実測図	27	図53 多頭刺菱形杏葉の諸例	56
図22 頬当実測図	29	図54 多頭装飾の馬具	59
図23 頬当内面に付着したハエ埋輪殻	29	図55 朝鮮半島における斜線文・綾杉文馬具の諸例	61
図24 「字形鏡板付青実測図(1)	31	図56 中期後半の馬具の特質	62
図25 「字形鏡板付青実測図(2)	32	図57 杏仁形新馬具の諸例	63
図26 「字形鏡板付青展開図	33	図58 中期後半における馬装体系	64
図27 「字形鏡板計測位置	34	図59 島根県の古墳時代馬埋葬等の遺構	66
図28 銀金具実測図	35	図60 古海古墳群	75
図29 銀金具実測図	37	図61 下味野古墳群・篠田古墳群	78
図30 銀有機質	37	図62 横枕古墳群	80
図31 木心板張輪鎧実測図	38	図63 横枕古墳群の展開過程	82
図32 刺菱形杏葉実測図(1)	39		

表目次

表1	本書と既報告の対照	8
表2	倭文6号墳出土馬具一覧	30
表3	f字形鏡板付櫛計測値	34
表4	方形金具計測値	36
表5	貴金属計測値	36
表6	飾鉢計測値	38
表7	剣菱形杏葉計測値	40
表8	f字形鏡板轡一覧	50
表9	f字形鏡板轡の型式分類	51
表10	鉄製剣菱形杏葉一覧	55
表11	多筋杏葉・鏡板轡一覧	57
表12	倭の多筋装飾馬具一覧	60
表13	朝鮮半島の多筋装飾馬具一覧	61
表14	朝鮮半島の斜線文・綾杉文の馬具一覧	62
表15	朝鮮半島の杏仁形銅馬具一覧	62
表16	倭の杏仁形鏡の馬具一覧	63
表17	鳥取県の古墳時代の馬埋葬等遺構一覧	65
表18	類例出土古墳の特徴	65
表19	古海古墳群の築造時期	74
表20	本高古墳群の築造時期	75
表21	服部古墳群の築造時期	76
表22	篠田古墳群の築造時期	76
表23	下味野古墳群の築造時期	76
表24	横枕古墳群(南群)の築造時期	79
表25	横枕古墳群(北群)の築造時期	79
表26	倭文古墳群	81

巻頭図版目次

1	倭文6号墳出土鉄器集合
2	三角板鋲留短甲
3	(上) 短甲内の横矧板鋲留衝角付冑 (下) 銀金具
4	f字形鏡板轡
5	(上) f字形鏡板の細部 (下) 術の細部
6	(上) 剣菱形杏葉 (左) 鞍金具(鞍、飾鉢) (右) 剣菱形杏葉の細部
7	(上) 鉄矛・石突集合 (下) 石突1に付着した羽根
8	(上) 鏡の小札 (下) 刀2の柄木および目釘

巻末図版目次

1	(上) 鉄刀(奥が刀1、手前が刀2) (下) 鞘口部の木質(刀1)
2	(上) 鞘の漆膜(刀1) (下) 柄の糸巻(刀2)
3	鉄矛(左から矛2・石突1、矛3・石突2、矛1)
4	(上) 石突1に付着した羽根 (下) 鞘外の鐵鐵
5	(上) 棺内の鐵鐵(X線CTによる表面像) (下) 棺内の鐵鐵(X線CTによる透視像)
6	(上) 棺内の鐵鐵断面端部(X線CTによる透視像) (下) 棺内の鐵鐵断面頭部(X線CTによる透視像)
7	三角板鋲留短甲(正面)
8	三角板鋲留短甲(背面)
9	三角板鋲留短甲(右側面)
10	三角板鋲留短甲(左側面)
11	(上) 三角板鋲留短甲・前胸展開図(外面、X線CTによる表面像) (下) 三角板鋲留短甲・前胸展開図(内面、X線CTによる表面像)
12	(上) 三角板鋲留短甲・前胸展開図(外面、X線CTによる透視像) (下) 三角板鋲留短甲・後胸(外面、X線CTによる表面像)
13	(上) 三角板鋲留短甲・後胸(内面、X線CTによる表面像) (下) 三角板鋲留短甲・後胸(外面、X線CTによる透視像)
14	(上) 三角板鋲留短甲・右側面(外面、X線CTによる表面像) (下) 三角板鋲留短甲・右側面(内面、X線CTによる表面像)
15	(上) 三角板鋲留短甲・右側面(外面、X線CTによる透視像) (下) 三角板鋲留短甲・左側面(外面、X線CTによる表面像)
16	(上) 三角板鋲留短甲・左側面(内面、X線CTによる表面像) (下) 三角板鋲留短甲・右側面(外面、X線CTによる透視像)
17	(上) 横矧板鋲留衝角付冑・上面(X線CTによる表面像) (下) 横矧板鋲留衝角付冑・上面(X線CTによる表面像)

る透視像)

18 (上) 横矧板鉢留衝角付冑・下面 (X線C Tによる表面像)

(下) 衝角底板の形状 (X線C Tによる表面像、透視像)

19 (上) 横矧板鉢留衝角付冑・右側面 (外面, X線C Tによる表面像)

(下) 横矧板鉢留衝角付冑・右側面 (内面, X線C Tによる表面像)

20 (上) 横矧板鉢留衝角付冑・右側面 (外面, X線C Tによる透視像)

(下) 横矧板鉢留衝角付冑・左側面 (外面, X線C Tによる表面像)

21 (上) 横矧板鉢留衝角付冑・左側面 (内面, X線C Tによる表面像)

(下) 横矧板鉢留衝角付冑・左側面 (外面, X線C Tによる透視像)

22 (上) 横矧板鉢留衝角付冑・正面 (X線C Tによる表面像)

(下) 横矧板鉢留衝角付冑・正面 (X線C Tによる透視像)

23 頬当

24 (上左) 頬当内面の革, ハエ團蟠殻

(上右) 小札鑓の革包覆輪痕跡

(下) 短甲内に執着した小札と衝角付冑 (X線C Tによる表面像)

25 f字形鏡板裏面 (右)

26 f字形鏡板裏面 (左)

27 刺菱形杏葉1

28 刺菱形杏葉1 (X線C Tによる透視像)

29 刺菱形杏葉2

30 刺菱形杏葉2 (X線C Tによる透視像)

31 刺菱形杏葉3

32 刺菱形杏葉3 (X線C Tによる透視像)

第1章 遺物再整理事業の経緯

1. 発掘調査と報告書の刊行状況

倭文古墳群は、鳥取市倭文字妙見谷山分 536-1 他に所在する古墳時代前期～中期にかけて営まれた古墳群である。平成 15（2003）年度に姫路鳥取線整備事業に伴って、財団法人鳥取市文化財団・鳥取市埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が実施され、発掘調査報告書として『倭文所在城跡・倭文古墳群』が刊行された。（山田 2004：以下、既報告と略称する）。

既報告は、中世城館跡である「倭文所在城跡」及び、埴丘を持つ古墳として倭文 2～9 号墳（1 号墳は調査範囲外）、埴丘を持たない土壙墓群の調査成果が収められ、遺構、遺物に関する記述が行なわれたが、6 号墳出土の鉄製品については、保存処理等を経ない段階での観察・図化にとどまった。遺物の量や質からすれば、本来、十分な整理期間と検討を経ることが望ましかったが、それが叶わぬままに報告書の刊行に至った。これは、姫路鳥取線整備事業に伴う発掘調査期間が平成 15（2003）年度をもって完了とされ、予算的な制約から、調査年度内での報告書刊行を余儀なくされたためである。

2. 遺物再整理・報告に至る経緯と事業の経過

報告書刊行後、倭文 6 号墳出土遺物は鳥取市教育委員会において適切に保管されていたが、遺物の一括性の高さや、歴史的・学術的重要性に鑑み、少なくとも鳥取県指定保護文化財の指定を受ける価値が十分にあると考えられたため、鳥取県及び鳥取市の文化財保護部局が協議の上、将来的に保存処理を行なって、遺物整理を進める方針が決定された。

平成 17（2005）年度～平成 19（2007）年度にかけて、文化財関係の国庫補助事業、県費補助事業を得て、株式会社東都文化財保存研究所で保存処理が実施された。保存処理後は、平成 20（2008）年度のあおや郷土館における公開（「かあなもんがでたわいや!? でもその前に…発掘調査ってなんだろう」展）を皮切りに、平成 21（2009）年度（鳥取市歴史博物館「因幡地方の名品—鳥取市の文化財あれこれー」展、鳥取市教育委員会「第 1 回鳥取市埋蔵文化財展」）、平成 22（2010）年度（財団法人鳥取市文化財団「祝・鳥取自動車道開通 発掘展」）、平成 24（2012）年度の「発掘された日本列島展」の地域展（鳥取県立博物館「鳥取の遺跡発掘クロニクル」展）で公開されてきた。保存処理によって、土付きの状態で観察も容易でなかった遺物群の細部が明らかになった。とりわけ、鉄地金張、あるいは銀張の様子が明らかになった馬具は、大いに目を引いた。



図 1 X 線 CT撮影のようす

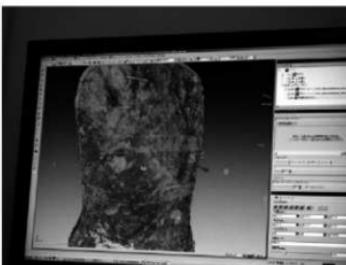


図 2 短甲のX線CT像

上述したように、倭文6号墳出土遺物は、将来的に鳥取県指定保護文化財として位置付けるために遺物の再整理を必要としていたが、折しも、平成18（2006）年度から新鳥取県史編さん事業が始まっており、その資料編に掲載するためにも、古墳時代編が刊行される平成30（2018）年度頃までには、図化などの資料化が進められる必要性が認識された。本書の編集を担当した高田は、2003年度の発掘調査の際に遺物の取り上げ作業を手伝った縁から、既報告にも若干の関わりを持っており、その後、新鳥取県史編さん委員や鳥取市文化財保護審議会委員などに委嘱されていたこともあって、保存処理後の鉄器類一括を預かって実測などの再整理事業を進める任に当たることとなった。

当初は、2013～2015年度の3カ年で実測作業を終える予定であったが、完了できず、2017年度まで延長した。各年度の作業状況は次の通りである。

平成25（2013）年度は、鳥取市埋蔵文化財センターから作業場所である鳥取大学に遺物を移動した。馬具や武器等の鉄器の一部は、ガスパリア袋に収納された上にエアタイトケース内に保管されており、その状態を維持しながら整理作業を継続することが適切と考えられたため、エアタイトケースごと搬入した。その後、九州国立博物館のご協力を得て、短甲、馬具の一部のX線CT撮影を行なって、図化の参考とした（図1、2）。また、既報告や保存処理段階の整理番号と現物を対照し得る適切な遺物台帳がなかったため、その作成を行なった。12月～3月にかけて、観察と図化作業を実施した。図化作業にあたっては、片山健太郎氏（京都大学大学院、日本学術振興会特別研究員）の協力を得るとともに、鈴木一有氏（浜松市）の指導と助言を得た。

平成26（2014）年度は、前年度に調査できなかった杏葉、鉄轍等の遺物について、九州国立博物館のご協力を得て、X線CT撮影を行なった。また、前年度と同様に、片山健太郎氏の助力を得つつ、12月～3月にかけて、観察と図化作業を実施した。

平成27（2015）年度もまた、片山健太郎氏の助力を得つつ、12月～3月にかけて、観察と図化作業を実施した。その間、橋本達也氏（鹿児島大学総合研究博物館）の指導と助言を得た。

平成28（2016）年度からは、観察と図化作業に加えてトレス作業を開始した。また、橋本達也氏より、氏が実施する研究成果（「X線CT調査による古墳時代甲冑のデジタルアーカイブおよび型式学的新研究」：日本学術振興会 科学研究費 基盤研究B）であるX線CT画像の解析データの提供を受け、遺物の観察と図化作業に活用した。

平成29（2017）年度は、報告書作成作業を中心に行なった。また、9月18日～20日にかけて、牛嶋茂氏に依頼して写真撮影を行なった。

参考文献

山田真宏（編）2004『倭文所在城跡・倭文古墳群』財团法人鳥取市文化財団

第2章 古墳の位置と周辺の歴史的環境

1. 周辺の遺跡・古墳群との関係

鳥取平野における古墳時代資料は、従来、編年の根拠を示し得る出土遺物が少なく、かつ、墳丘測量図等の整備も不足しており、十分議論しうる環境にはなかった。古郡家1号墳や、六部山3号墳など、半世紀以上も古くから知られてきた前方後円墳も存在するが、それらの資料であっても、現代的水準で議論するための材料が近年まで整えられてこなかった。しかし、姫路鳥取線整備事業に伴う発掘調査によって、多数の中・小規模古墳の資料的蓄積が飛躍的に進んだ。倭文古墳群もその一つであるが、ここでは、2000年代に入つてから明らかになってきた資料を中心に、周辺の古墳群や関連遺跡を概観し、倭文古墳群がいかなる歴史的環境にある遺跡かを見ておこう。

倭文古墳群（図3-1）が位置するのは、鳥取県東部最大の河川・千代川がちょうど鳥取平野に流入する部分で、東西両側から丘陵が迫つて流路が狹まる位置の左岸丘陵上である。低地には扇状地が広がり、千代川の網状流路が形成された旧中州上に現代の集落が存在する。原始・古代における集落もそのような中州上にあったことが予想できるものの、遺跡としての認識は、山ヶ鼻遺跡（図3-2）、菖蒲遺跡（図3-6）、本高弓ノ木遺跡（図3-4）等の一部しか明らかになっていない。ただし、これらの遺跡からは、縄文時代晚期・古海式土器の段階に当地最古の遠賀川式土器が併存し、イネ、アワ、キビといった栽培穀物が頭在化すること、弥生時代中期葉段階に水稻農耕が一定の定着を見ること等の重要な調査成果がもたらされている（谷口2004、下江・瀬田2013）。服部遺跡（図3-9）は、重点的な発掘調査の対象になったことはないものの、弥生時代中期～後期の土器が出土することが知られており（久保1990）、千代川左岸平野のこの地域一帯に初期農耕社会の営みが存在することは十分に想定できる。なお、倭文遺跡（図3-14）、倭文西ノ畠遺跡（図3-15）はそれぞれ遺跡地図に記載されているが、詳細は不明である。

人間の生活領域としての集落や耕地の状況は不明なもの、墓域である墳丘墓や古墳は、小規模なものを中心であるが、徐々に判明しつつある。弥生時代後期の墳丘墓としては、服部墳墓群（図3-8）で3基の方形墳丘墓の存在が明らかになっている（谷口2001）。弥生時代後期後葉～末にかけて営まれたもので、最大の1号墓でも、 $16.0\text{m} \times 12.8\text{m}$ と小規模である。埋葬施設は一般的な箱形木棺を内包するもので、各埋葬間にほとんど格差が見られないことが一つの類型を示しているとみられる点で重要である。一方、本高弓ノ木遺跡において、削平によって基礎部分しか残存していないために墓と断定されていないが、後期後葉の四隅突出型墳丘墓と目される盛土遺構（700盛土）が検出されている（下江・瀬田2013）。ここからは、鉄刀が出土したという伝承もあるらしい。弥生時代後期には、この地域でも少數の有力な成人のための墓を築くような社会的な統合が進展していたと考えられる。

古墳時代前期になると、本高古墳群（図3-3）、服部古墳群（図3-8）、篠田古墳群（図3-11）、横枕古墳群（図3-12）で小型の方墳が連続的に築造され始める。倭文古墳群もまた、本書で扱う6号墳に先行して、前期の方墳や土壤墓群が築造されている。同じ頃の千代川右岸地域では、美和古墳群（図3-18）が本地域最古相の古墳群として知られている。これらの古墳群を築造した人々の生活圈は十分明らかではないが、本高古墳群に対して本高弓ノ木遺跡、服部古墳群に対して服部遺跡、美和古墳群に対して古郡家遺跡のような居住地と思われる遺跡を想定しうることから、径数kmの比較的狭い領域内に居住地と墓域を合わせ持つ諸集団が存在していたと考えることができる。

古墳時代中期には、編年根拠を明示できる古墳が非常に少なくなる。発掘調査された事例だけではなく、表探遺物や墳丘形態が明らかにされた事例も少ないため、地域最大級の前方後円墳であっても時期を確定でき

ないことが多い。したがって、周辺で調査された小規模古墳の築造時期を参考に、古墳群形成の契機になつたという「前提」で大規模前方後円墳の築造時期を推測しているのが現状である。

例えは、全長80mとも言われる里仁29号墳は、中期前葉に位置付けられる里仁古墳群（中原1985）との連続性を想定して、中期前半までに位置付ける見方が多い（中原1991、君嶋2005、東方2007、2008）。その一方、同一の丘陵上で比較的近くにある全長約90mの前方後円墳・柳間1号墳は、近接する中期前半に置く意見もあれば、中期後半まで下げる見意まであって時期的な評価は定まらない。

倭文古墳群に地理的に近いところでは、横枕13号墳（図3-12、全長70m）、下味野23号墳（図3-10、全長73m）などの前方後円墳が存在しているが、これまでに採集遺物も知られておらず、測量図も作成されていないので、墳形もよくわからない。そうした状況から、同一丘陵に位置する中小規模の古墳群の時期を推測するわけだが、下味野古墳群中の円墳である40号墳からは中期後葉に位置付けられるような独立片逆刺を持つ長頭鎌が出土している他、43号墳の鉄矛も同様な段階に位置付けられる（藤本2002）。また、横枕古墳群では、70号墳、73号墳の中期中葉段階から、26号墳、59号墳の中期後葉段階、36号墳などの後期初頭段階に一定量の武器を副葬する円墳群があり、42号墳や59号墳は、須恵器筒形器台を保有する比較的大型の円墳である。古墳時代中期中葉～後期初頭は、横枕古墳群の一つの盛期と考えられる（山田他2002、谷口2003）。

残念ながら、鳥取平野周辺ではこの時期の古墳の調査例が多くないが、千代川右岸地域の六部山古墳群（平川他1991、谷口他1994、前田他1995）でも中期後半段階に多数の円墳群が築造される状況が見られ、倭文6号墳の築造背景を考える上で重要な手がかりを提供すると考えられる。

2. 倭文古墳群の概要と6号墳の位置付け

倭文古墳群は、2号墳～9号墳までの方墳・円墳とともに、4つの加工段上に営まれた土壙墓群が調査された（図4）。2号墳～5号墳までは、概ね南北方向に伸びる尾根に列状に展開する方墳群であり、古墳時代前期に属す。5号墳は、尾根幅が広がり、平野部を臨む一時的な高まりに位置しているが、その北東隅を一部削り込んで最も高所に6号墳、1mほど低い5号墳の北西裾部に7号墳という2つの円墳が築造され、群中この2基のみが中期末に降る古墳である。

7号墳以下では、尾根の方向が北西方向に変わって下っていく。8号墳、9号墳もやはり前期に位置付けるが、墳形は円墳であり、5号墳までは異なって主要埋葬施設に箱形石棺を採用するなど、時期的に降る要素を持っている。なお、7号墳は墳丘の下層に箱形石棺（第2主体部）が存在し、枕に転用された土器からすると、前期に位置付ける。本来は先行する前期古墳が存在したと考えられるが、下層の古墳の墳形は明らかでない。

9号墳よりも低い位置で尾根上に4面の平坦面が削出され、少ない場合には2基、多い場合には10基以上の土壙墓が営まれている。時期不明のものもあるが、中には古墳群中最古段階に位置づけうる土器が出土する墓もあり、墳丘をもった古墳と並行して営まれた土壙墓群と考えうる。

倭文古墳群は、基本的には古墳時代前期前半～後半にかけて営まれた古墳群であり、方墳から円墳へ、木棺墓から箱式石棺墓へ、といった前期古墳の性格の変化や、古墳に伴う周辺埋葬の性格を検討する上で、非常に重要な情報を提供する古墳群と言えるが、本書で対象とする6号墳は、そうした前史とは一見無関係な形で突如、中期末に出現する円墳である。隣接する7号墳（第1主体部）は、副葬される須恵器からすると、ほぼ同時期で、墳丘規模も大きく変わらないが、副葬品の内容は大きく異なり、鉄器はわずかに劍1本で、

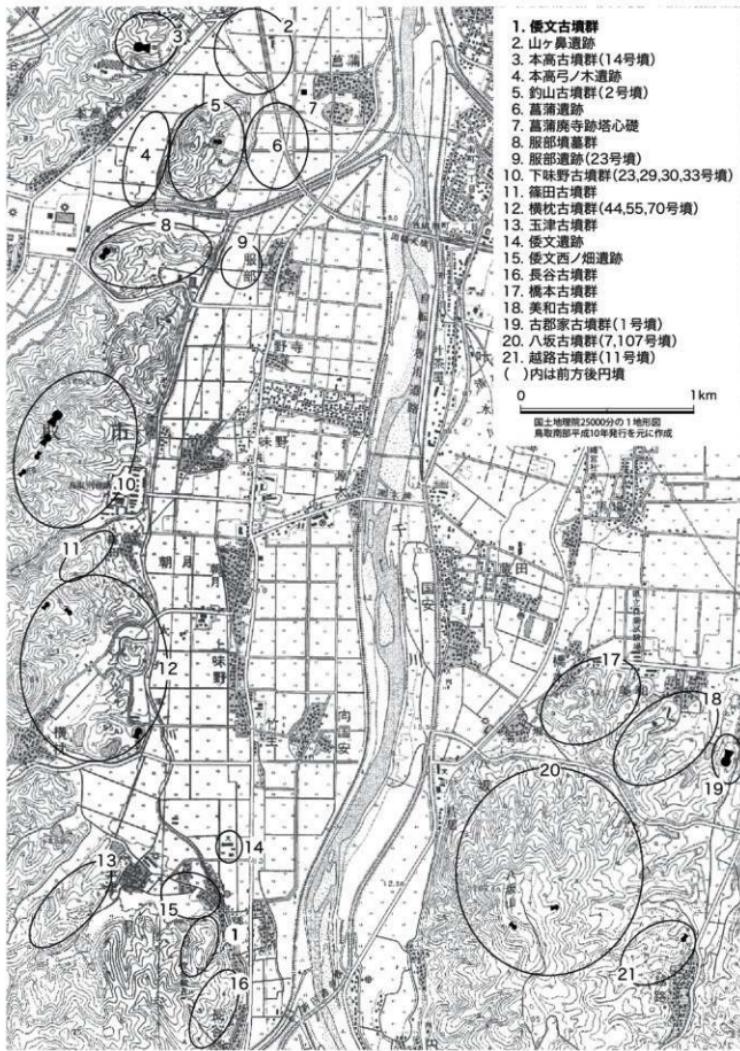


図3 周辺の遺跡分布図

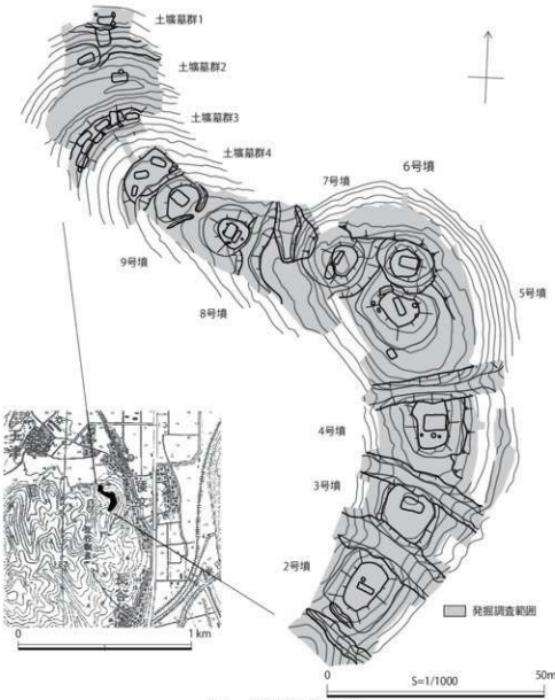


図4 倭文古墳群全体図

よりも、数本樹立される程度だった可能性がある。

3. 遺物の種類と出土状況について

(1) 遺物の種類

出土した遺物は、武器、武具、馬具など多種多様な金属製品と土器、埴輪などがある。本書は、墓壙内出土で、保存処理が行なわれた金属製品を対象としており、その種類と数は以下の通りである。なお、本書の分類・呼称と既報告との対照は、表1（武器・武具・その他）、表2（馬具）に掲げる通りである。

武器

鉄刀	2点（いずれも棺内）
鉄矛	3点（いずれも棺外）
鉄石突	2点（いずれも棺外）
鉄鎌群A	一括（棺外、57本）
鉄鎌群B	一括（棺内短甲内、45本+α）

少量の玉類がこれに伴うのみである。6号墳は同一地点内の他の古墳とは時期が異なるというだけでなく、規模に似つかわしくない豊富な武器武具をもつ点で、特異な存在であると言える。また、古墳群中における立地の点でも、尾根線端部の最高所に位置し、平野を一望しうる点がその性格を考える際に重要であろう。

6号墳の墳丘規模や構造について、改めてまとめておくと、径13.0mの円墳で、丘陵斜面側に幅3.5mの周濠が伴う。傾斜面に盛土が施されて、厚いところでは約2mを測るが、薄い部分では0.5mほどである（図5）。墳頂部のほぼ中央に、概ね東西方向を長軸として、長さ4.25m、幅2.55mの墓壙が掘られ、その中央よりもやや北寄りの位置に棺が置かれたと考えられる。墳丘上からは、円筒埴輪のほか、人物埴輪と考えられる形象埴輪の破片が出土している。量が少ないので、墳丘に巡らすという

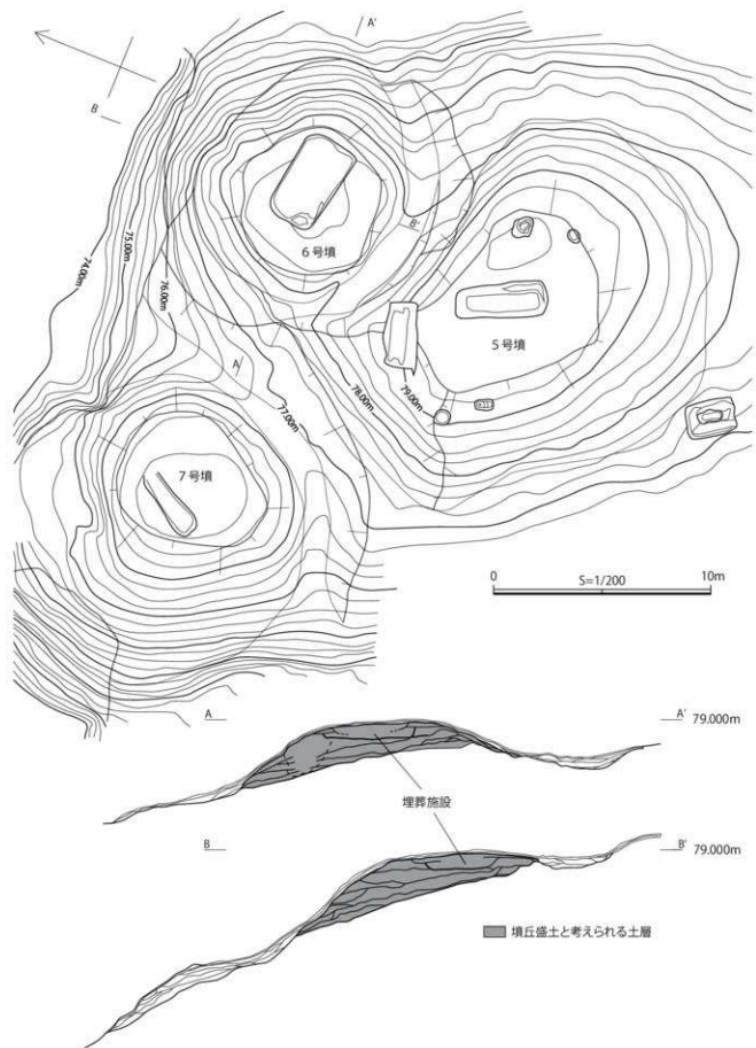


図5 倭文6号墳の墳丘平面図・断面図

矢柄漆膜	一括（棺外、土ごと取り上げ、鉄鎌群Aに伴うもの）
武具	
三角板頭留短甲	1点（棺内）
横矧板頭留衝角付胄	1点（棺内短甲内）
小札革縦鏡	小札一括（棺内、小札 61 点 + α ）
小札革縦頬当（右）	1点（棺内、小札 44 点 + α ）
小札革縦頬当（左か）	小札一括（棺内、小札 27 点 + α ）
馬具	
f字形鏡板付轡	一括（棺外）
面繫	一括（棺外、方形金具 10 点）
木芯鉄板張輪鎧	1点（棺外）
鞍	一括（棺外、鞍金具 1 点、銚 8 点）
尻繫	一括（棺外、剣菱形杏葉 3 点、銚具 1 点）
その他	
刀子	1点（棺内）
鉗	1点（棺内）
不明鉄製品	1点（棺内か）

(2) 遺物の出土状況と棺の推定

遺物は、墓壇上、墓壇内棺外、棺内の 3箇所に分れて存在したということは既報告に記される通りである。ここでは、保存処理や再整理作業を経て、新たに器種（機能）が判明するものやセット関係が明らかになるものを含んでるので、改めて遺物の出土状況を整理しておく（図 6）。

まず、墓壇上から出土したと考える遺物には、土器類がある。須恵器壺や、土師器高环・甕は、墓壇の検出面に近い標高 78.5m 前後のところで検出されている。そこから 10cm ほど掘り下げた位置で墓壇内棺外遺物がある。これらは、既報告の出土状況図をみると、高低差もあるようだが、概ね標高 78.3 ~ 78.4mあたりの同一の平面上にあると考えられる。棺の北側に並べられたような状態で出土した遺物は、東から鉄矛 1、鉄鎌群 A、石突 2 があり、鉄鎌群の西側に面繫を構成する方形金具 10 点がある。これらは、後述するように、左右 2 点の十字金具がほぼ原位置を保っていたと考えられる。方形金具の西側に f 字形鏡板付轡が存在する。

轡からやや離れて、西側には鞍が存在したと考えられる。鞍金具が 1 点存在する他、鞍に打たれていたと考えられる銚が少なくとも 9 点存在する。これらの出土位置は後輪に該当すると考えられる。

鞍の西側には尻繫を構成する剣菱形杏葉 3 点の他、銚具 1 点が出土している。また、木芯鉄板張輪鎧の部材 1 点が杏葉に隣接して出土しており、これと対になる鎧の部材ではないと考えられるものの、銚付きの鉄片がやや西側に離れて出土している。さらに杏葉の南側に鉄矛 3 が切先を西

表 1 本書と既報告の対照

	本書	既報告	備考
武器	鉄刀 1	第 30 図 - 6	
	鉄刀 2	第 30 図 - 7	
	鉄矛 1	第 31 図 - 13	
	鉄矛 2	第 31 図 - 14	
	鉄矛 3	第 31 図 - 15	
	石突 1	第 31 図 - 16	
	石突 2	第 31 図 - 17	
武具	鉄鎌群 A	第 30 図 10, 11	棺外
	鉄鎌群 B	図なし	棺内
	三角板頭留短甲	図なし	
武具	横矧板頭留衝角付胄	図なし	
	小札鏡	図なし	
	小札頬当	図なし	
その他	刀子	第 30 図 - 8	
	不明鉄製品	第 33 図 - 35	
	鉗	第 30 図 - 12	

に向けて出土しており、これは、東側の石突2と組み合わせになると考えられる。

同じく棺外出土ながら、これらと同じ平面には置かれなかったものが、鉄矛2と石突1である。棺の南側に置かれていたと考えうる。

棺内と考えられる遺物は、東から、鎧、刀子、鉄刀2、鉄刀1、三角板鎧留短甲(短甲内に鐵鎌群B、横矧板鎧留衝角付肩、小札鎧)、小札頬当(右)である。鉄刀と短甲の間に小札が散在しているが、これは、鎧と小札頬当(左)と考えうる小札が混在している。鎧、刀子、鉄刀2本、短甲に囲まれた範囲が、被葬者の位置であろう。

棺底部は、短甲の後脛部の接地面レベルや鉄刀の出土レベルを見ると、78.1m前後と思われる。その部分の土層下面が円弧をなしていること、鉄刀の出土状態を見ると、棺内に向けられた刃部がやや下向きになること、断面図に現れる人頭大の礫が棺の固定に使用されたと考えうこと。などを勘案すると、棺の形状は断面が円形ないしは楕円形の倒抜式木棺であった可能性を考えうる。幅は80cmほどを想定できる。棺の長さを知る直接的な手がかりはないが、棺内東部で出土した鎧や刀子の位置が、およそ被葬者の頭部にあたると考えられ、墓壙内に均等に棺が配置されたと仮定すると、およそ3mの規模を想定することになる。

(3) 棺内の遺物出土状況

被葬者の頭部と考えられる位置で鎧と刀子が出土している(図7)。棺の長軸方向の中心と考えられる位置よりも北側に鎧があり、被葬者の頭部右側に当たると考えられる出土位置は、前期古墳とも共通する。刀子は茎を東に、切先を西に向けて、やはり被葬者の頭部付近から出土したようである。棺内の南側(被葬者の左側)から鉄刀1が出土しており、切先を西、刃部を北側(被葬者側)に向けている。一方、棺内の北側(被葬者の右側)からは鉄刀2が出土しており、切先を西、刃部を南側(被葬者側)に向けている。

被葬者の足元と考えられる位置、棺内の西側に三角板鎧留短甲が横位で出土している。押付板側が東、裾側が西、前脣が上に向けられた状態である。

短甲内には、鐵鎌群Bが切先を西に向けて、差し込まれた状態で出土した。東の状態を保っており、何ら

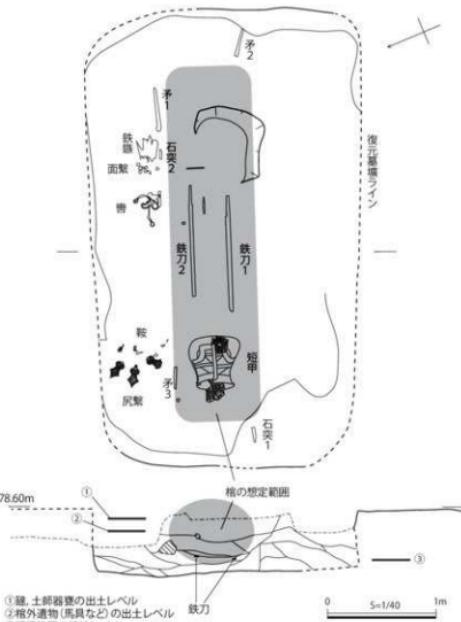


図6 遺物出土状況と棺の推定位置

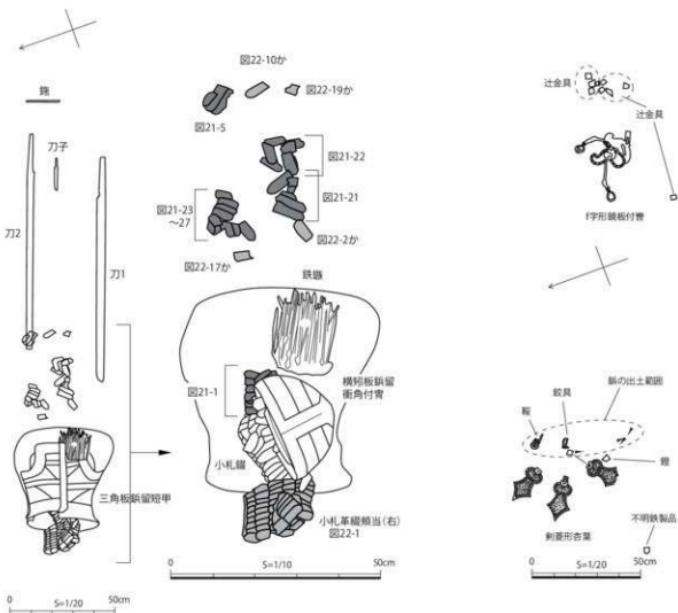


図7 棺内の遺物出土状況

図8 馬具の出土状況

かの盛矢具に収められた状態だったと考えるが、金属製の部材が伴うものではないようで、かつ、編物や木などの痕跡も鎌や短甲の表面にも残っていない。ただし、鐵鎌群周辺の短甲内面は黄褐色を呈する付着物が存在しているため、革製の盛矢具に収められていた可能性が考えられる。短甲外に矢柄が伸びていたと考えられるが、漆膜など矢柄に関する遺物はない。

短甲の胸内部には、横矧板鉢留衝角付冑が衝角部を上に、頂部を南に向けた状態で入れられていた。短甲内に押し込むために前後が潰されたようで、本来の形状から歪んでいる。小札革縫は3段構成だったと考えられるが、後述するように、背からは外されてその一部は内側に折りたたまれていたようである。調査後の遺物整理、保存処理の段階で外され、現状では銹着した10枚のみ短甲内面に残っている。

衝角付冑の西側、短甲の裾部から外側にかけて、小札頬当が内面を上に向けて出土している。後述するように、これは右用である。表面からみて左上部（装着状態で前面上部）の破片が内側に重ねられていた。

短甲の東側で小札が散在して出土している。これらは攪乱などによって本来の出土状態が乱された可能性を考える。既報告では左頬当と考えられていたが、再整理の結果、多くは鎌の小札と考えられる。ただし、頬当の小札と考えられるものも少数ある。

(4) 棚外の遺物出土状況

棚外には、武器として矛3点と鉄鎌群A、馬具一式があった。矛2、石突1が棚外の南側から出土している以外は、棚の北側の空間に並べられたように、矛1、3、石突2、鉄鎌群A、馬具一式が出土している。石突2は棚外西側から出土した矛3と組み合うもので、矛1は石突を作わない。鉄鎌群Aの東側では、約60cmほど離れた位置に矢柄に塗られたものと考えられる漆膜が存在する。位置と漆膜の大きさから判断すると、本剣と考えられよう。

馬具は、東側から面繫を構成すると考えられる辻金具、『字形鏡板付轡が近接して存在する（図8）。辻金具の一部は遊離して轡の南側から出土しているが、基本的には本来の位置関係を保っている。轡から約1m西に離れた地点で鞍を構成すると考えられる鞍金具、飾鉢が出土している。詳しく述べるが（第III章3（3））、これらは木製の鞍の後輪に伴う金属部品と考えられる。轡とこれらの間にある空間には、本来は有機質でできた馬具が伴っていた可能性は高い。

鞍の西側には、剣菱形杏葉3点が扇形に広げたように出土している。鍔具の一部もこの周辺から出土しており、尻繫を構成する部材が並べられていたものと考えられよう。輪轡に付属する鉄板が1点杏葉の近くから出土しているが、副葬時の原位置を保ったものか、移動した可能性があるのかはわからない。全体として、実際の馬装を模擬したような配置となっているため、鍔は本来轡と鞍の中間地点に置かれていた可能性も考えられる。

引用・参考文献

- 大川泰広（編）2010『本高古墳群』鳥取県教育委員会
君嶋俊行 2005「因幡・伯耆における首長墳の消長」『前半期の首長墳の消長』第10回中国・四国前方後円墳研究会
久保種二郎 1990「弥生時代の集落立地について -鳥取平野とその周辺の場合-」『鳥取県立博物館研究報告』第27号
下江健太・濱田竜彦（編）2013『本高弓ノ木道跡（5区）I』鳥取県教育委員会
谷口恭子（編）2001『服部墳墓群』財団法人鳥取市文化財団
谷口恭子（編）2003『横枕古墳群II』財団法人鳥取市文化財団
谷口恭子・前田均（編）1994『六郎山古墳群』鳥取市教育福祉振興会
中原齊（編）1985『里仁古墳群』財団法人鳥取県教育文化財団
中原齊 1991「因幡」『前方後円墳集成（中国・四国編）』山川出版社
東方仁史 2007「因幡・伯耆」「前半期の中の画期」第11回中国・四国前方後円墳研究会
東方仁史 2008（編）『因幡・伯耆の王者たち』企画展図録、鳥取県立博物館
平川誠・前田均 1991『六郎山古墳群発掘調査概要報告書—六郎山5・41・42・43・44号墳の調査一』鳥取市教育委員会
藤本降之（編）2002『下味野古墳群I』財団法人鳥取市文化財団
前田均・谷口恭子（編）1995『六郎山古墳群II』財団法人鳥取市教育福祉振興会
山田真宏・神谷伊鶴（編）2002『横枕古墳群I』財団法人鳥取市文化財団

第3章 遺物各説

1. 武器

(1) 鉄刀 (図9, 卷頭図版8下, 図版1, 2)

鉄刀1 柄の南西側から出土した鉄刀である(1)。現存長は108.0cmであるが、切先を復元すると109.0cmとなる。茎長は20.0cmを測る。刀身幅は3.5~4.0cmあり、幅広である。直角片闊で茎の幅は2.3~3.3cmである。X線写真によって、方形の茎元抉が観察できる。

鞘および柄木が良好に遺存している。鞘木は2枚合わせであるが、柄木の残存部との間に幅1cmほどの別材の痕跡が観察され(図版1下), 鞘口にはめ込まれていた可能性がある。また、全体に漆膜が遺存して塗り立てられたことが知れる(図版2上)。既報告では、「何らかの帯状の巻き締めの上に塗布されているよう」であり、表面には縫い目状のものも観察されていたが、保存処理後の再整理の段階では、そうした痕跡は見出せなかった。

柄木もまた2枚合わせで、茎落とし込み式である。目釘孔が3つあり、木製の目釘が通る。茎の背側には、いわゆる二本芯並列コイル状二重構造糸巻き(沢田2015)の痕跡が残るが、残存状況は良くない。

鉄刀2 柄の北東側から出土した鉄刀である(2)。現存長は104.0cm、茎長は19.7cmを測る。切先は欠損しており、本来はもう少し長いと思われる。刀身幅は2.5~3.8cmあり、1に比べて細身である。直角片闊で、茎尻に向かってやや幅を狭める。

鞘、柄ともに木質が良好に残存するが、鞘には漆膜が見られない。明確な痕跡に乏しいが、布と考えうる付着物が観察できることから、刀2の鞘は布巻きであった可能性がある。また、闊の部分で鞘木と柄木の境界が観察でき、合口式と考えられる。

柄は、やはり2枚合わせで、茎落とし込み式である。目釘孔が3つあり、円筒形の木製目釘が観察できる(卷頭図版8下)。柄には、二本芯並列コイル状二重構造糸巻きが施されており、部分的には良好に残っている(図版2下)。

(2) 鉄矛 (図10, 卷頭図版7, 図版3, 4)

鉄矛1 柄外北東側に置かれた鉄矛1(1)は、全長39.7cmを測り、刃部長22.5cmである。矛身は鎌のない剣身状で、最大幅3.8cmを測る。闊はナデ闊である。袋部断面は楕円形で端部に山形の切込みが入る。切り込み部の幅は3cm、深さは2cmである。袋部内には柄木が遺存し、径は約2.5cmである。

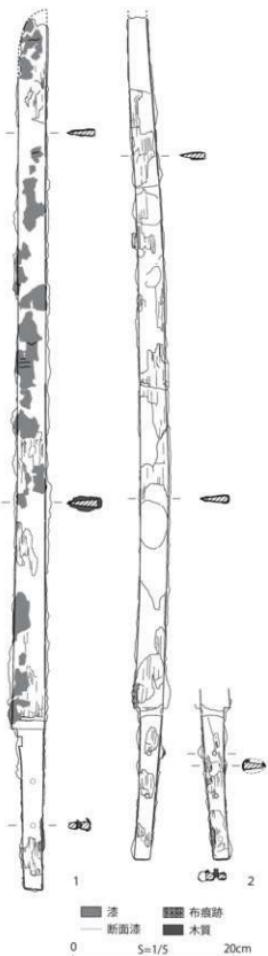


図9 鉄刀実測図

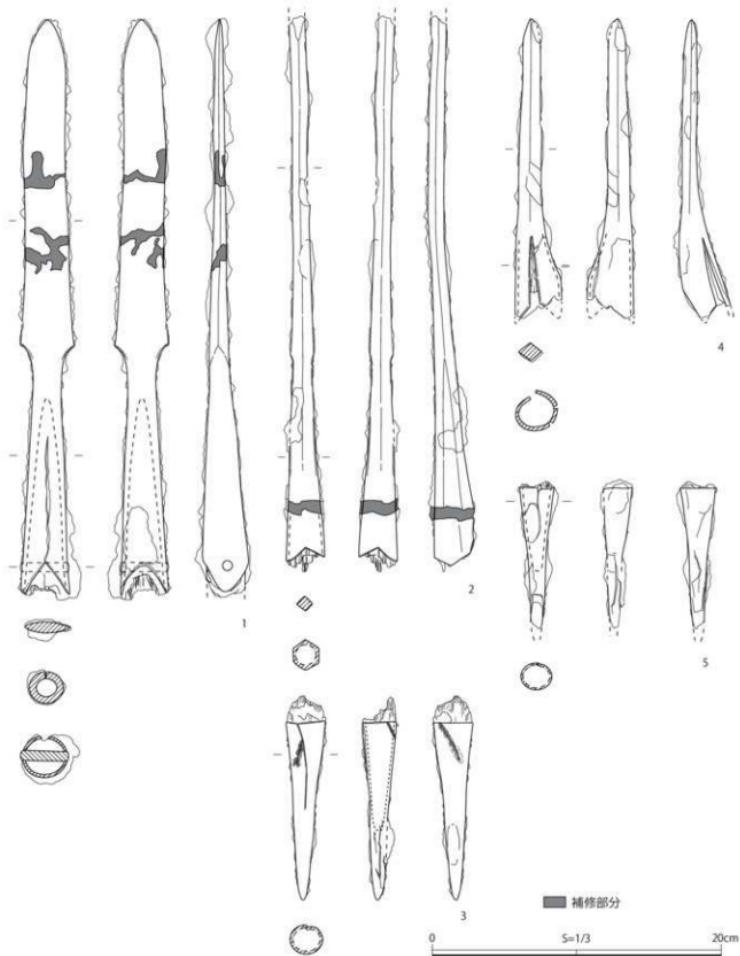


図 10 鉄矛実測図

袋部の下端から2cmほどの位置に、矛の長軸に直交して長さ3.2cm、径6mmの鉄製目釘が貫通する。

鉄矛2 鉄矛2は先端を欠失しているが、現存長は37.6cm、刃部長23.5cmを測る(2)。小さなナデ闇が認められる。矛身断面が正方形に近い菱形で、袋部断面は6角形をなす。袋端部に山形の切込みが入り、袋

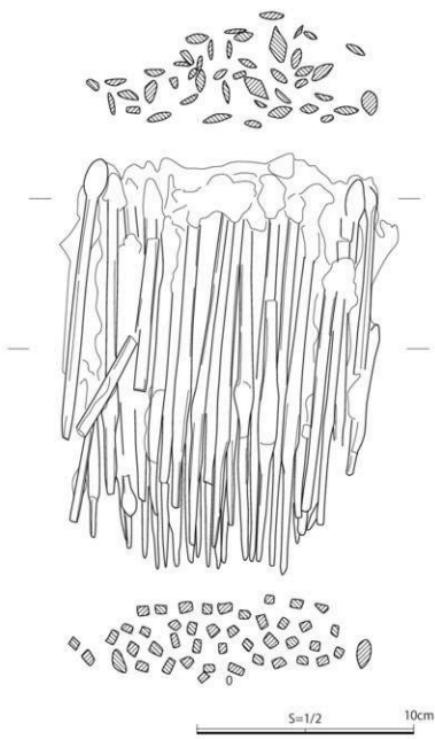


図11 棺内出土の鉄鎌実測図

れる。袋部内には木質が遺存している。

石突2 矛3とセット関係にあると考えられる石突である。先端が欠失し、現存長は9.7cmを測る。袋部断面は円形であるが、閉じ合わせ部の鉄板が一部重なっている。端部は断面方形の加工が施されている。部分的に膨らむように見えるが、本来の形状ではなく、鍛による膨張の可能性が高い。表面には布の痕跡が一部に残っており、組み合う矛身と同様に布が巻かれていた可能性がある。袋部内には木質が遺存している。

(3) 鉄鎌と矢柄漆膜 (図11～13、図版4～6)

棺内出土の鉄鎌 棺内出土の鉄鎌は、すべて短甲内に入れられた鉄鎌群Bである。これは、短甲内に鍛着したままの状態で保存処理が行なわれ、取り出せない。そのため、X線CT画像をもとに観察と図化を行なった (図11、図版5、6)。

部内に柄の木質が遺存している。袋部の外面に有機物の付着が認められるが、全面に広がるわけではなく、ごく部分的であることから、鞘などとは考えにくい。

石突1 鉄矛2とセットになると考えられる石突1は、全長12.5cmを測る(3)。鉄矛2と石突1の先端間の距離は3.86m程度で、これが矛の全長と考えられる。袋部断面は円形で、柄木が遺存する。厚さ2mmほどの鉄板を円錐形に巻いて袋部を形成しているが、端部を部分的に重ねているようである。保存処理後には、重ね部に鳥の羽根が1枚鍛着していることが観察される (巻頭図版7下、図版4上)。羽根は、幅1cm、長さ3～4cm程度で、羽軸は径1mmほどで小さい。これの裏面のほぼ同じ位置にも同様な羽根が1枚鍛着しており、石突の上部には羽根飾りが付いていたと考えられる。

鉄矛3 棺外北西側、杏葉の南側に置かれたもので、全長20.6cmを測る。身幅は、1.0cm～1.8cmを測り、断面が正方形に近い菱形をなす。身の一部には、幅1cmほどの布が巻かれており、切先にも布の痕跡が残る。本来は布巻きだったのだろう。

袋部長は6cm程度と考えられるが、鍛彫によって亀裂が生じ、全体的に変形している。袋部断面は本来円形と考えら

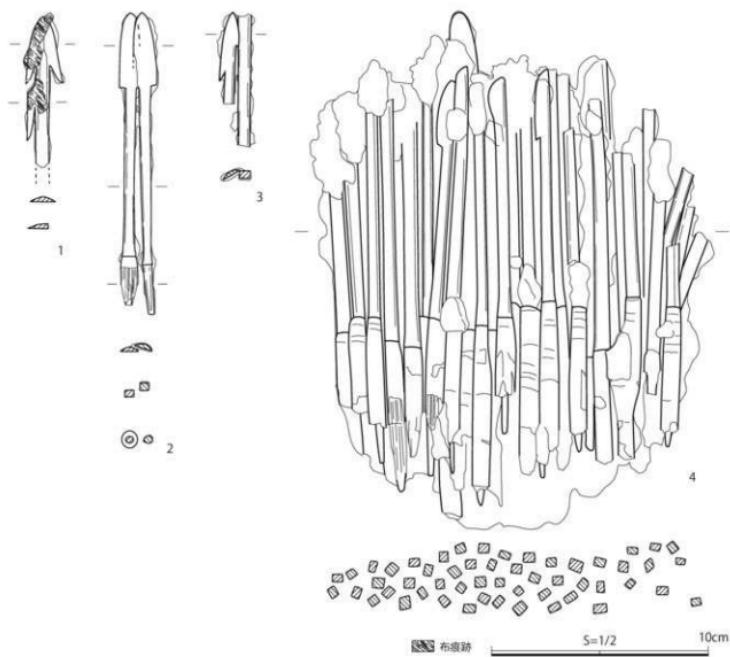


図12 棺外出土の鉄鎌実測図

鎌身部は、銹などの付着物のため、X線によっても詳しくその形状を明らかにできないが、柳葉形と考えられる。全長は18cm、頭部長8.5cmの長頸鎌で、判明する限り、柳葉形1種のみで構成されているようである。鎌身先端部、および頭部で作成されたX線CTによる断面図からは、それぞれ、45本ないし44本を数えることができる。先端部は銹剥れなどによって断面形が不明確なものを含むが、遺存状態が良さそうな部分を参考にすると、片丸造と考えうようだ。

頭部断面を見ると、4列ほどの並びを観察でき、何らかの盛矢具に収納されていたと考えられる。ただし、鉄鎌群に伴う金属部や木質の痕跡などは見出せない。その一方、短甲内の鉄鎌周辺では、黄褐色を呈する有機質の付着を認める。このことから、革製の鞘が存在した可能性を考えうる。

棺外出土の鉄鎌 棺外から出土した鉄鎌は、切先を東に向け、轡、辻金具などと同じ位置に置かれていた鉄鎌群Aである。鉄鎌群Bと同様に、銹着したままの状態で保存処理されているが、出土時の下面が裏打ちの布で補強されているため、現状では出土時の上面しか観察できない。既報告では、この集合から遊離した数本が図化されていたが、今回新たに束状になった状態のまま図化した(図12-4)。X線CT画像によつて断面を観察すると、53本存在するようであり、これから遊離して鎌身部が存在する1~3の4本を合わ



図 13 矢柄漆膜側面の立ち上がりと小孔

せると、全体としては 57 本あったと考えられる。

切先部は錆が多く、X 線によっても個々の鐵身の形状を明らかにし難いが、観察できるものの中には片刃形と柳葉形の少なくとも 2 者があるようだ。調査中に鐵鎗群から遊離したものの中は、既報告でも図示されているが、そのうち 1 点は独立片逆刺をもつ(1)。鐵鎗群中にこれ 1 本のみであり、この鎗にのみ布の痕跡が遺存することからすると、鐵鎗群 A の最上面に置かれていた可能性もある。独立片逆刺は甲冑との共伴例が多く、多数の通有の長頭鎗に 1 ~ 数本添えられる例が多いことなどから、儀仗的な性格を持つ特殊な位置付けが想定されているが(鈴木 2003), その一例と言えよう。

2 は柳葉形の鎗身をもつもので、全長 13cm 前後、頭部長は約 8 cm ある。3 は段違間をもつと考えられるものである。いずれも鎗身部は片丸造である。

矢柄漆膜 柏外の鉄鎗群 B に伴うと考えられる漆膜がある。土ごと取り上げられ、現状は 35cm × 25cm の箱の中に収められている。基本的には、径 1cm ほどの円筒状をなすと考えられ、本来の長さかどうか不明なもの、最も長いところで 15cm ほどある。矢柄に塗られたものと考えてよいであろう。漆膜は、矢柄表面と考えられる部分では滑らかであるが、潰れた側面にあたる部分にごく狭い幅で立ち上がる面が認められ、その面には一定間隔で小孔が観察できる(図 13)。位置的に矢柄の本崩にあたると考えられることから、この漆膜の立ち上がり面と小孔は、矢羽の痕跡である可能性が考えられる。漆膜の裏面が観察できる場所がないので、確定はできないが、矢羽・すれば、潰れた側面にのみこのような特徴が観察できることからすると、2 枚羽となる可能性があろう。

2. 武具

(1) 三角板銛留短甲(図 14 ~ 18, 卷頭図版 2, 3, 図版 7 ~ 16)

全体の構成と法量 全体の構成は前胴・後胴とともに 7 段構成をとる(図 14)。右脇に蝶番板があり、後胴に上下 2 つ、前胴側に上下 2 つ、合計 4 つの方形の蝶番金具が付属する右前胴閉闇式である。ただし、現状で前胴上側の蝶番金具は欠失しており、後胴下側の蝶番金具も一部欠損している。

橋本達也が示した部分名称(橋本 2012)にしたがって短甲の鉄板構成を示すと、堅上板 2 枚、押付板 1 枚、引合板 2 枚、裾板 3 枚、蝶番板 1 枚、上段帶金 3 枚、下段帶金 3 枚、上段地板 5 枚、中段地板 9 枚、下段地板 8 枚で、合計 37 枚となる。左前胴の堅上板と上段地板にそれぞれ一部欠損がある他は、全体的によく遺存している。現状で胴内に横別板銛留衝角付冑、小札鎧、鉄鎗が銛着しているが、X 線 C T 画像などを参考に、短甲だけを抽出した図を作成した(図 15 ~ 18)。

前胴高 36.0cm、後胴高 45.0cm、押付板左右幅 47.0cm、裾板下端左右幅 35.0cm、前後幅 32.0cm を測る。厚さ 1.5mm 程度の鉄板を使用しており、連結に用いられる釘は、釘頭径が 4 mm 程度の小型である。前胴 左右ともに同じ地板構成で、堅上板と上段帶金の間は 1 枚の横別板、上段帶金と下段帶金の間は三角板 2 枚、下段帶金と裾板の間も三角板 2 枚である。左右共に引合板を接続し、右前胴の蝶番板を合わせると、21 枚の鉄板で構成される。中段地板と下段地板の分割線が描く图形が「鼓形」にも、「菱形」にもならず、長方形にもならない Z 型(鈴木 2008)とされるものである。ワタガミ受緒孔や腰緒孔は、X 線写真でも観

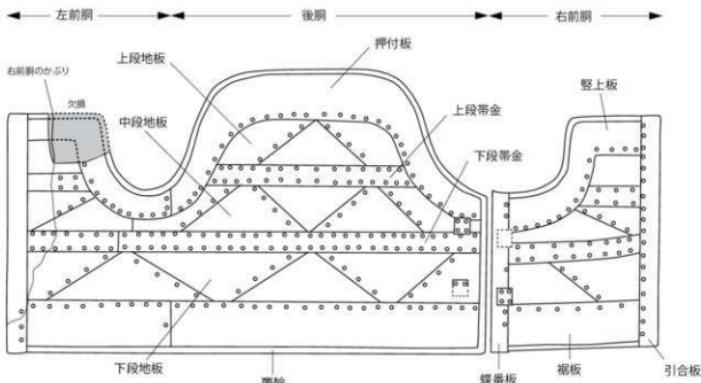


図14 三角板紙留短甲の部分名称及び展開模式図

察できない。

引合板の大きさは、右が長さ 36.0cm、幅 2.6cm、左が長さ 36.0cm、幅 3.0cm である。どちらも引合部側の角を丸く加工する。また、引合板の連接位置を帶金との関係でみると、滝沢誠の A 類（滝沢 1991）、すなわち、引合板を地板だけでなく帶金とも連接し、かつ、帶金幅の中央に 1箇所、帶金を挟んで上下の地板側にも 1箇所ずつ鉄留する方式と考えられる。これは、革縫短甲における縫じの位置を踏襲したもので、鉄留による連接方法としては最も古相を残す方法と言えよう。結果として、引合板には 15 鉄打たれている。

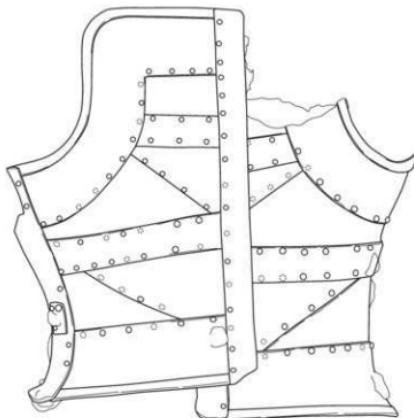
蝶番板は長さ 23.0cm、幅 3.5cm で、側面のカーブに沿って弓なりとなる。豊上板と裾板に対しては 2 鉄で留めているが、その中间は下段地板に対して鉄 1 つで留めているようである。

X線 CT の解析画像によって、前脚の重なりを分離して左右の前脚を個別に図示することは可能だが、図 15、17 には誘導した現状を示す。卷末図版に X線 CT の解析によって、右前脚と左前脚を分離した図（図版 7）を示した。

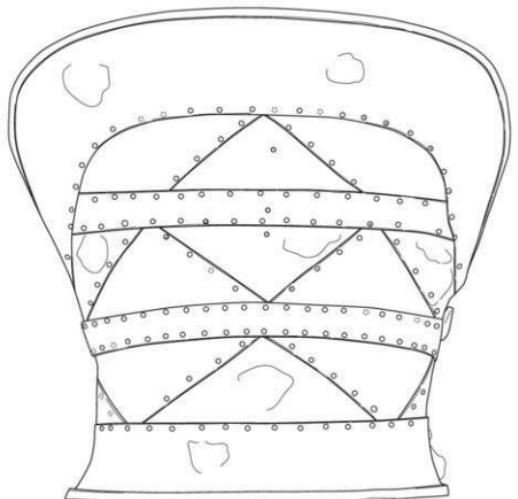
後脚 地板構成は、上段 3 枚、中段 5 枚、下段は左脇部も含めると 5 枚である。三角板の斜辺部の連接はどの場所も 4 新使用しており、一見して鉄数が多い印象を与える。これも三角板革縫短甲との共通性が窺える要素であろう。また地板の各辺が平行して描い、均整がとれている。上段帶金の連接数（鉄留数）は 14 と多い。この点は鉄留短甲の中でも古い段階のものと共通した特徴である。しかし、従来から古く位置付けられてきた事例は、閉閉装置を持たない胴一連タイプか、左右両開きタイプであり、右前脚閉閉式の本例は、その点で新しいと言える。また、特に下段の地板枚数が少ない点は、時期的に下る要素と言えよう。

押付板と豊上板は、左脇部のやや後方で豊上板を上重ねして 2 鉄で連接している。裾板もほぼ同じ位置で、前脚側を上重ねして連接しているが、裾板は鉄 1 つで留めているようだ。

X線による観察では、上段中央の地板、上段帶金の中央、中段中央の地板にそれぞれ 1 つずつ穿孔が認められる。孔はほぼ縦 1 列に並び、後二者はワタガミ懸緒孔と考えられるが、上段地板中央の孔は機能がよくわからない。上段地板の左右に本来は横並びのワタガミ懸緒孔が存在するはずであるが、X線写真でも判別できなかった。



前胸



後胸

0 S=1/4 20cm

図15 三角板紙留短甲実測図(外面・前後)

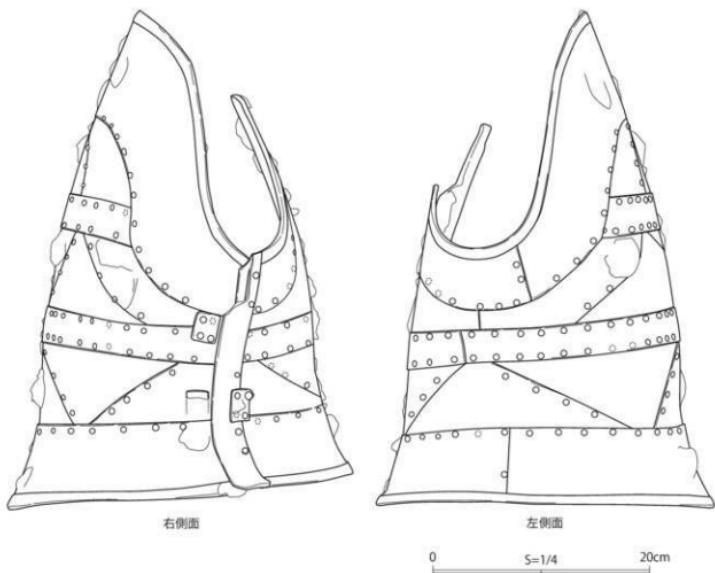


図16 三角板紙留短甲実測図（外面・左右）

覆輪 全面的に鉄包覆輪と考えられる。覆輪の幅は1.0cmを測る。X線写真の観察からすると、裾部の覆輪は、上部に比べてやや厚くなっているようである。

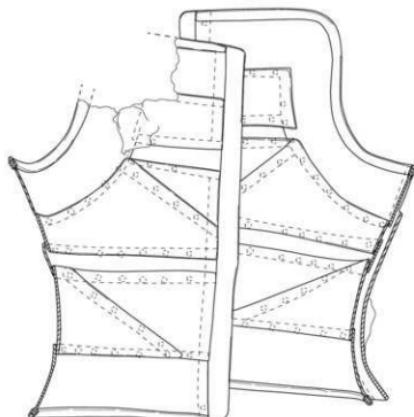
蝶番 蝶番金具が右側面の前胴と後胴に2つずつ存在したと考えられる。前胴側は、蝶番板に接続されているが、後胴側は短甲に直接付属する。前胴側の上部と、後胴側の下部は欠損するが、いずれも方形4鎖と考えられる。

内面 上述したように、内面には衝角付冑などが銹着しているので、肉眼で内面の観察が困難であるが、X線CTの解析画像では、地板鉄板の形状などが比較的よくわかる（図版11～16）。ここでは、それらの画像を参照しつつ、観察した結果を記す。

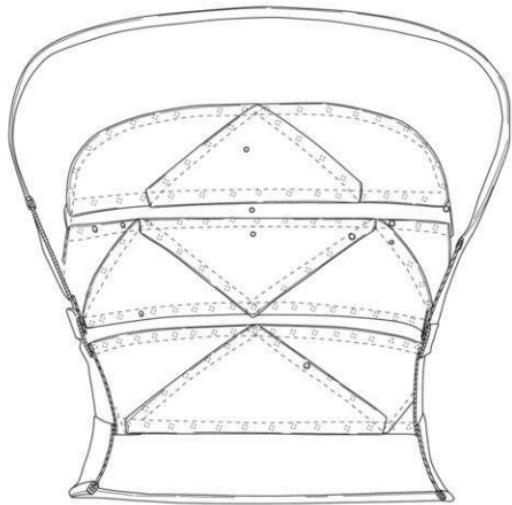
まず、地板鉄板の形状は、外面に現れる地板の形状にほぼ近似するように仕上げられており、裁断の程度が少ない。外面で三角形になる地板は、最も長い底辺側の2つの角がカットされて5角形を呈するが、頂点側の角は丸くなったり、カットされて6角形になることはないようである。そのため、最も鐵板が重なる後胴下段帶金の中央は、帶金と地板3枚の4枚重ねを留めている可能性が考えられる。内面で鉄脚部がどのように処理されているか観察できる部分はあまりないものの、扁平に潰されているようだ。

また、堅上板や押付板のカーブを描く部分は、うまくカーブに沿うように裁断されており、作りは非常に丁寧と言える。

現状では、短甲に伴う布、革などの有機物の付着は認められなかった。



前胴



後胴

0

S=1/4

20cm

図17 三角板紙留短甲実測図（内面・前後）

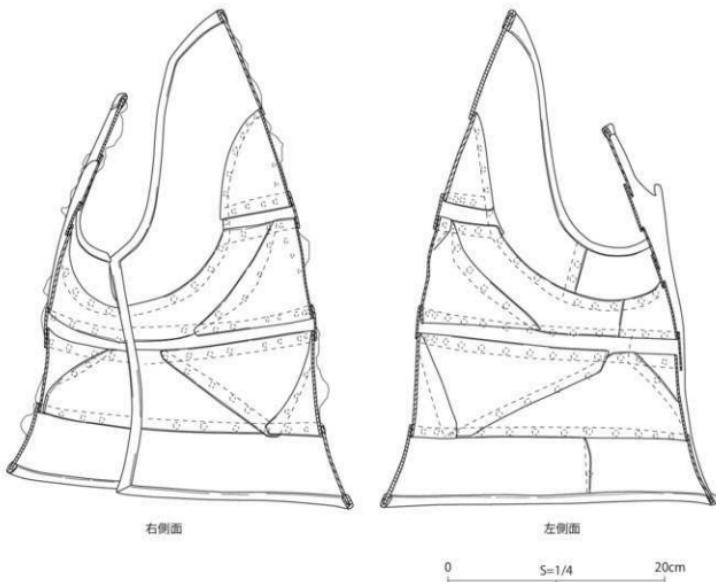


図 18 三角板鉢留短甲実測図（内面・左右）

編年の位置 鈎頭径が小さく、後胴上段帶金の連接数が13以上あること、引合板の連接方式がA類であることなどからすると、滝沢分類のI a式に位置付けられ、最古型式の鉢留短甲となる。福岡県・稻童21号塙や大阪府・野中古墳7号短甲などが参照しうる例となる。これらは、TK73～TK216型式段階のものと考えられている（滝沢1991、橋本2005、鈴木2014）。

一方、開閉装置の系統差、地板裁断方式、共伴する冑や頭甲など様々な要素を加味して鉢留短甲の段階設定を行なった川畑純の研究（2015）では、最も古い段階に位置付けられるのは、長方形2鎖の蝶番金具を持つ両開きタイプで、方形4鎖で右前胸開閉のものは1段階遅れると考えられている。氏の位置付けでは、鉢留短甲の出現は、革綴段階も含めた短甲全体の変遷を12期に分割した内の6期とされ、倭文6号墳例は8期とされている。ただし、やむを得ないことは言え、氏の本例に関する情報は既報告に掲っていると思われ、編年上の要素が「不明」とされている部分がある。不明とされた地板形状を「裁断（小）」に、後胴上段帶金の連接数を「14+14」に変更し、鈎頭径を「中」から「小」へ訂正すると、7期段階のものとみなして良いものとなる。これは、上記した2例などと同じ段階であり、やはり最古段階に属する一例だと評価できよう。後述する衝角付冑やその付属具、あるいは馬具がTK23～TK47型式段階で比較的まとまりを持つのとは異なって、時間的に隔たるものであり、伝世の可能性も含めて検討すべきであろう。

(2) 横矧板鉄留衝角付冑（図 19, 20, 図版 17～22）

概要 冑は短甲の内部に銹着しており、取り外しができない状態にある。構造等の詳細確認や、図化にあたっては、X線CTのデータを活用している。とくに図面については、データをもとにした三次元画像を正位置に表示し、その画像をもとに製図を行なった。X線CT画像を通じて本例の詳細をうかがうことができたが、短甲と接している衝角部右側と後頭部左側を中心に不明瞭な箇所がある。

全体の構成と寸法 本例は、伏板、上段地板、胴巻板、下段地板、腰巻板、衝角底板で構成される5段構成の横矧板鉄留衝角付冑である。伏板1枚、上段地板2枚、胴巻板1枚、下段地板1枚、腰巻板1枚、衝角底板1枚の合計7枚の部材で構成される。短甲の中に立てかけた状態で副葬されていたため、冑の前後方向に圧力がかかり、後頭部の腰巻板を中心いて変形している。以下、この報告で示す寸法は、変形した状態で正位置に据えた際の計測値である。本例の全長は23.9cm、豎眉庇を含めた高さは15.8cm、冑本体の高さは13.5cm、左右幅は22.4cmである。

使用鉄 本例の部材結合に用いられている鉄の頭部は、直径約4mm、高さ約2mmで円頭形を呈している。鉄脚は観察しにくいものが多いが、直径3～4mmほどのつぶれた円形を呈しているものとみられる。用いられた鉄の正確な数は不明であるが、推定で146と捉えている。横矧板鉄留衝角付冑としては使用する鉄の数がやや多い事例とえよう。

伏板 伏板は幅10.8cm、長さ19.6cmで杓子形を呈している。頂部は流麗な曲線を描いており、やや前寄りの位置に4箇所の小孔があけられている。なんらかの頂部装飾を緊縛するためのものと考えられるが、三尾鉄などの金属製部材は遺存していない。また、小孔とその周辺には頂部装飾等を緊縛していた痕跡はみられない。衝角部の稜線は鋭利な角を有するというよりも緩やかな曲面をもっている。伏板の先端は衝角底板の面に合わせて切削されている。

上段地板 上段の地板は2枚の鉄板を用いている。2枚の部材は後頭部において繋げられており、左側の地板が右側の地板に上重ねされている。左側地板の最大幅4.7cm、右側地板の最大幅4.8cm、後頭部における幅は5.4cmである。

胴巻板 腿巻板は1枚の帯状鉄板を用いている。左側面の幅は3.6cm、右側面の幅は3.7cm、後頭部の幅は3.9cmである。側面の幅に比べて後頭部の幅がやや広い点が注目できる。本例の胴巻板は、一定の幅をもつ帯状鉄板を単純に折り曲げたものというより、冑の中段を構成する形状として明確な意図をもって成形された部材といえるだろう。

下段地板 下段地板は1枚の鉄板を用いている。左側面の幅は5.3cm、右側面の幅は5.2cm、後頭部の幅は5.2cmである。上段地板や胴巻板と異なり、側面幅と後頭部幅の差異は少ない。右側面の内面において、2枚の鉄板を重ねたような痕跡が観察できる。後頭部の部材が側面の部材を内面から覆っているようにみえるが、X線透過画像を検討しても異なる部材を重ねているような特徴が見出せない。外面においても、2枚の鉄板を重ねたような状況は確認できない。下段地板は本来、1枚の鉄板であると捉えられるだろう。下段地板内面にみられる鉄板の重ねは、地板の素材を鍛接した際に残されたものや、経年変化によって鍛接等の痕跡が顕在化したものである可能性が考えられる。

腰巻板 腰巻板は1枚の鉄板を用いている。左側面、右側面、後頭部ともに幅は3.6cmである。下端部から上に0.8cm程度の箇所に中心間隔1.6～2.0cmの小孔列があけられている。小孔を用いた頬当や鍛を取り付けるための孔列である。また左右側面、やや前よりの下端付近には、4孔一組の小孔列がみられる。この孔は鍛取り付け用の孔よりも小さく、中心間隔も0.5～0.6cmと狭い。本例のような4孔一組の小孔は帯状鉄板を用いた多段鍛を取り付けるための鍛付孔によく見られる。ただし、本例の4孔一組の小孔列は側面

の2箇所のみであり、後頭部にはみられない。以上のことから本例の腰巻板側面にあけられた4孔一組の孔列は背緒付孔の可能性が考えられる。ただし、一般的な背緒付孔は2孔一組である点で確定的に捉えることは難しい。

衝角底板 衝角底板は三角形を呈する底板本体板と下部に重ね下がる堅眉庇、冑本体と結合するための糊代部分とで構成される。複雑な形状を呈するが、構造物として一体化した形状であり、鍛造技術を駆使して製作された部品といえるだろう。底板本体部分は中央部分の長さ4.7cm、左右幅12.5cmである。堅眉庇は底板から直角方向に折り曲げられた形状であり、中央部での突出高は1.2cmである。糊代部分は前後5.2cm、高さ1.3cmの長方形を呈しており、冑本体とは左右それぞれ2箇所で鉄留されている。

衝角底板は冑本体へ外側からあてて結合されている。先述のとおり、伏板先端は切断されていることから、筆者の分類における外接切断式（鈴木2009）に、川畠純の分類における外接式（川畠2015）に属する。

編年的位置 本例の編年的位置づけをうかがうにあたり、①地板が横矧板であること、②衝角底板の結合手法は外接切断式であること、③地板の上下で枚数が異なること、④小札鎧が伴うこと、といった所属性に着目しておきたい。

①の特徴である横矧板鉄留衝角付冑は、中期中葉新段階（TK216型式期）から終末期までみられる。②の特徴である外接切断式は、中期後葉新段階（TK23型式期）に出現し、後期まで引き継がれる。③の特徴としてあげた上下地板で使用枚数が異なる事例は、長野県溝口の塚古墳例、大阪府黒姫山古墳7号冑、大阪府長持山古墳例などに認められる。溝口の塚古墳例は上段地板が3枚、下段地板が1枚、黒姫山7号冑と長持山例は上段地板が1枚、下段地板が2枚であり、いずれも本例とは異なる。横矧板鉄留衝角付冑の推移の大まかな傾向として、地板を複数枚用いるものが古く、一枚で構成するものが新しいといえる。地板を複数枚用いるものから一枚で構成するものへ移り変わる過程で上下段の地板枚数が異なる製品が製作されたものといえるだろう。④の特徴としてあげた小札鎧は中期後葉新段階（TK23型式期）に出現し、後期以降はほぼこの属性で統一される。小札鎧を備える古墳時代中期の衝角付冑としては、茨城県三昧塚古墳例、大阪府長持山古墳例、福岡県山の神古墳例があげられる。

以上のことから、本例は、古墳時代中期後葉新段階（TK23型式期）から中期末葉（TK47型式期）に位置づけられる。中でも新相の属性である②や④の特徴を重視するなら、中期末葉（TK47型式期）に中心的な時期があるとみられる。本例にみられるその他の特徴、すなわち、伏板幅10.8cm、胴巻板幅3.6～3.9cm、腰巻板幅3.6cm、頭径約0.4cm、胴巻板上段における鉄数32、といった属性もこの編年観と親和的である。さらに、本墳から出土した馬具や須恵器などが示す年代觀とも一致することも注目できよう。

倭文6号墳出土冑の特質 本例のような小札鎧を備える中期の衝角付冑は、先述の通り、三昧塚古墳例、長持山古墳例、山の神古墳例などに認められる。本例を含めていざれも横矧板鉄留衝角付冑であり、外接切断式もしくはそれと関連が高い型式に位置づけられる点で製作技術上の共通性も高い。いっぽうで、倭文6号墳を除く諸例は籠手や小札肩甲など充実した付属具を備えた小札甲と組み合うことが留意される。後期の事例をみても、本来的には小札鎧付きの衝角付冑は小札甲と組み合うことが基本であり、その製作開始初期からこの組合せ関係は遵守されていたと評価しうるだろう。この点で、甲冑の組合せとして本例の特異性が目立つ。

倭文6号墳では組み合う甲が三角板鉄留短甲であり、その編年的位置づけも古墳の築造時期からは数段階遷ることが確実である。製作時期が異なる冑と甲が組み合う確実な事例として評価しうるだろう。本墳の築造は中期末葉（TK47型式期）であり、多くの副葬品がその時期のものとして位置づけられる。馬具の評価については、本書所収の考察に詳しい。刺突武器は剣を含まず、大刀のみである。また、長柄の武器は槍を含

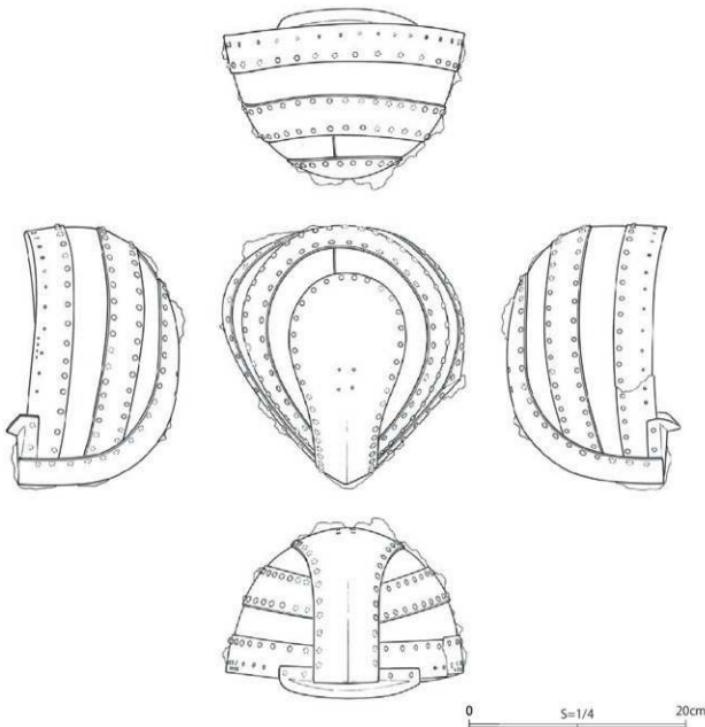


図 19 横矧板銅留衝角付冑実測図（外面）

まず、3点の鉢で構成されている。本墳から出土した刀剣や長柄武器においては、すでに古墳時代中期的な武装体系から脱却をはかっているものとみなせよう。

いっぽう、本墳の事例では、短甲のみが古相の製品でまかなわれている。この解釈としては、古い時代に被葬者が短甲のみを入手し、後に小札銀付の冑を入手した可能性と、甲冑の配布主体である倭王権内で蓄積されていた古い時代の短甲と、最新の冑が組み合わされて倭文6号墳の被葬者に渡された可能性が考えられる。本墳から出土した他の副葬品に、短甲の製作時期に近い古い様相が見出しにくいことを考えると、本墳から出土した短甲も同じ時期に倭王権からもたらされた可能性が高いと捉えられよう。

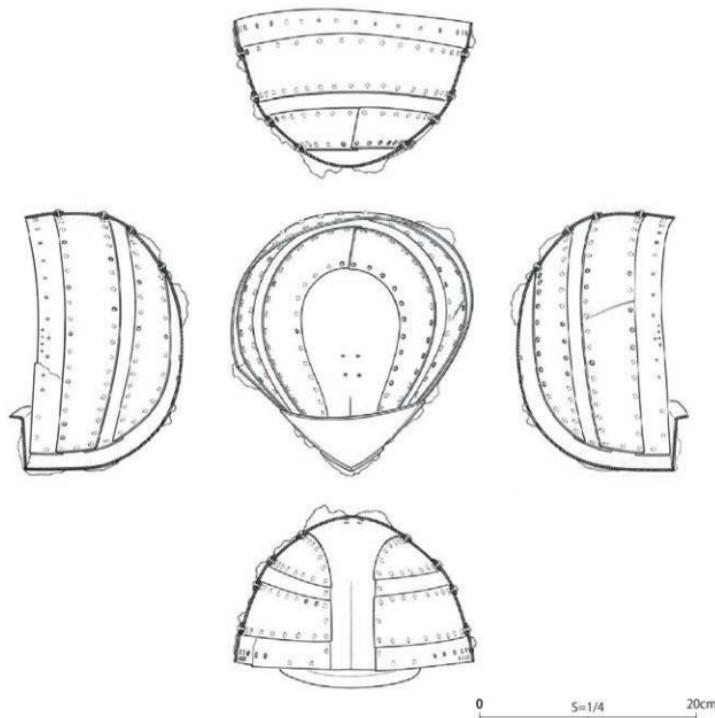


図20 横矧板鉢留衝角付冑実測図（内面）

倭文6号墳の武装具は、頬当や小札鎧を備える最新鋭の冑を備えながら、短甲は確実に数世代さかのぼる型式であり、付属してもよい頸甲や肩甲も伴わない。この点で本墳の武装は階層的にはやや下位に位置づけうるといえるだろう。総体として優秀な副葬品を副葬する本墳であるが、直径13.0mの小円墳であることと、武装の様式に乱れがあり付属具が伴わないなど、武装がやや下位に位置づけられることは相互に関連した事柄として認識できるだろう。

(3) 小札鑑（図 21, 卷頭図版 8, 図版 24）

短甲内の横矧板銀留衝角付冑は、小札鑑が伴う。小札は、長さが 6.0 ~ 6.5cm、幅 2.2cm 前後、厚さ 1.5 ~ 2.0mm 程度のものが鑑を構成すると考えられ、70 枚以上を数えることができる。小札の形状は、頭部がいずれも丸く成形されているものの、下辺が直線的にカットされたもの、下辺部の一方の角が斜めにカットされたもの、両方の角がカットされたものなど、バリエーションがある。個々の小札が鑑のどの部分を構成していたかの詳細な復元は困難だが、場所によって使い分けられていた可能性があろう。穿孔は全て同じで、上部の左右に 2 個ずつ、下部の左右に 2 個ずつの縦孔、下辺に沿って 3 個の下掘孔の計 11 個あけられており、下部の縦孔と下掘孔が縱並びになって等間隔に開けられる。初村武寛のIV式と考えられる（初村 2010）。

短甲内に銹着したままのもの（1）が 10 枚あり、これらは衝角付冑の腰巻板に接していた。小札の頭部を冑の下面に向けた状態で銹着している。このことから、小札の頭部を下向きにして鑑が縦じつけられた可能性も考慮できるが、多数銹着したものの中には下辺部に幅 1cm ほどの革包覆輪の痕跡が残るもの（2, 3, 17, 18）がある。やはり、小札の向きは、丸い頭部が上、覆輪のある直線部が下であったろう。したがって、鑑は冑からはずされ、折りたまれるなどして冑とともに短甲内に収められたと考えられる。

複数の小札が銹着したものを観察すると、右重ねのものと左重ねの 2 者が存在することに気づく。右重ねの小札が 6 枚銹着する 2 と、左重ねの小札が 5 枚銹着する 18 は、18 の右端の小札を介して接合する。このことから、18 右端の小札が鑑の中心で、ここから左右に振り分ける形で小札が配置されたと考えうる。ただし、最下段と考えられる覆輪付きの小札で、右重ねのものが 13 枚数えられるのに対して、左重ねのものは、現状で 8 枚しかないため、左右の振り分けは均等でなかった可能性もある。

なお、接合関係が判明したものは、いずれも同じ段内で、2 と 18, 3 と 7, 8 と 9 と 16 が互いに接合する。また、直接接合はないが、銹の状況などから、2 と 7 および 3, 17 と 18 は隣接する位置にあったと考えられ、最下段は 2, 3, 7, 17, 18 の少なくとも 22 枚であったと考えられる。

上下方向の重ね方が判明する小札は 8 で、下段が上段の上重ねになる。8 の下側の小札 3 枚の上部孔裏面には、横方向の直線的な革痕跡が付着しており、これが腰巻板への縦革の痕跡と考えうる。小札の枚数や、後述する頬当の大きさなどを勘案すると、全体で 3 段構成だったと推測でき、縦方向の大きさは 15 ~ 16cm ほどであったと考えられる。

19 以降は、短甲の東側格内に散在していた小札で、土ごと取り上げられ、保存処理されたものである。本来の重ねを反映したと思われる部分もあるが、本来の位置関係を失ったものが多い。また、後述する頬当によりよく観察できるが、内面にハエ回帰殻と考えられるものが多量に付着している小札がある。

なお、図 21 に示した小札のうち、4, 10 に付着している小型の小札は、後述する頬当の小札と同形同大であり、左頬当の一部と考えられる。左頬当は右頬当とは異なって、小札鑑と混在する形で短甲内に収められたと考えられる。

(4) 小札革縦頬当（図 22, 23, 図版 23, 24）

全体の構成と寸法 幅 14cm、高さ 17.8cm の方形を呈するほぼ完形に近いものがある（図 22-1）。長さ 5.0cm 前後、幅 2.2cm 前後、厚さ 1.5 ~ 2.0mm 程度の小札を、1 段あたり 10 枚右重ねしたものを 5 段にわたって上重ねして縦じ合わせている。小札 50 枚で構成されるのであろう。縦方向、横方向ともに湾曲がつけられており、顔面にフィットするように作られている。大阪府・長持山古墳などでは、頬当には下掘孔のないタイプの小札が用いられているが（塙本 1997）、本例では下辺中央にも穿孔があり、鑑と同様な孔の配置となっている。

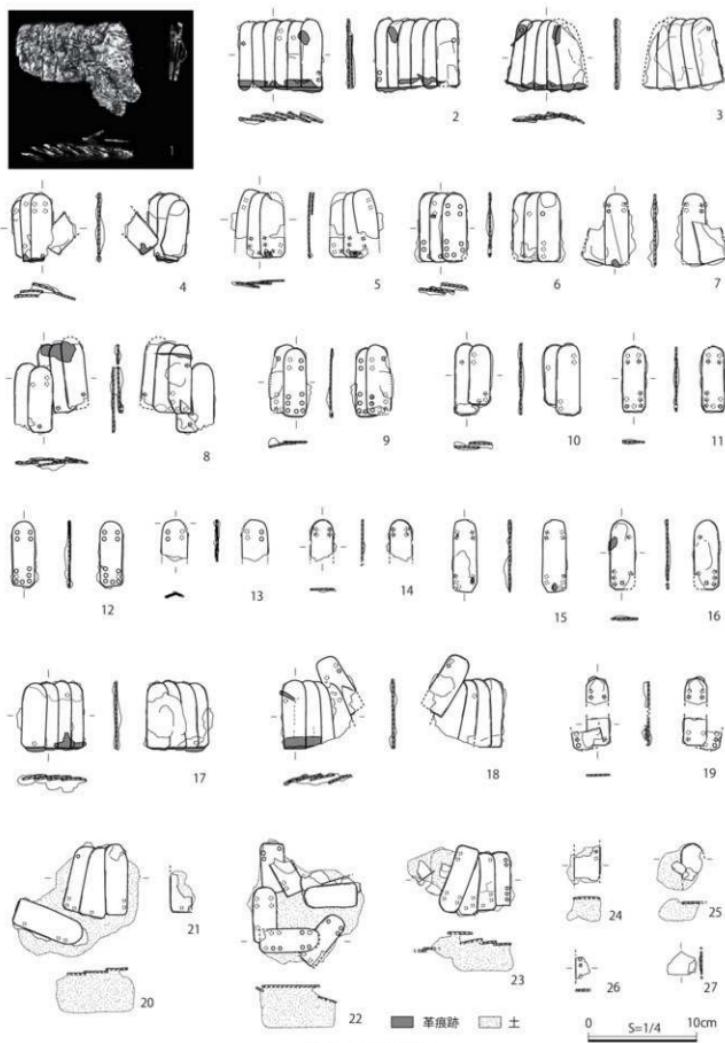


図 21 小札鉗実測図

出土時は内面を上に向け、その中央に5, 6枚の小札塊が銹着していた。その状態で保存処理されていたが、銹着した小札塊と本体の間には侵入した砂が存在していたため、整理作業中にはずれて分離した。分離したことにより、小札塊が本来は頬当本体の上部の一角を構成する部分であり、遊離したものであることが判明し、ほぼ全形が復元できることとなった。

頬当は、1辺が斜めにカットされており、カットされた辺と下辺には革包覆輪の痕跡が残る。小札が右重ねであることから、カットされた辺の側が前面側と考えられ、右頬用となる。同様な頬当の良好な遺存例として、福岡県・山の神古墳出土例（辻田 2015）、群馬県・金井東裏遺跡例（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013, 2015)、茨城県・三昧塚古墳例（斎藤他 1960）などをみると、カットされた辺の方が後側で、直線的な辺の方が前側である。倭文6号墳例は、これらの通例とは逆と言える。

頬当の内面はほぼ全面に革張りされていたと考えられ、全体的に模倣とした革の痕跡で覆われているため、個々の小札の形状や縫穴を観察することは難しい。ただし、革の表面がよく残り、毛穴状のものが観察できる部分もある（図版 24 左上）。

なお、頬当の一部が分離し、それが本体の中央に銹着していた出土状態に関しては、次の2通りの解釈が可能である。すなわち、埋葬時にすでに2片に分離しており、それらが重ねられて棺内に副葬されたという解釈と、埋葬後に木棺の腐朽に伴う移動や攪乱などによって本来は完形だった頬当が破損し、その破片が本体中央に銹着したという解釈である。短甲の東側で散乱して出土した小札は、先述したように、本来の位置関係を失っており、攪乱によって乱されたものと考えるに躊躇はないが、この頬当の場合は、銹着した小札塊以外には乱れが認められないのであり、後述するハエ開蛹殻の点から見ても、前者、つまり副葬時にはすでに2片に分離していた可能性がより高いと考えられる。

2以降は、単体で遊離した小札である。短甲内に収められた銀の小札として取り上げられて番号が付されているため、これらは短甲内にあったと考えられる。一部は、短甲の東側に散在した小札もあるようで、短甲内のものとは異なる番号が付されているが、数は少ない。遊離したもので重ねがわかるのは、4のみであるが、左重ねであることから、右重ねの1とは異なる頬当、すなわち左用の頬当があることは確実である。ただし、小札の数は破片を合わせても25枚程度しかなく、半数は失われている。

内面の状況 小札の内面には、幅1mm、長さ3mmほどの粒状のものが多数銹着しており、特に革の遺存状態が良い部分に集中するようである（図23、図版24 左上）。これらを顕微鏡で詳しく観察すると、半裁された状態のものがあって、内面に10前後の環節が観察される。大きさや形状からすると、これらはハエ開蛹殻であろう。種を同定するには至らなかったが、このように副葬された鉄器類に開蛹殻が銹着する例は比較的古くから注意されており、群馬県・箕輪天の宮古墳の挂甲のキンバエ属が報告されている（小林・上田 1952）。愛媛県・葉佐池古墳では、人骨に付着したハエ開蛹殻にニクバエ属とヒメクロバエ属の2種あり、後者が腐肉にたかる生態をもつことから、1週間以上、10日程度のモガリ期間が置かれたと想定されている（田中 2003, 2004）。近年では、福岡県・荒平2号墳出土の刀子（加藤 2009）、那珂遺跡第129次・土壙墓SK215出土の鉈と考えられる鉄器（藏富士 2012）、宮崎県・島内地下式横穴墓群ST-113, ST-114, ST-116, ST-119出土の人骨や鉄製品（中野 2009, 2010）、新潟県・姥ヶ入南遺跡1号墓出土の鉄斧（渡邊・坂上 2010）などの事例があり、葉佐池古墳例における田中良之の見解を引きながら、埋葬に至る前のモガリなどの期間に遺体とともに置かれた副葬品にハエが産卵したものと理解されている。本例の場合も、開蛹殻が小さいので、ヒメクロバエ属の可能性があり、同様に考えうるであろう。

モガリ期間が長期に及ぶ可能性があるものとして、鳥取県内では古郡家1号墳北棺の事例があり、ここでは、人骨が埋葬以前に白骨化していることや、副葬鉄器の有機質部材にも一定の腐朽期間を想定できること

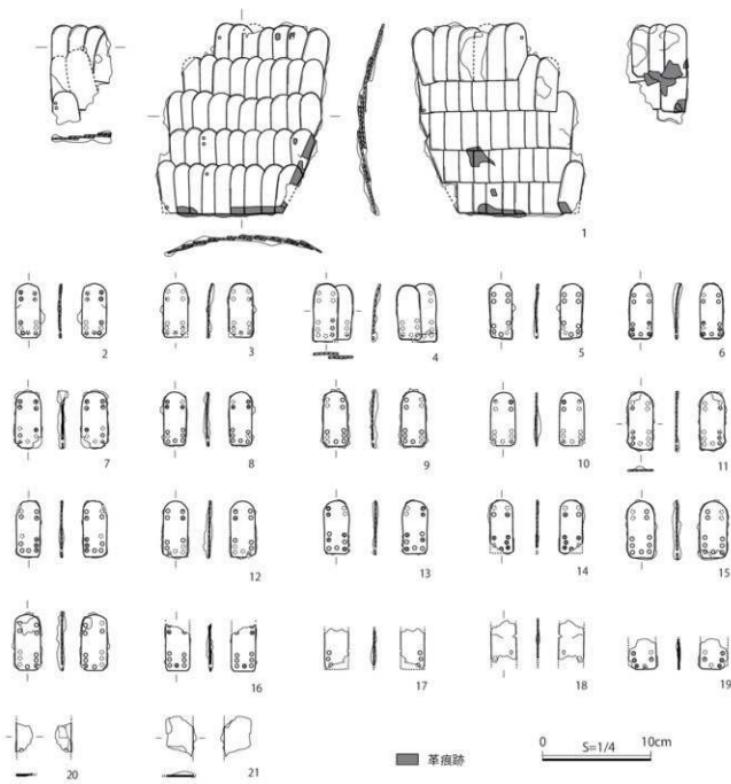


図 22 頬当実測図

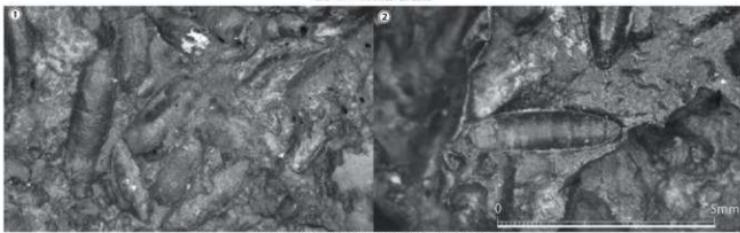


図 23 頬当内面に付着したハエ虫殻

が注意された（高田・東方 2013）。先に、右頬当が副葬以前に一部破損しており、その破片が本体と重ねられたと想定したが、ハエ團扇殻の存在と考え合わせると、鉄器類が長期間にわたるモガリを経て、劣化した後に副葬されたという事態も考慮する余地があるといえよう。

3. 馬具

倭文 6 号墳から出土した馬具については、表 2 のとおりに整理できる。既報告で主要な馬具の大部分は報告されているが、既に報告済みの資料でも、その後の保存処理により明らかになった細部の特徴もあり、未報告のものと合わせて再度報告する。表 2 からわかるように倭文 6 号墳から出土した馬具は 1 セットである。2 点一組で存在すると考えられる鞍の鞍金具が 1 点のみしか確認できない。また、鞍の飾新や辻金具を構成する貴金属具の一部が回収されていない可能性はあるものの、本来 1 セットを構成したほぼすべての種類の金属製馬具が回収されている。また、面繫と尻繫を分けて副葬した状態が木棺直葬のため保たれており、本来の馬装を復元できるという点でも注目される。

以下、品目ごとに報告する。なお、各品目についての編年の位置づけについては田辺昭三による須恵器編年（田辺 1981）を軸とする。

(1) 帶（図 24～図 28、巻頭図版 4, 5、図版 25, 26）

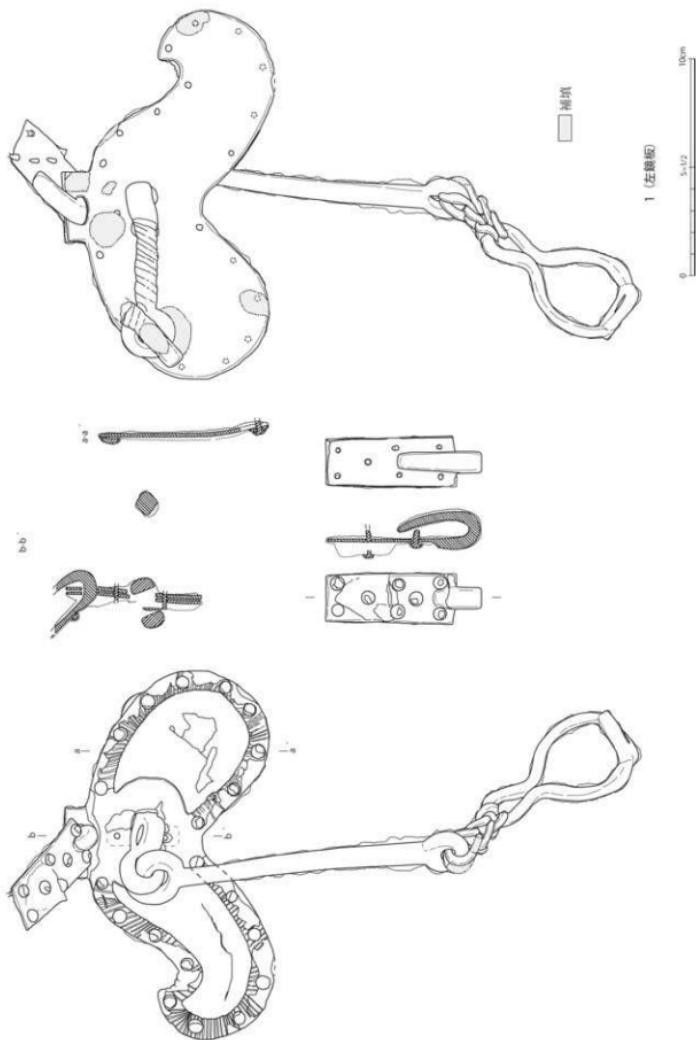
概要 帯は金銅製の「字形鏡板帶」である。出土時には引手、吊金具がついたままの左右の鏡板が銜により連結された状態で出土しており、既報告でもこの状態のまま図化されている。保存処理等の関係で、左右の鏡板を中心に 2 つに分かれており、その状態で図化した。

鏡板 左右 2 点が完存する。図 24 が馬の左頬側、図 25 が馬の右頬側に相当する。1・2 ともほぼ同形同大である。以下、2 を中心に報告する。鏡板本体は厚さ約 1.5mm の鉄製地板の上に、金銅板を被せ、断面半円形で刻みによる斜線文を施し、銀板を被せた幅 1.0～1.2cm、厚さ約 2.0mm の鉄製線金をおき、直径約 0.6～0.7 cm、高さ約 2.0mm の鉄地銀被円頭かしめ鉢をおよそ 1.4～2.5cm 間隔で打って固定する。いわゆる別被せである。鏡板中央の梢円形部は、斜線文銀被せの線金と一体であるが、この部分には金銅版を被せている。鏡板中央には最大長さ約 1.4cm、幅約 2.4cm の中央にくびれをもつ横長梢円形の衝孔を穿け、表面に長さ約 3.3 cm、幅約 0.9cm の鉄製板状衝留金具を縱方向に設置し、鉄製鉢で固定しているとみられるが、左右とも鉢頭は欠損しており不明である。

鏡板上部に長さ約 1.2cm、幅約 3.2cm の立間部を設け、その中央に長さ約 0.7cm、幅約 1.2cm の逆半円形立間孔を穿いている。立間孔には別造の鉄地金銅張鉤吊金具を連結する。吊金具は両側縁に 3 鉢、中央に 2 鉢を打った複列配置の鉤吊金具 a-2 類（片山 2017）で、全長約 7.0cm、吊手部の長さ約 5.9cm、幅約 2.4cm、鉢は鉢頭径約 0.6～0.7cm、高さ約 2.0mm の鉄地銀被円頭鉢である。遺存状況が悪く詳細は不明であるが、

表 2 倭文 6 号墳出土馬具一覧

馬具	詳細品目	材質	数量	本書の図番	既報告の図番	備考
帶	「字形鏡板帶」	鉄金（新、鍍金は鉄銀）	1 対	図 24～26	第 32 図	
辻金具	4 銀方形飾金具	鉄（新は鉄銀）	8 点	図 29-1～8	第 33 図 24, 26 ～28, 30～32	
	5 銀方形飾金具	鉄（新は鉄銀）	2 点	図 29-9, 10	第 33 図 25, 29	
貴金属	貴金属	鉄銀	8 点以上	図 29-11～24	第 33 図 28	1 点は 4 銀方形飾金具に鍍着
	栗実形座金具付鞍金具	鉄	1 点	図 30-1	第 33 図 22	
鞍	杏仁形飾鉢	鉄銀	9 点	図 30-2～10	第 33 図 36～43	
	木心鞍板張輪鉢	鉄	1 点	図 32	第 33 図 34	
杏葉	多頭劍菱形杏葉	鉄（新は鉄銀）	3 点	図 33-35	第 33 図 19～21	
	鉢	鉄	1 点	図 36-1, 2	第 33 図 23	



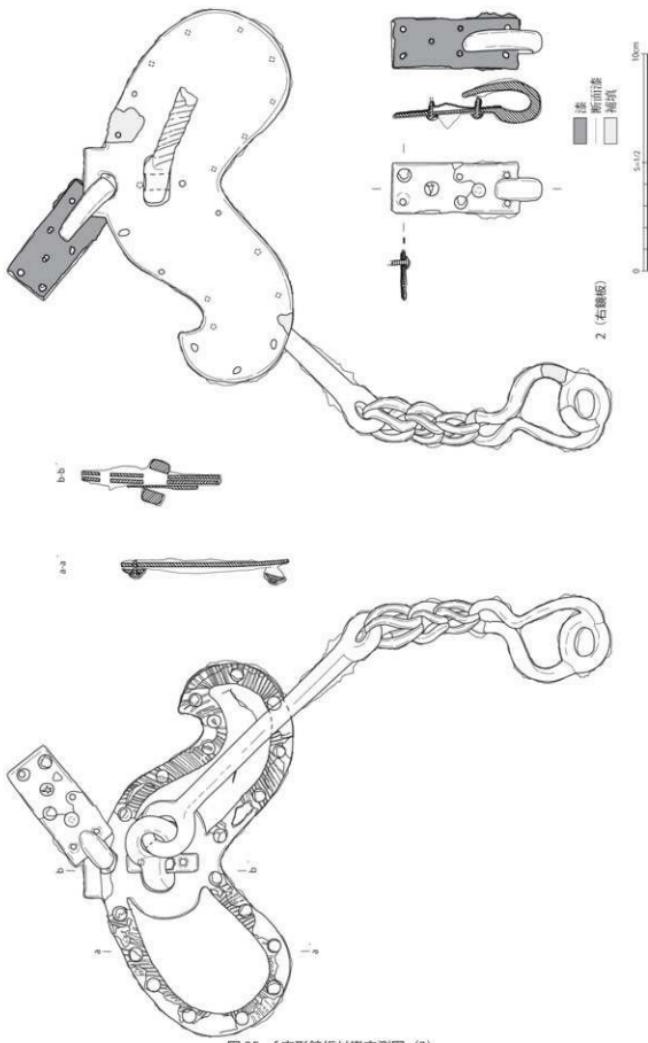


図25 f字形鏡板付售実測図 (2)

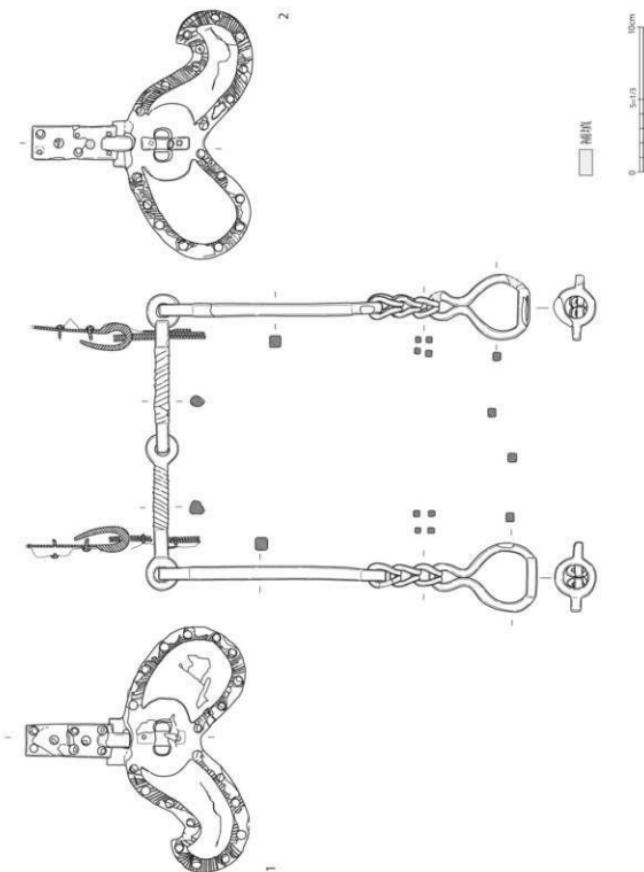


図 26 f 字形鏡板付唐展開図

鉢脚を折曲げることによって繋を連結したものと思われる。繋の遺存状況は悪いが、図 2 をみる限り、漆状の塗膜が認められ漆塗の素繋（片山 2016）であったと思われる。

衡 衡と引手は衡外環につけた固定式遊環¹によって連結する。衡は鉄製 2 連式で現状では右衡の一部が左衡に連結しているが、固定式遊環を含めた左衡の全長約 11.0cm、右衡の全長約 10.8cm である。固定式遊環は直径約 2.2 ~ 2.3cm の略円形、外環は直径約 2.1cm の略円形、内環は直径約 2.2 ~ 2.3cm の略円形である。左衡は外環と内環が同じ方向を向くのに対し、右衡は直交方向を向く。衡身には左右とも振りが認められ、

表3 f字形鏡板付書計測値

	左側	右側
幅	9.5	9.6
長さ	17.0	17.1
屈曲部幅	5.5	5.5
頭部幅	4.4	4.1
尾部幅	6.6	6.5
a	10.3	10.0
b	3.2	3.3
c	9.5	9.6
d	5.3	5.3
屈曲度	31	33
抉り	34	34
頭部上昇度	56	55
類	数	19
	径	0.6~0.7
	高さ	0.2~0.3
吊金具	全長	7.0
	吊手幅	2.4
	吊手長さ	5.9
新	数	8
	径	0.6~0.7
	高さ	0.2~0.3

※は図27参照。計測値の単位は、ゴシック以外はcm。

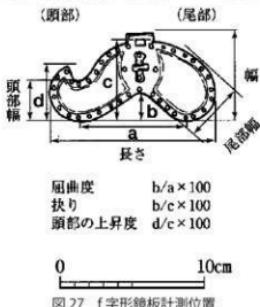


図27 f字形鏡板計測位置

1條振り技法（諫早2012）によるものと思われる。固定式遊環は鏡板との連結前に鍛接によってつくられたものと思われる²。このため、左銜と右銜の連結は、各銜は鏡板の外側から銜孔を通したのちにおこなわれた。この構造をとる場合、左銜と右銜の内環のどちらかはT字形成形技法（諫早2012）により環を形成したと思われるが、残存状況が悪く、本例の場合、左右どちらかは不明である。

引手 引手は左右とも長さ約0.9cm、幅約0.9cm、断面隅丸方形の鉄棒でつくった直柄の1條線引手に三連の兵庫鎖を介して別造の瓢形引手壺を連結した1條線引手a3類（諫早2012）で全長は約15.5~15.7cm、引手の外環は直径約2.1cmの略円形、内環は直径約2.4cmの略円形である。引手を固定式遊環に連結するために、引手内環はT字形成形技法（諫早2012）により、つくられている。右引手では比較的明瞭に確認できる。兵庫鎖は断面方形の長さ約0.4cm、幅約0.4cmの鉄棒を曲げたもので、一連の長さは約1.9~2.5cmである。引手壺は左右ともほぼ同形で長さ約7.0cm~7.4cm、最大幅約4.5cm~5.0cmを測り、上部中央に手綱を通すための外径約2.8~2.9cm、内径約1.7cmの環部を設けている。手綱は残存状況が悪く確認できない。

編年的位置 本例の鏡板は鉄製地板に金銅版を張り、その上に刻目を入れ、銀板を被せた断面半円形の縁金を被せた別造である点に特徴がある。また、骨の連結構造は、銜と引手の連結に固定式遊環を用いて鏡板外側で連結する点も注目される。

f字形鏡板壺の出現は中期後半（TK208型式期）以降で、初期の鏡板は縁金と地板の金銅板別せき技法、引手は鏡板の外側で銜と連結するなどの特徴をもつ（小野山1964、内山1996、田中2004）。本例も初期の一例で、舶載品か列島内生産品か判断は分かれる。鏡板の全長約17cm、屈曲度31~33とい

う特徴は田中由理（田中2004）のIC1式に該当する。引手と引手壺を連結する兵庫鎖の連数が単系に連数の多いものから少ないものになるという変遷案の当否は十分に検討しなくてはならないが、本例も3連の兵庫鎖で引手外環境と引手壺を連結し、古相を示すとされるその他の要素と整合的である。断面が半円形で刻目入り、銀被せの縁金の特徴、銘文などから、もっとも近似する資料は埼玉稻荷山古墳（1）例である。ただし、埼玉稻荷山古墳（1）例は引手外環に銜内環を直接連結するという点で本例と異なる。先に指摘した舶載品か列島内生産品か判断が難しいことと合わせて考えると、上限はTK208型式期、下限はTK47型式期における。

(2) 銀金具（図28、巻頭図版3下）

概要 銀金具を構成するとと思われる4鉢方形飾金具8点、5鉢方形飾金具2点、責金具15点以上がある。

4鉢方形飾金具（1~8） 厚さ約1.5cm前後の鉄製地板の上に金銅板を被せた鉄地金銅張製である。横幅

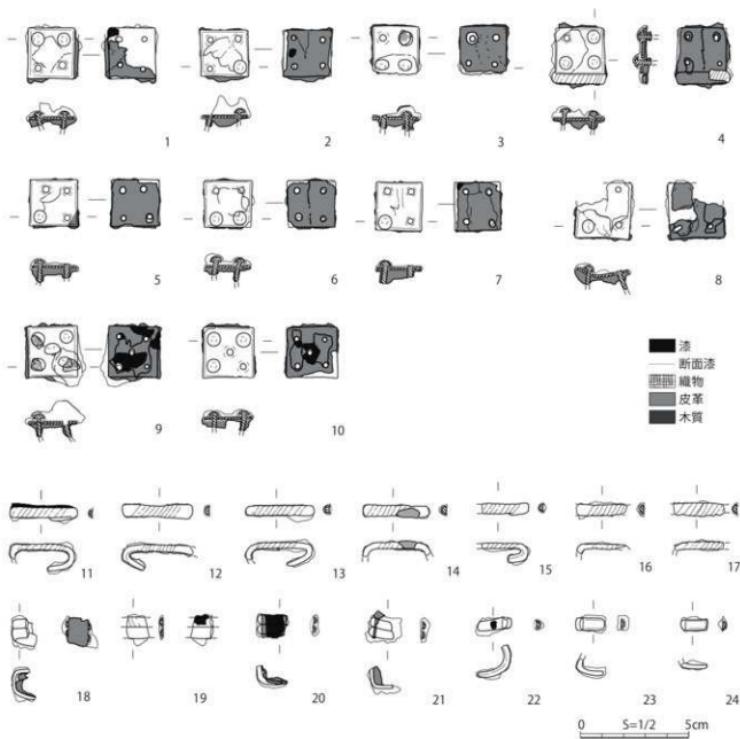


図28 金具実測図

約2.1～2.3cm、縦幅約2.1～2.3cmの正方形である。4隅に鉄頭径約0.6～0.7cm、高さ約0.2cmの鉄地銀被円頭鉄を打って繋を留めたと思われる。3の表面で右上の鉄脚には径約0.6cm、厚さ約0.1cmの鉄製のワッシャー状留金が残っており、他の個体でも同様の方法により繋を固定した可能性が高い。繋については金具に接して漆状の塗膜が確認でき、漆塗の素繋が留められていたものと思われる。

5 鉄方形飾金具（9・10） 厚さ約1.5cm前後の鉄製地板の上に金銅板を被せた鉄地金銅張製である。横幅約2.3～2.4cm、縦幅約2.3～2.4cmである。4隅と中央に鉄頭径約0.6～0.7cm、高さ約0.2cmの鉄地銀被円頭鉄を打って繋を留めたと思われる。

貴金属 刻みを入れた断面半円形の鉄製本体に銀板を被せた鉄地銀被製である。大きさのわかるもので幅約3.1～3.2cm、厚さ約0.5cmをはかる。1本で出土したものと、2本が銹着したものの2通りがあり、1本ずつ使用した部位と2本並べて使用した部位があったと思われる。2本留めの8をみると繋2本分（折返繋）

皮革2枚分)が確認でき、繋が重ねて留められた場所に2本留めが採用された可能性がある。

出土状況からみる限り、これらの方形飾金具、責金具の使用方法としては、5鉢の方形飾金具を中心置き、1本ずつ責金具を挟んで、4鉢の方形飾金具を四方に配置した組み合わせ辻金具と考えるのが各部品の数の上で最も妥当性がある。2本が銘着した責金具(18~21)は余った繋を留めるのに用いたと考えるのが適当である。

編年的位置 組み合わせ辻金具は鉢頭を表面に出さない、単脚の金具5点で構成されるものと、本例のように鉢頭を表面に出し、複数の鉢脚の金具5点で構成されるものの2系列がある(宮代1993、李2008、桃崎2015)。日本列島では、朝鮮半島南部にやや遅れてTK208型式期頃からみられるようになる。当初より2系列が存在し、前者の系列は組み合わせ辻金具、もしくは環状雲珠としての認定が比較的容易であるが、後者の系列については、方形金具や爪形金具の使用方法や組み合わせ関係の把握が難しい。組み合わせ関係のわかるものでは、中央に4鉢の方形金具、四方に3鉢の方形または爪形飾金具を配するものが最も多く、次いで中央に5鉢の方形金具、四方に3鉢の方形または爪形飾金具を配するものがみられる。本例のように中央に5鉢、四方に4鉢の方形飾金具を配置する例は、陝川玉田M3号墳にみられ、いずれも鉄地金銅張本体に、鉄地銀被鉢を打ち、斜線文入銀被責金具1本を中心の金具と四方の金具の間に挟んで繋を固定させるという点でも共通する。玉田M3号墳例をTK208~TK47型式間に位置づけられるとすれば、本例もほぼ同様の時期のものとみることができる。

(3) 鞍(図29、31、巻頭図版6左下)

鞍に関係する金具として鞍と飾鉢が存在する。

①鞍

概要 1は鉄製の座金具をもつ鞍である。座金具の残存状況は悪いが、残っている部分の外形から判断する限り栗実形のものであった可能性が高い。残存幅約3.0cm、残存長さ約1.8cmである。構造は鉢具の輪金の両端部を脚として鞍の居木先に打ち込み、打ち込んだ脚の先端に横棒をあてるものである。脚は片方のみ残存し、長さ約2.8cmである。鉢具部は幅約4.1cm、長さ約4.4cm、太さ約0.6cmの方形鉄棒を馬蹄形に曲げた

表4 方形金具計測値

鉢数	番号	縦幅	横幅	鉢頭径	鉢頭高	備考
4鉢	1	2.3	2.1	0.6	0.2	
	2	2.2	2.3	0.7	0.3	
	3	2.2	2.1	0.6	0.3	
	4	2.1	2.3	0.6	0.2	責金具1本銘着
	5	2.2	2.2	0.7	0.3	
	6	2.2	2.2	0.7	0.3	
	7	2.1	2.2	0.6	0.2	ワッシャー状留金
	8	(2.7)	(2.5)	0.6	0.2	彫れ著しい
5鉢	9	2.3	2.4	0.6	0.3	
	10	2.4	2.3	0.7	0.3	

計測値の単位はcm。

表5 責金具計測値

番号	幅	長さ	備考
11	3.1	0.5	
12	(3.3)	0.5	
13	3.2	0.5	
14	3.1	0.5	
15	(2.2)	0.5	
16	(2.4)	0.5	
17	(2.3)	0.5	
18	(1.2)	1.0	2本留
19	(1.0)	1.0	2本留
20	(1.5)	0.5	2本留
21	(1.7)	0.8	2本留
22	(1.6)	0.5	
23	(1.3)	0.5	
24	(1.2)	0.5	
(4) *	(2.6)	0.5	

*は方形金具4に銘着した個体

計測値の単位はcm。

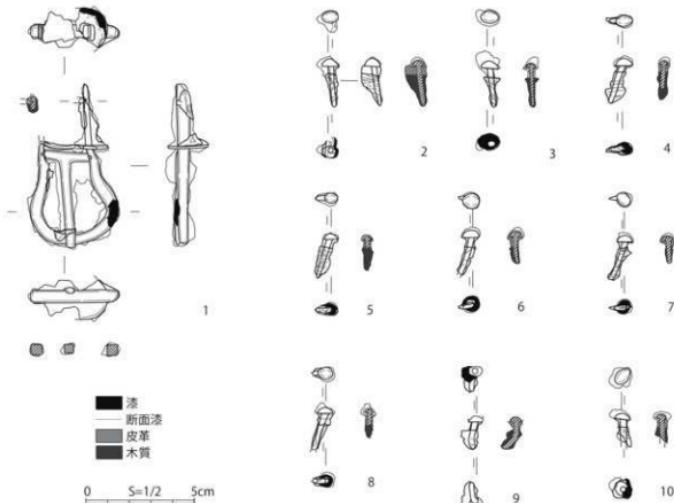


図 29 鞍金具実測図

もので、基部に太さ約0.4cmの方形鉄棒でつくったT字形の別造の刺金を差し込む。

鞍本体に関係する有機質についてみてみると脚の端部に脚と併行する木質が残存する。また、座金具の裏面には漆と考えられる被膜が確認できる。以上より、鞍は漆が塗られた居木の先端部に打ち込まれていた可能性が高い。

編年的位置 栗実形の鞍で二本の脚をもち脚端部に横棒を差し込むものは、宮代栄一の編年によれば、TK208型式期～MT15型式期に位置づけられる（宮代 1996）がその中心はTK47型式期までにある。この系列の鞍には座金具が金銅製のもの、鉄地金銅張製のもの、鉄製のものがある。本例のように鉄製のものは、長野県宮垣外遺跡SK64例、愛知県志段味大塚古墳（1）例、京都府宇治二子山南墳例、大阪府城ノ山古墳例などから出土しており、これらはTK208型式期～TK47型式期に位置づけられる。

②飾鉢

概要 2～10は鞍に伴うと考えられる飾鉢である。

長さ約1.7～2.0cmの鉄製鉢脚に長径約0.6～0.9cm、短径約0.5～0.7cm、高さ約0.3～0.4cmの平面杏仁形の鉢頭をつけたもので、鉢頭には銀板を被せる。いずれの脚部にも鉢頭底面に接して、漆膜、厚さ約0.4～0.5cmの皮革状有機質、鉢脚にほぼ直交する厚さ約1.5cm以上の木質の順に有機質が付着しており（図



図 30 鈎有機質

表6 飾鉢計測値

番号	鉢頭			鉢脚長	木質
	長径	短径	高さ		
1	0.8	0.6	0.4	2.0	直交
2	0.9	0.6	0.4	1.8	直交
3	0.8	0.6	0.4	1.8	直交
4	0.6	0.5	0.3	1.8	直交
5	0.8	0.7	0.3	1.7	直交
6	0.7	0.6	0.4	1.8	直交
7	0.7	0.6	0.3	1.7	直交
8	-	-	-	1.2▲1.5	直交
9	0.9	0.6	0.3	(1.0)	直交

▲は復元長。計測値の単位はcm。

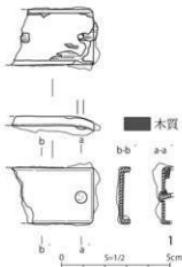


図31 木心鉄板張輪鉢実測図

30), 出土状況から考えて鞍の鞍橋に打ち込まれた飾鉢であると判断した。木質は鞍橋の木材、皮革状有機質は鞍橋の表面を飾っていた有機質であると考えられる。通常の鞍橋の木取からみた場合、鞍の覆輪(山)部に打たれていた可能性が高い。

編年の位置 杏仁形の鉢頭をもつ鞍の飾鉢の類例は、MT15型式期～TK10型式期に多い。類例としてただし、縁金具に同様の鉢を留めた例は福岡県勝浦峯ノ畠古墳例 (TK208型式期) や、埼玉稲荷山古墳 (1) 例 (TK23～TK47型式期) に確認できる。本例をこれらと比べてみると、小型の鉢頭をもつことが指摘できる。また、鉢頭には銀被せをするものがほとんどで、装飾馬具における銀被鉢の盛行時期と重なる。

(4) 鉢 (図31)

概要 木心鉄板張輪鉢の輪部内上面部の鉄製留金具1が1点出土している。厚さ約1.5cm、幅約3.9cm、残存長約3.7cmの鉄板の長辺を5.0mmほど折り曲げたもので、折り曲げ後の幅は約2.4cmである。鉢頭径約0.6cm、高さ約0.2cmの鉄製円鉢頭によって鉢本体に打ち込まれたものと思われる。裏面には木心が残存する。

編年の位置 本例の輪部内上面部の鉄製留金具は千賀久分類(千賀1988)のII a2式、II a3式、柳昌煥分類(柳1995)のI A2式の一部、II b1式、白井克也分類(白井2003)のI Aa2式の一部、II Bd式、張允植分類(2004)のa-2型式第②タイプ、高田貴太分類(高田2014)のA1類の一部、F類にみられる。いずれも柄部と輪部上半部などを部分的に鉄板で覆うもので、輪部内上面部もこれらと同様にタモ状に曲げた木心を留めるためのものである。このような金具を持つ鉄板輪鉢にはこれまでの分類にみられるように柄部と輪部の長さが同じものと(柳I A2式、白井I Aa2式、高田F類)、柄基部より踏込に向かって徐々に幅が太くなるもの(千賀II a2、II a3式、柳II b1式、白井II Bd式、張a-②2、高田F類)があるが、後者にこのような金具を持つものが多い。前者の例はこの部分の幅は1.8cm程度であり、後者の幅は約2.2cm～3.2cmである。本例も幅約2.4cmであり、後者のタイプに含まれ、木心鉄板張輪鉢では、輪部上半から下半にむけて徐々に幅が広がるものであったと想定される。後者の場合、用いられる金具の種類により、輪部内上面部留金具に加えて①柄部側面から輪部上半部にかけての金具と、柄部前後面の金具、柄部に留められる鉄棒からなるもの、②柄部側面から輪部上半部にかけての金具と柄部に留められる鉄棒からなるもの、③柄部を留める鉄棒、④柄頭部から柄上部側面にかけての金具と柄部に留められた鉄棒からなるもの、⑤柄部を留める鉄棒、⑥ほかに金具を伴わないものの5類に分類される。本例の場合、出土状況から考えて⑤の可能性が高い。

また、輪部内上面部の鉄製留金具の長さ、幅からもっとも類似しているのは長野県宮垣外遺跡SX64例、愛知県伝岡崎市例、京都府宇治二子山南墳例、奈良県石光山8号墳例、熊本県塙坊主古墳例などであり、これらはTK23～TK47型式期に相当する。

(5) 杏葉 (図32～34、巻頭図版6上、図版27～32)

概要 3点の多鉢鉄製剣菱形杏葉がある。3を除いて完存する。1は全長約20.0cm、最大幅約11.1cmを測る。

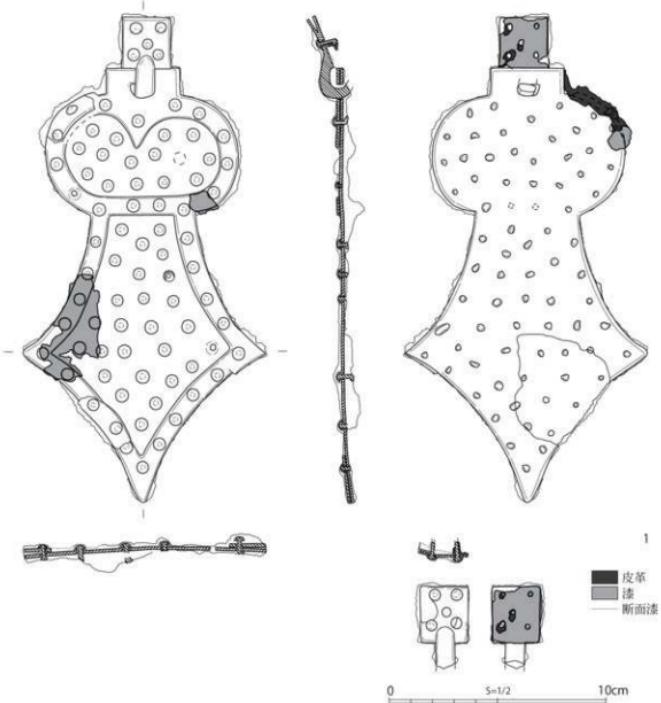


図32 剣菱形杏葉実測図(1)

2は全長約19.9cm、最大幅約10.7cmを測る。3は残存長約15.8cm、最大幅約10.6cmを測る。いずれもほぼ同形同大で、鉄の配置や個数には個体によりばらつきがある。

構造 いずれも厚さ約1.5cmの鉄製地板に、厚さ約1.5cm、幅約0.8～1.0cmの鉄製緑金を置き、鉄頭径約0.5～0.6cmの鉄地銀被円頭鉄で固定したものである。緑金上の鉄間隔は約1.2～1.9cmである。緑金は扁円部と剣菱部の間に区画帯を設けており、扁円部の内線部は下方へ突出する。また、扁円部、剣菱部の内区にも緑金上と同様の鉄地銀被円頭鉄を多数打ち、これを装飾とする。扁円部上部に長さ約1.1～1.2cm、幅約3.2～3.5cmの立間部を設け、その下方中央に長さ約0.5cm、幅約0.9～1.2cmの逆半円形立間孔を穿いている。立間孔には別造の鉄製鉤吊金具を連結する。吊金具は両側縁に2鉄、中央に1鉄を打った鉤吊金具a2類(片山2017)で、1に伴う吊手部の長さ約2.6cm、幅約2.3cmの長方形のもの1点がある他、2、3のそれれにも吊手部の長さ約2.3cm、幅約2.3cmの正方形に近いものが伴う。いずれも鉄は鉄頭径約0.6cm、高さ約0.2cmの鉄地銀被円頭鉄を打って繋を留める。遺存状況が悪く詳細は不明であるが、鉄脚を折曲げることによって繋を連結したものと思われる。繋の遺存状況は悪いが、いずれも漆状の塗膜が認められ漆塗の素繋(片山

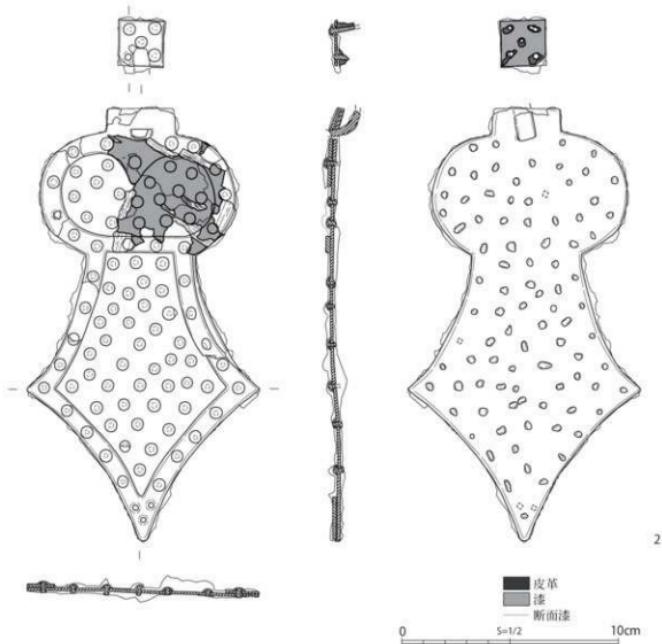


図33 剣菱形杏葉実測図(2)

表7 剣菱形杏葉計測値

		杏葉1	杏葉2	杏葉3
杏葉	全長	20.0	19.9	(15.8)
	最大幅	11.1	10.7	10.6
	長さ	13.2	13.3	(9.2)
	突出	6.9	7.0	(3.2)
	幅	8.9	9.0	8.9
	高さ	5.6	5.6	5.8
	突出度	62	65	-
鏡	縫部	34	36	(29)
	数	扁円部内区	15	17
		鏡部内区	26	38
	径	0.5～0.6	0.5～0.6	0.5～0.6
	高さ	0.2～0.3	0.2～0.3	0.2～0.3
吊金具	全長	(3.8)	図33	図34
	吊手幅	2.3	2.3	2.1
	吊手長さ	2.6	2.3	2.1
	数	5	5	5
	径	0.4～0.6	0.6	0.6
	高さ	0.2～0.3	0.3	0.3

※は田中(2005)による。

計測値の単位は、ゴシック以外はcm。

2016) であったと思われる。

編年の位置 鉄製剣菱形杏葉はTK208～MT15型式期を中心に認められる。大きさや平面形態では田中由理(田中2005)のI B3式に該当する³。鉄地金銅張のI B3式には大阪府南塚古墳例、香川県王墓山古墳例のほか、多銅装飾の群馬県恵下古墳例も含まれる。本例は全体が大型化し、剣菱屈折部もやや上方に移動していることから、金銅装剣菱形杏葉との関係からみてもTK47～MT15型式期のものと位置づけられるであろう。鏡板や杏葉への多銅装飾はこれまでのところ、日本列島でしか確認できないが、TK23～MT15型式期にまとまってみられる。近年類例が増えつつあり、鉄製剣菱形杏葉の主要一群であるといえる。本例に類似するものとして、奈良

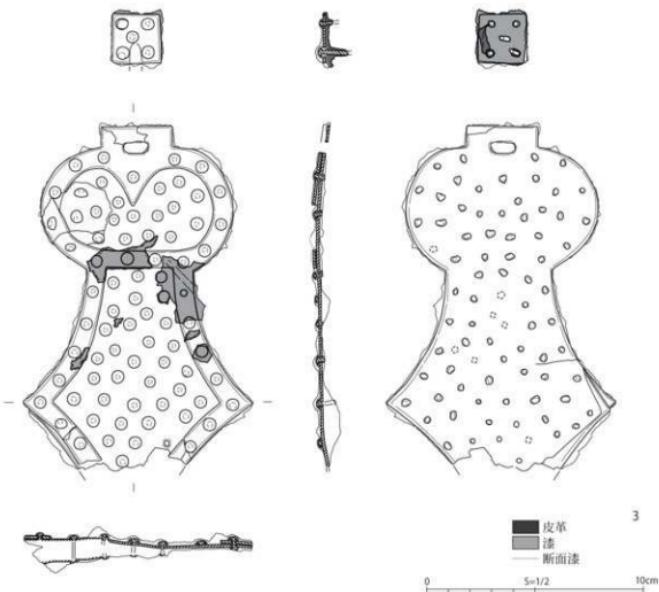


図34 剣菱形杏葉実測図(3)

県赤尾崩谷3号墳例、上狛天竺堂1号墳例、大室241号墳例がある。赤尾谷崩谷3号墳例と、上狛天竺堂1号墳例は扁円部と剣菱部の境界部のみ斜線文入銀被緑金に仕上げる点で、本例や大室241号墳例と異なる。上限はTK23型式期、下限はMT15型式期におくことができる。

(6) 鉸具 (図35)

概要 鉄製鉸具1が1点ある。輪金の残存長約4.9cm、残存幅約3.1cm、刺金の長さ約5.3cmをはかる。輪金は幅、長さとも約0.5cmの断面方形の鉄棒を曲げた1本づくりのもので、基部に幅、長さとも約0.5cmの鉄棒を巻き付け、刺金とする。輪金の上半部に漆塗の皮革が付着しており、漆塗の素繋が付着したものとみられる。2も接合はしないが、1の輪金に伴う破片の可能性がある。

(7) その他の馬具 (図36)

その他、上記の馬具の破片と思われるものがある。1は厚

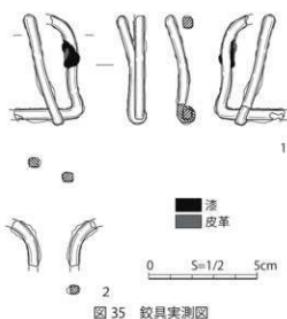


図35 鉸具実測図



図 36 その他の馬具

馬具品目	時期	田辺 (1981)	TK208	TK23	TK47	MT15	TK10
轡	f字形鏡板轡	内山 (1996) 中期	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
辻金具	組み合わせ辻金具		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
鞍	栗実形座金具双脚轡		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
	杏仁形飾鉢		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
鎧	木心鉄板張輪鎧		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
杏葉	多鉢鐵製劍菱形杏葉		■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■

■ 可能性のある作時幅 ■■ 特に可能性のある時期

図 37 倭文 6 号墳出土馬具の時期

約 0.2cm の鉄地銀被円頭鉢であるが、何に打たれたものかは判断できない。6～8 は頭径約 0.6cm、高さしているので、方形飾金具の可能性があろう。

(8) セットとしての評価

以上のように、馬具の品目ごとに編年上の位置については時期幅があるが、個々の馬具の変則的なライフサイクルを考慮に入れなくてよければ、TK23～TK47 型式期に組み合わせてセットが構成されたものと思われる(図 37)。同時期には日本列島に金銅製の f 字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセット、鎧銅製付馬具のセット、鉄製 f 字形鏡板轡と鉄製剣菱形杏葉のセット、鉄製楕円形鏡板轡、籠轡などがあり、そうした多様な馬具系列の中で、本墳の多鉢鐵製剣菱形杏葉は特定の社会的関係にあった有力者を特徴づける馬装に組み込まれていたと思われる。当該期の多鉢装飾の馬具が複数系列の鏡板や杏葉にみられるだけでなく、木心鉄板張輪鎧や木心鉄板張杓子形壺蓋にもみられることから、装飾馬具の一つのモードとしてあらわれたものと評価できる。

(9) 出土状況からみた馬装の復原(図 38)

馬具の出土状況をみてみると、f 字形鏡板轡と組み合わせ辻金具が先行トレンチの東側、鞍や飾鉢などの鞍金具、木心鉄板張輪鎧、杏葉 3 点が西側にほとんど重なりをもたずに、配列されたような状況で出土している。

面繫 東側では、鏡板吊金具の延長線上に 2 点の組み合わせ辻金具があり、繫が連結されたまま、面繫は広げられた状態で防護されていた。組み合わせ辻金具は 4 鈴方形金具と 5 鈴方形金具の数から、5 鈴方形金具を中心におき、四方に 4 鈴方形金具を配置したものと復元したが、4 鈴の(24), (27), (26) に囲まれて 5 鈴の(25) が出土しており、先の復原の妥当性を示す。馬形埴輪の表現と出土状況からみる限り、2 点の辻金具を面繫に用いる場合、轡からのがて項革となり頭部に沿う縱方向の繫と、頭部を横切り縦の繫に交叉し、上側が頸革、下側が咽喉革となる横方向の繫の交点に用いられることが多い。左鏡板吊金具の上端部から、組み合わせ辻金具の中央の金具までの距離は約 23cm であり、これは、千葉県江子田金環塚古墳(約 16cm)、ナシタニ 6 号墳(約 17cm)などの同一場所の間隔と近い。このような面繫馬装は宮代栄一の単条系(辻金具 2 点を伴う馬装)(宮代 1997)に該当する。f 字形鏡板轡で単条系の例として、長野県新井原 4 号土壙例、

鳥取県東宗像 21 号墳例、静岡県石ノ形古墳西主体部例等があり、いずれも TK208 ~ TK47 型式期に位置づけられる。

尻繫 尻繫についてみてみると、杏葉 3 点が扇状に出土しており、馬の尻に置かれた雲珠を中心に尻の左右に 2 枚、尻尾の上に 1 枚が配置されたものと思われる。雲珠や辻金具に該当するものが出土しておらず、木製などの雲珠が置かれたか、繫と杏葉のみにより尻繫を構成したものと思われる。杏葉はすべて表面を上にして出土しており、鞍 1 の出土位置や後輪の覆輪を飾ったと考えられる飾鉢の出土位置から考えても、後輪の西側で鞍に連結されたまま副葬されたものとみられる。

鉗 木心鉄板張輪鉗の金具と鉗具 1 点が尻繫と鞍の後輪の間から出土しており、尻繫への鉗具 1 点の使用よりも鉗の鎧鉤への使用の可能性が高いことから考えて、木心鉄板張輪鉗は鞍から取り外されてこの空間に副葬されたものと考えたい。先行トレンチによる掘削により、前輪のあった部分の出土馬具が不明であるが、対になる鉗は前輪側に置かれていたため、確認できていない可能性がある。

4. その他

(1) 刀子 (図 40-1)

残存長約 15.3cm、刃部残存長約 10.9cm、茎長約 4.4cm、刃部中央幅 1.6cm を測る。背は直線的である。関は両側に存在する。柄は木材を芯にした鹿角装である。鞘に関係するかは不明であるが、漆と思われる塗膜が付着する。

(2) 鉗 (図 40-2)

既報告では、形態不明の「頭部」と報告された鉄製品である。再整理の結果、両端部を欠損するものの、鉗である可能性が高い。現存長 15.8cm、幅 0.8 ~ 1.0cm を測り、厚さは 0.3cm 程度である。図示した上側がやや幅広で厚く、下側が幅狭で薄い。全体に反りが認められるが、本来の形状かどうかは不明である。

残存する木質部を観察すると、鉄器の下端

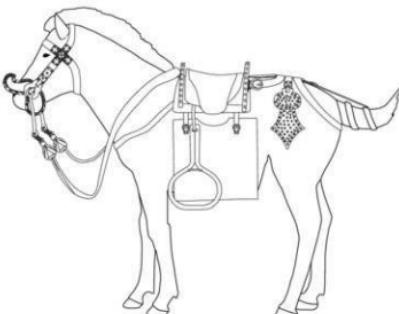


図 38 馬装の復原

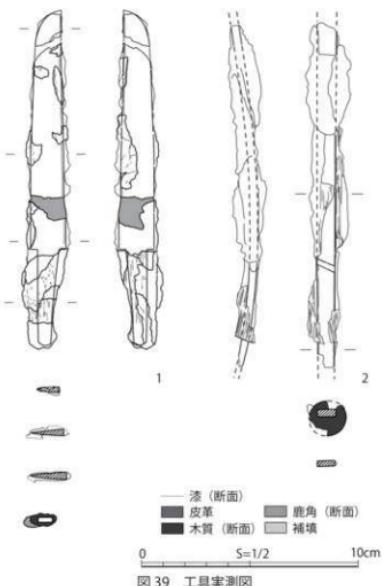
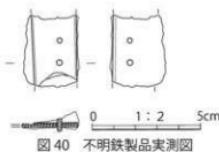


図 39 工具実測図



(3) 不明鉄製品 (図 41)

用途不明の鉄製品が 1 点確認できる。残存長約 3.4cm、残存幅約 2.6cm である。厚さ約 0.2cm の鉄板と、別の厚さ約 0.1cm、幅約 2.2cm、残存長約 3.4cm の鉄板からなる製品である。径約 0.3cm の円孔が開けられており、下の穴には鉄製の鋤脚が二枚を貫通している。矛 3 の付近から出土しているが、レベル的には矛や馬具よりも下位で、甲冑類よりもやや上位であり、出土状況から製品を特定するのも困難である。

註

- 1 固定式遊環という名称のほかに二重衝先環（大谷 2014、神 2017）という名称もあるが、ここでは固定式遊環を用いる。
- 2 固定式遊環の製作技法については諫早直人氏にご教示を得た。
- 3 突出度や、全長ほか各部の計測値では I B3 式に該当するが、I B2 式の福岡県番塚古墳例や、II A 式の京都府鹿谷 18 号墳例との大きさや形態での類似も認められる。

引用・参考文献

- 諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣出版
 内山敏行 199「古墳時代の轡と杏葉の変遷」大谷晃二編『96 特別展 黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘
 大谷宏治 2014「古墳時代終末期の轡の新例—菊川市篠ヶ谷 S A 8 号横穴墓出土轡の復原—」『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要』第 3 号、静岡県埋蔵文化財センター
 小野山節 1964「剣菱形杏葉をともなう馬具の性格」『日本考古学会昭和 39 年度大会研究発表要旨』日本考古学会
 片山健太郎 2016「古墳時代馬具における繋の基礎的研究」『史林』第 99 卷 6 号、史学研究会
 片山健太郎 2017「古墳時代馬具における繋の変化とその背景」『考古学研究』第 64 卷 3 号、考古学研究会
 加藤隆也 2009『荒平古墳群 1』福岡市教育委員会
 川畠純 2015「武具が語る古代史—古墳時代社会の構造転換—」京都大学学術出版会
 蔡富士寛 2012『那珂 62』福岡市教育委員会
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013「金井東裏遺跡 甲を着た古墳人だより」Vol. 7
 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015「金井東裏遺跡 甲を着た古墳人だより」Vol.17
 小林晴治郎・上田宏範 1952「上野箕輪天の宮古墳出土の轡の蛹について」『古代学研究』第 6 号
 斎藤忠・大塚初重他 1960「三昧塚古墳」茨城県教育委員会
 沢田むづ代 2015「古墳出土の鉄刀と鉄劍の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例」『文化財と技術』第 7 号、工芸文化研究所
 白井克也 2003「馬具と短甲による日韓交差編年—日韓古墳編年の並行関係と曆年代—」『土曜考古』第 27 号、土曜考古学研究会
 白澤崇 1999「鉄製柄円鏡板付轡とその馬装」白澤崇編『石ノ形古墳』袋井市教育委員会
 神啓 崇 2017「馬具の構造変化とその意義—西古賀竪古墳馬具の再検討—」『平成 29 年度九州考古学会総会 研究発表資料集』九州考古学会

- 鈴木一有 2003 「中期古墳における副葬品の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集
- 鈴木一有 2008 「前胸長方形分割の三角板短甲」『森町円田丘陵の古墳群』第 1 分冊、静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木一有 2009 「中期形背の系統と変遷」『考古学ジャーナル』No.581、ニュー・サイエンス社
- 鈴木一有 2012 「小札銅留衝角付冑の変遷とその意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 173 集、国立歴史民俗博物館
- 鈴木一有 2014 「野中古墳の築造時期と陪塚論」『野中古墳と「後の五王」の時代』大阪大学出版会
- 高田貴太 2014 「古墳時代の日朝関係—新羅・百濟・大加耶と後の交渉史—」吉川弘文館
- 高田健一・東方仁史 2013 『古都家 1 号墳・六郎山 3 号墳の研究』鳥取県
- 龍沢誠 1991 「銅留短甲の編年」『考古学雑誌』第 76 卷第 3 号
- 田中由理 2004 「T 字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第 51 卷第 2 号、考古学研究会
- 田中由理 2005 「劍菱形杏葉と 6 世紀前葉の馬具生産」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』
- 田中良之 2003 「人骨およびハエ團扇殻からみた獣について」『葉佐治古墳』松山市教育委員会
- 田中良之 2004 「獣再考」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川出版
- 中條英樹 2003 「鉄製 T 字形鏡板付轡の編年とその性格」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第 10 集、帝京大学山梨文化財研究所
- 張允首 2004 「日本列島の鏡にみる地域間関係」『考古学研究』第 51 卷第 3 号考古学研究会
- 千賀久 1988 「日本出土初期馬具の系譜」奈良県立橿原考古学研究所『橿原考古学研究所論集』第 8、吉川弘文館
- 塙本敏夫 1997 「長持山古墳出土挂甲の研究」『王者の武装—5 世紀の金工技術—』京都大学総合博物館
- 辻田淳一郎（編）2015 『山の神古墳の研究』日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）成果報告書、九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 中野和宏 2009 「島内地下式横穴墓群Ⅲ・圓元遺跡」えびの市教育委員会
- 中野和宏 2010 「島内地下式横穴墓群Ⅱ」えびの市教育委員会
- 橋本達也 2005 「稚童 21 号墳出土の肩庇付冑」山中英彦（編）『稚童古墳群』行橋市教育委員会
- 橋本達也 2012 「甲冑の部位名称について」『マロコ古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 173 集
- 初村寛 2010 「古墳時代中期における小札式付属具の基礎的検討—付属具を構成する小札の用途と装着部位—」『洛北史學』第 12 号
- 宮代栄一 1993 「5・6 世紀における馬具の「セット」について—T 字形鏡板付轡・鉄製楕円鏡板付轡・劍菱形杏葉を中心に—」『九州考古学』第 68 号、九州考古学会
- 宮代栄一 1996 「古墳時代金属装軸の研究—鉄地金銅装軸を中心に—」『日本考古学』第 3 号、日本考古学協会
- 宮代栄一 1997 「古墳時代の面繋構造の復元—X 字脚辻金具はどこにつけられたか—」『HOMINIDS』Vol.001、CRA
- 宮代栄一 2003 「古墳時代における尻繋構造の復元—馬装が示すもの—」『HOMINIDS』Vol.003、CRA
- 桃崎祐輔 2005 「稚童 21 号墳・8 号墳出土馬具の検討」山中英彦（編）『稚童古墳群』行橋市文化財調査報告書 第 32 集、行橋市教育委員会
- 桃崎祐輔 2015 「山の神古墳出土馬具の検討—2 セットの T 字形鏡板付轡・扁円劍菱形杏葉の年代とその意義—」辻淳一郎「山の神古墳の研究—「雄略朝」前後における地域社会と人制に関する考古学的研究: 北部九州を中心に」渡邊裕之・坂上久記 2010 『一般国道 116 号和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ 立野大谷製鐵遺跡・姥ヶ入製鐵遺跡・姥ヶ入南遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ハングル
- 柳昌煥 1995 「伽耶古墳出土 銀子에 대한 研究」『韓國考古學報』33 韓國考古学会
- 李炫姪 2008 『嶺南地方三国時代 三繫裝飾具 研究』慶北大學校大學院碩士學位論文

第4章 考察

1. 馬具からみた倭文6号墳

片山健太郎

はじめに

倭文6号墳には第3章3で述べたように、金銅装f字形鏡板轡と多銘鉄製剣菱形杏葉からなる1セットの馬具が副葬されていた。金銅装f字形鏡板轡は埼玉県埼玉稻荷山古墳第1主体例（以下、埼玉稻荷山古墳（1）例）と類似し、かつ、両古墳では通有の金銅装剣菱形杏葉がセットにならないという点でも共通する。そこで、本稿ではf字形鏡板轡、多銘鉄製剣菱形杏葉の編年に改めて検討を加え、それに基づいて、出土古墳の特徴とどのように関係するのかを検討し、馬具から倭文6号墳被葬者の位置づけについてまで、議論を及ぼしたい。

1 馬具の編年的位置づけと系譜

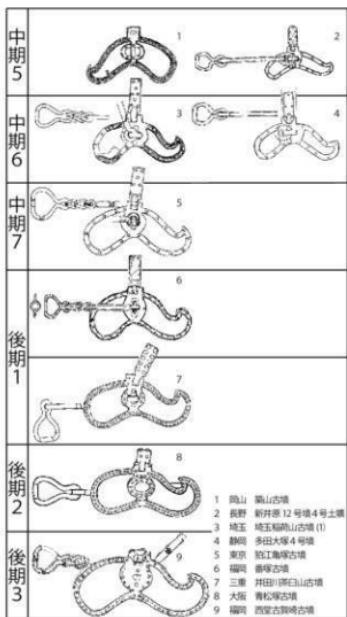


図41 内山敏行によるf字形鏡板轡の編年 (S=1/8)

(1) f字形鏡板轡

①編年

f字形鏡板轡の編年は、小野山節によりその大綱が示されて以降（小野山 1964），鏡板の構造や形態的特徴、鏡板と引手の連結方法に注目して研究が進められてきた。現在もっとも広く知られているのは、小野山の5段階区分（小野山 1964・1992）や宮代栄一の属性分類による編年（宮代 1993）をもとにした内山敏行の7段階区分（内山 1996・2013）であろう。内山の7段階区分は図41のように整理できるであろう。なお、内山の編年では1996年段階と2013年段階とで前半の中期5～7段階の代表例を替えており、屈曲の弱く幅の細いものと屈曲の強く幅の広いとの系統差とみてているのか、屈曲の弱い幅の細いものから単系的な変化に遷移觀を変更したのか定かではない。前者であれば、鏡板の変化を単系的に考えた小野山と異なる¹⁾。

倭文6号墳例の鏡板は銀金と地板の金銅板・銀板の別被せ技法で、形態は幅が広く、やや強く屈曲する。鏡数は銀金上が20個前後、衝通孔のある中央の楕円形部には鏡を打たない。引手は外側で固定式遊環を介して1條線引手を連結し、兵庫鎖3連を介して別造引手壺を連結する（1條線引手a3類）。このような諸特徴をもつ本例を小野山編年に照らし合わせれば、1段階に位置づけられる。また、すでに事実

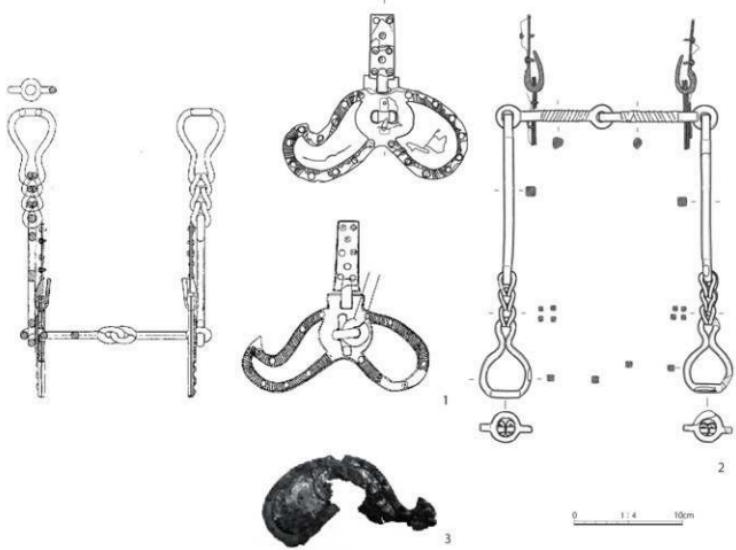


図42 別被式f字形鏡板巻の諸例（1・2：5=1/4, 3：約4分の1）

1：埼玉稲荷山古墳（1） 2：倭文6号墳 3：赤尾崩谷2号墳

報告で触れたように、斜線文を入れた断面半円形の銀被せの縁金を有する点や全体の大きさ、鏡数などの点では、埼玉稲荷山古墳（1）例にもっとも類似する（図42-1・2）。ただし、埼玉稲荷山（1）例が引手を鏡板の外側で直接銜外環に連結するという点で、倭文6号墳例と異なる。内山旧編年（内山1996）では埼玉稲荷山古墳（1）例は中期6段階に位置づけられることから、倭文6号墳例についても鏡板の構造や形態的特徴では中期6段階に位置づけられるだろう。また、正式報告は出されていないが、奈良県赤尾崩谷2号墳のf字形鏡板巻（図42-3）も桃崎祐輔により注目されたように（桃崎2016）、斜線文銀被の縁金や形態の点で倭文6号墳例、埼玉稲荷山古墳（1）例と類似する。ただし、赤尾崩谷2号墳例は鏡板内側で銜と引手を直接連結する²⁾。

この3例を通してみてくるのは、鏡板の諸特徴の高い共通性と銜と引手の連結方法の差異である。筆者は鏡板巻が特に装飾に関する属性を過度に発達させた巻である点から、鏡板の構造（つくり）や形態的特徴が、時間的な変化を追う上で最も適していると考えている³⁾。ここでは、鏡板の製作技法を主に、巻としての連結構造を從として編年案を提示する。そうすることにより、同じ構造や形態的特徴の鏡板をもつ倭文6号墳例と、埼玉稲荷山古墳（1）例と赤尾崩谷2号墳例との差異、その他のf字形鏡板巻との編年上、型式学的な関係が明らかになるものと考える。

本稿で対象とするf字形鏡板巻の諸特徴を並べたものが表8になる。編年案の妥当性を示すために、左端

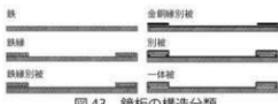


図43 鋼板の構造分類



図44 衛と引手の連結分類（譲早2012）



図45 衛の固定方法



図46 引手の分類（譲早2012）



図47 吊金具の分類（片山2017）



図48 繋の分類（片山2016）

にセットを構成する（もしくはその可能性のある）剣菱形杏葉の型式⁴⁾、雲珠・辻金具の特徴⁵⁾、鞍の特徴⁶⁾を示し、さらに共作する甲⁷⁾、鉄縁⁸⁾、須恵器⁹⁾の編年を示した。編年の諸属性の分類と編年の方法についてはその他の鏡板轡や剣菱形杏葉を含めて別稿を準備中であるので、以下では、F字形鏡板轡の編年にのみ関わる部分のみ説明を加えておく。

a. 属性の分類

鏡板の構造は以下のように分類できる（図43）。

鉄 鉄板1枚を切り抜いて鏡板（地板）とするもの。

鉄縁 鉄製の地板に鉄製の縁金を重ねるもの。

鉄縁別被 鉄製の地板に金銅板を重ね、上に鉄製の縁金を重ねるもの。

金銅縁別被 鉄製の地板に金銅板を重ね、上に金銅製の縁金を重ねるもの。

別被 鉄製の地板に金銅板を重ね、上に金銅板（銀板）を貼り縁金を重ねるもの。

一体被 鉄製の地板に鉄製の縁金を重ねて、その上から金銅板を被せるもの。

轡としての構造は引手の連結位置、引手と衛の連結方法、衛の固定方法の3要素から構成される。

引手の連結位置は以下のように分類できる。

外 鏡板の外側で衛と引手を連結するもの。

内 鏡板の内側で衛と引手を連結するもの。

引手と衛の連結方法は以下のように分類できる（図44）。

遊環 引手の内環と衛の外環とを遊環を介して連結するものの。

固定式遊環¹⁰⁾ 引手の内環を衛の外環に鍛接した固定式遊環に連結するもの。

直接 引手の内環を衛の外環に直接連結するもの。

衛の固定方法は以下のように分類できる（図45）。

衛留棒（表） 衛外環を通した別造の衛留棒を鏡板の表面に留めることで固定するもの。

一體衛留棒 鏡板と一緒に成了した衛留棒に衛外環を留めることで固定するもの。

（衛留棒+）覆金具 衛留棒と一緒に成了した衛留棒に衛を鏡板に固定し、さらに鏡板の外側に半球形の覆金具をつけるもの。この類型については、神啓崇によりさらに細分がなされており（神2016），これを組み合わせて表記する¹¹⁾。

引手については、譲早分類（譲早2005・2012）を用いる（図46）。

1條線引手a2類 引手外環を鍛接してつくるもので、屈折柄のもの。

1條線引手a3類 引手外環を鍛接してつくるもので、別造の瓢形引手壺をつけるもの。なお、引手壺と衛外環の間に兵庫鎖を介するのか否か、する場合の連数は編年上も重要な要素となってきたため、連数

によって、1條線引手 a 3 (- 0) ~ 4と表記する。

f字形鏡板轡の面繫への連結は基本的に別造の鉤吊金具を用いる。これについては、筆者の分類に基づく(片山 2017) (図 47)。

鉤吊金具 a - 1類 複列配置の鉤吊金具で幅が 2.0cm未満のもの。

鉤吊金具 a - 2類 複列配置の鉤吊金具で幅が 2.0cm以上のもの。

鉤吊金具に連結された繫(面繫)には以下のようない種類がある。これについても、筆者の分類に基づく(片山 2016) (図 48)。

素繫 折返繫に特に装飾的な技法をもたないもの。

織物巻繫 折返繫に織物を巻いたもの。

縁飾付織物巻繫 折返繫に織物を巻いたもの、両側縁に縁飾を付けるもの。

f字形鏡板の変化を検討するうえでは、緑金の鉢数、銜通孔周囲の梢円形部の鉢の有無、鉢数、鏡板への装飾などがある。これらについても表 8 に示し参考とする。

b. 型式の設定と細別

鏡板の構造を第一の要素として大別し、大別型式を轡構造によって細別すると表 9 のようになる。

c. 各型式の変遷

鏡板の構造からみれば、別被が古相を示し、一体被が新相を示す。また、轡構造からみれば、鏡板外側での連結が古相を示し、鏡板内側での連結が新相を示す。鏡板内側での連結でなおかつ、銜先覆い金具はさらに新しい要素である。以上のような編年の要素を基軸に、田中による鏡板の形態分類と筆者による繫や連結装置の変遷観をもとにすれば、図 49 のような変遷観を想定できる。鉄 I ~ III 式は他の類型に比べて属性が少ないため位置づけは難しいが、引手銜外側連結の一体被 I ~ III 式の出現までのものであろう。別被 I ~ IV 式と一体被 I ~ III 式も属性については共通する部分もあることから、重なりをもちつつ順次出現していったものと考えられる。

これらの変遷は、共作するその他の馬具や金属製品、須恵器とも比較的整合的である。

②倭文 6 号墳の f 字形鏡板轡の位置づけと固定式遊環の意義

倭文 6 号墳例は別被 II 式で、鏡板、轡の構造の 2 点から、型式学的には一体被 I 式の前段階に位置づけられる。f 字形鏡板轡の量産前のものと位置づけることが可能であろう。倭文 6 号墳例は固定式遊環を用いる点で、型式学

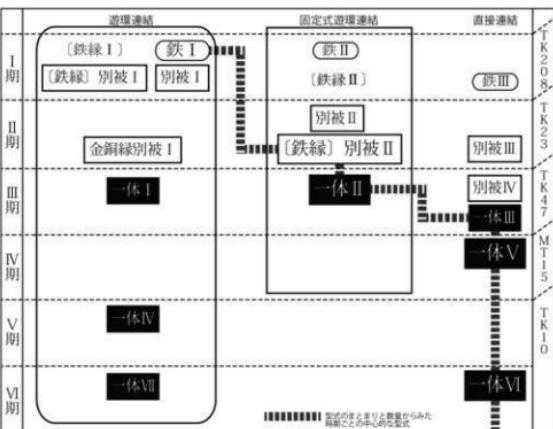


図 49 f 字形鏡板轡の変遷

表8 f字形鉛板嚮一體

2004

共伴馬具：〔吉葉〕ローマ数字+アルファベット-金剛快剣菱形杏葉：田中2005、鉄-快剣菱形杏葉、铁多紙-多紙快剣菱形杏葉、三鈴-三鈴杏葉、五鈴-五鈴杏葉。

〔珠寶・社金具〕剖・鉢紋文・藤杉文の青金具の理窟實珠または組み合わせ社金具、無刻・鉢紋文・藤杉文のない青金具の理窟實珠または組み合わせ社金具、鉢・体

〔靴〕 双枚・双筒・双筋で脚の間に帶を有するもの、双刃・双筒で脚踝部を「ル」字形に曲げるものの、革・革製のもの、革・革具を有するもの。
〔机〕 木の机や机 (机の机) など。小机用。中古: 1990年8月 ハードレーベル: 2012年1月新刊。税別: 1,400円。税込: 1,424円。ISBN: 978-4-01-020131-1 [著者] 桃井洋一

短甲: 川端編年(川口2016)による。小糸甲: 内山2008aにもとづく、鈴木2017の新旧の群別。鈴巻: 鈴木2003にもとづく。須恵巻: 田辯(1981)に基づく。

少1 寿司上場例は別途別途起の例はなく。

50

表9 f字形鏡板轡の型式分類

△	鏡板構造	引手	引手-衝連	衝固定	引手	鈎	繩	鏡板形態										
								外	内	遊環	固	體	體	留	素	繩物	繩	繩
								金	銅	銀	別	被	被	別	被	被	被	被
鉄I	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	▲	
鉄II																		
鉄III																		
鉄縁I	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
鉄縁II	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
鉄縁別坡I	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
鉄縁別坡II	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
金銅別被																		
別被I																		
別被II																		
別被III																		
別被IV																		
一体I	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
一体II	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
一体III	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
一体IV	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
一体V	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
一体VI	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
一体VII	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	

【凡例】鏡板構造・引手位置・衝固定：本稿分類・引手-衝連絡・引手分類：諫早2012、繩連結分類：片山2017、繩分類：片山2016、鏡板形態：田中2004

●主体的に存在 ▲少数存在

的に古方に位置づけられる鉄II式、鉄縁II式、鉄縁別被II式と、一体被II式との間に位置づけられる資料である点でも重要である。検討の過程で、TK47型式期～MT15型式期にf字形鏡板轡の類例が増す中で、主体を占めるのが固定式遊環を用いた轡構造の諸例であることが明らかになった。一方、これらと同時期に位置づけられる内湾梢円形鏡板轡には固定式遊環がそれほど用いられていない^[12]。近年、固定式遊環をもつ轡については、諫早直人（諫早2012a、2012b）、大谷宏治（2014・2015）、神啓崇（2017）などにより注目されている。諫早の研究により朝鮮半島における固定式遊環の出現時期や採用地域などが明らかになりつつある（2012a）。それによれば、百濟では百濟III段階後半（図50-14・15）に出現し、IV段階（図50-17・18）、V段階にみられる。大加耶では大加耶II段階後半（図50-12・13）（13）、大加耶V段階（図50-19）、洛東江以東地域では釜山地域でIII段階にみられる（図50-16）。さらに新羅では新羅VI段階にみられる（図50-21）。これらの三国時代における諸例と統一新羅並行期の諸例をみると限り（諫早2012b、大谷2014・2015）、金属製、有機質製を問わず、鐵轡に比較的多くみられる点に注意をする必要があろう。固定式遊環は衝と引手の連結部分という比較的強度が求められる部位に別の環を高度な鍛接技術を用いて接合する点から、引手と衝の可動に伴う破損から鏡板や鍼を保護するという機能上の理由が考えられる。特に衝外環が鍼の挿入環を兼ねる場合、そこに遊環を介したとしても、引手と衝、もしくは引手、遊環、衝の摩擦が鍼に及ぶことを完全に防ぐことは難しかったであろう。このことが固定式遊環の発生の背景の一つにあつた可能性がある。時期が下っても統一新羅並行期の唐や倭では、金属製、有機質製を問わず鍼轡に固定式遊環が採用されるのはこうした機能的理由があったからであろう。このように鍼轡と固定式遊環との関係性を推測することができれば、なぜ、f字形鏡板轡に固定式遊環が比較的多くみられるかについても推測が可能になってくるのではないか^{[14] [15]}。f字形鏡板轡はその形態的特徴から、有機質製の鍼やそれを模した金属製鍼が粗型として古くから考えられてきた。こうしたf字形鏡板轡の鏡板轡としての系統上の位置が、固定式遊環の採用の背景にあるのではないだろうか。ただし、この問題は朝鮮半島でのf字形鏡板轡の考察地域や、倭に舶載されるf字形鏡板轡の系譜が百濟地域、加耶地域のいずれかにたどれるのかという問題とも密接にかかわる。なおかつ、岡安光彦が指摘したように釜山福泉洞60号墳例、高靈池山洞32号墳例（図50-13）

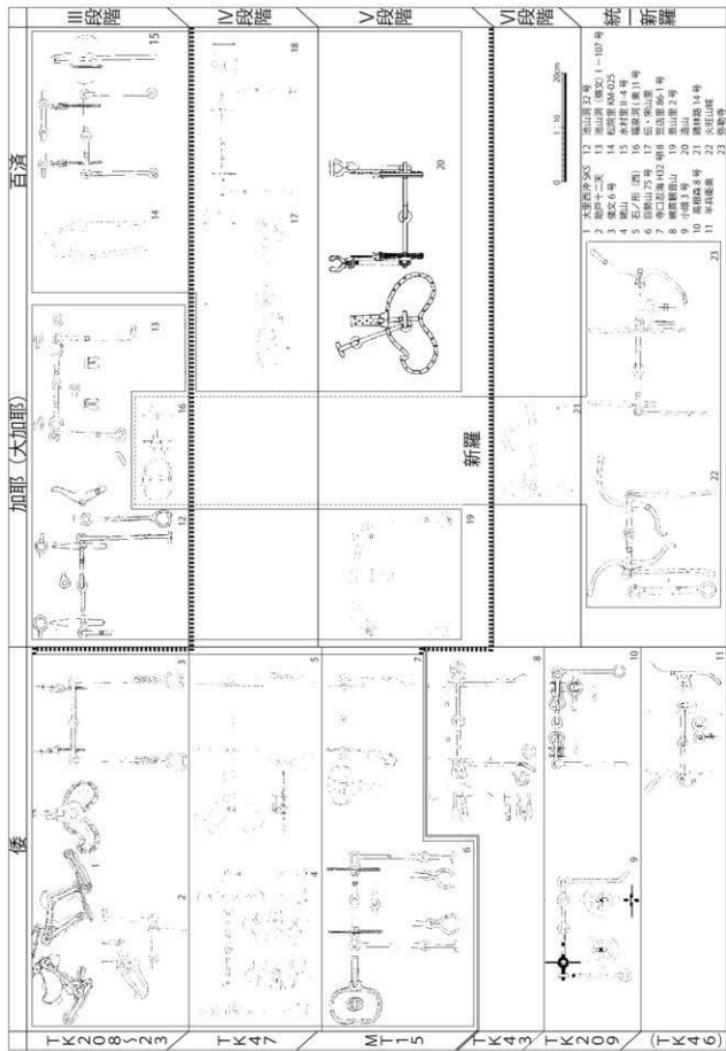


図 50 慶・朝鮮半島における固定式測量をもつての変遷 (S=1/10)

のような f 字形鏡板轡の直接的な祖型と、本稿の鉄縁 I 式に分類される釜山福泉洞 23 号埴例や鉄別縁 I 式、同 II 式に位置づけられる初期の一群とをむすぶ型式（岡安 2003）（図 51）が存在するのか否かという問題と、この段階がその他の楕円形などの鏡板轡の各地における発生・定型化の時期と重なっており、今後の丁寧なプロセスの解明が求められる。倭の事例においても初期の f 字形鏡板轡に位置づけられる岡山県築山古墳例（図 41-1）や大阪府長持山古墳（1）例（図 58-1、小野山 1964、坂本 1985、宮代 1993、内山 1996）については未報告で不明な点も多く、その後増加した資料からみても、限られた情報で倭最古の f 字形鏡板轡とすることは適当ではない。いわゆる鉄製 f 字形鏡板轡に該当する本稿の鉄 I ~ III 式の位置づけはひとまず保留しておくにしても、形態や構造の点から、内山（新）編年で中期 5 段階に位置づけられた長野県新井原 12 号埴 4 号土器（図 41-2）とその類例に遊環を介するものと、固定式遊環を用いるものがあり、その後も二つの轡構造が引き続き採用されていることが注目される。のちに倭での生産につながる f 字形鏡板轡の轡構造は当初から複数系統が流入した可能性があり、工人や技術を継承する工人集団の世代交代と、新たな技術の導入や改良の中で f 字形鏡板轡が変化していった可能性を考えられよう。鏡板構造における一体被の導入などをみる限り、固定式遊環を採用した f 字形鏡板轡（の技術）がその後の f 字形鏡板轡の量産に大きな役割を果たしたであろうことが一体被 II 式の型式学的まとまりから推定される（図 49）。現状では f 字形鏡板轡に固定式遊環を用いるものが百濟地域の IV 段階（図 50-17）、V 段階（図 50-20）に例ずつみられるが、これをもって、f 字形鏡板轡で固定式遊環を用いるものの系譜が百済にたどるとするには慎重になりたい。倭文 6 号埴や埼玉稻荷山古墳（1）、赤尾崩谷 2 号埴の f 字形鏡板轡を含む馬具セットの系譜については、関連する剣菱形杏葉との関係性を検討することが重要である。

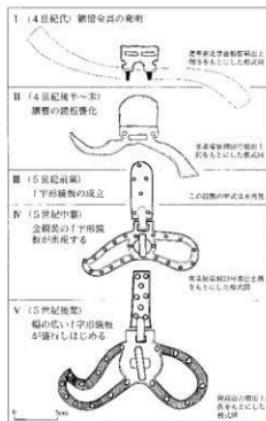


図 51 岡安による f 字形鏡板轡の成立過程

（2）多銅製剣菱形杏葉

① 鉄製剣菱形杏葉の分類と編年

a. 鉄製剣菱形杏葉の形態分類と編年

f 字形鏡板轡の系譜や、当該期における馬具セットの構成を考える上でも倭文 6 号埴の多銅製剣菱形杏葉は重要である。前節の検討で、鏡板の諸特徴は埼玉稻荷山古墳（1）例や赤尾崩谷 2 号埴と類似することが明らかになったが、これら 2 セットの杏葉は前者が三鈴杏葉であり、後者には伴出しない。

事実報告でもみたように倭文 6 号埴の多銅製剣菱形杏葉を位置づけるには金銅製の剣菱形杏葉のみならず、鉄製剣菱形杏葉や多銅装飾の馬具の中でも検討する必要がある。

鉄製剣菱形杏葉は表 10 に示す通り、これまで 23 例が知られており、代表的な諸例を図 52 に示す。鉄製剣菱形杏葉には田中の形態分類による I A 式（図 52-2）と I B3 式（図 52-3）が確認でき¹⁶⁾、このほか剣菱部の扁円部への接続が小さく、剣菱部上半が細く長いものが大小 2 群ある。田中はこのうち縁金をもつ四ツ塚 13 号埴例を「I B その他」としたが、本稿では小型のものを I Ca 式（図 52-1）と大型のものを I Cb 式（図 52-4・5）と分類しておきたい。これら 4 つの形態分類に、本稿での f 字形鏡板轡でみた構

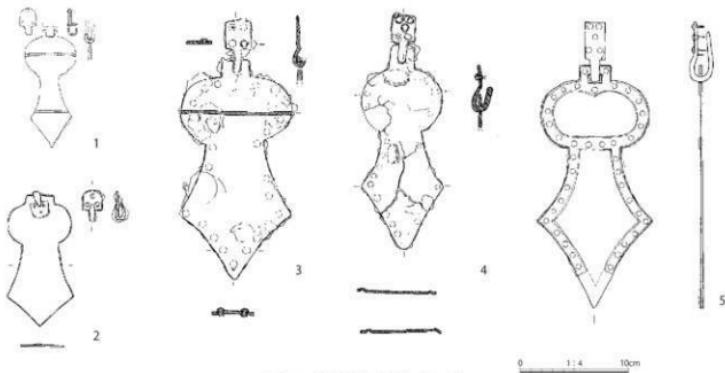


図52 鉄製剣菱形杏葉 (S=1/4)

1：宇治二子山南墳 2：宮垣外SK64 3・4：猿狹古墳ST006 5：四ツ塚13号墳

造分類を適用すれば、鉄式と鉄線式がある。また、後述するように扁円部と剣菱部の区画帯の一部に銀張をするものも鉄線式に含めておく。なお、この分類を用いると形態分類による I Ca 式と I Cb 式は、鉄式と鉄線式の両者にしかみられないこととなる。

各型式の消長についてみてみると I A 式は TK23～TK47 型式期、I Ca 式は TK23～TK10 型式期、I Cb 式は TK47～TK10 型式期に位置づけられる。問題となるのは倭文 6 号墳例を含む I B3 式である。金銅装の I B3 式は田中により MT15 型式以降に位置づけられているが、鉄製のものを含めてこの時期以降と位置づけるのは妥当であろうか。ここでは、倭文 6 号墳例を含む多銘鉄製剣菱形杏葉の新古を検討することで、これらの多くが分類される鉄製 I B3 式の時期について検討したい。

b. 多銘鉄製剣菱形杏葉の変遷

多銘鉄製剣菱形杏葉の類例は図 53 に示したように 9 例がある。このうち I B3 式に分類されるのは赤尾崩谷 3 号墳例（図 53- 1a・b）、京都府上柏天竺堂 1 号墳例（図 53- 2）¹⁷⁾、倭文 6 号墳例（図 53- 3）、長野県大室 241 号墳例（図 53- 4）¹⁸⁾、福岡県宮脇古墳例（図 53- 5）であり、I Ca 式に該当するのは福岡県田野瀬戸 4 号墳例（図 53- 6）である。また、絵図によるため正確には不明であるが、山梨県八代土居原例（図 53- 8）も I Ca 式の可能性がある。鳥取県丸山 2 号墳例（図 53- 7a・b）は全形が不明であるが、II A 式もしくは II B 式に該当する可能性がある。

これらの変遷を考える上で重要なのは、田中に分類されている平面形態の他、扁円部上部の垂下部の形態、扁円部と剣菱部の区画帯の構造、吊金具が多銘であるか否かである。すなわち他の金銅装剣菱形杏葉と同様に、扁円部上部は概して垂下のないものが古く、垂下のあるものが新しい。この点からみれば縁金を持たない宮脇古墳例を除いていずれも垂下部はあるが、わずかに垂下する赤尾崩谷 3 号墳例や上柏天竺堂 1 号墳例が古相を示し、垂下が著しい倭文 6 号墳例、大室 241 号墳例、田野瀬戸 4 号墳例は新相を示すといえる。

扁円部と剣菱部の区画帯は、剣菱形杏葉では概して区画帯のないものが古く、区画帯のあるものが新しい。宮脇古墳例を除いていずれも区画帯があるが、赤尾崩谷 3 号墳例、上柏天竺堂 1 号墳例とその他の諸例では

表 10 鉄製剣菱形杏葉一覧

遺跡名	形態	杏葉構造	装飾	連結方法	繋 数	須恵器
山野 太之郷	I A	鉄	—	鉤吊n-1	2	1
長野 宮垣外SK64	I A	鉄	—	鉤吊n-1	2	3
奈良 新沢510号	I A	鉄	—	鉤吊n-1	1	TK47
大阪 梶持山(1)	I A	鉄	—	鉤吊n-2	1	○
熊本 塚坊主	I A	鉄線	—	鉤吊n-1	1	TK23～TK47
宮崎 烏内SK-02	I A	鉄	—	鉤吊n-2	3	
山梨 八代土居原(6)	I Cb ?	鉄線?	多頭	鉤吊n-2?	3	
長野 太富24号	I B3	鉄線	多頭	鉤吊n-2	2	
京都 上曾毛竺堂1号	I B3	鉄線	多頭・斜線支綱金	鉤吊n-2	3	TK23～TK47
奈良 赤尾崩谷3号	I B3	鉄線・別造	多頭・斜線支綱金	鉤吊n-2	3	TK47
鳥取 備文6号	I B3	鉄線	多頭	鉤吊n-2	3	TK47
福岡 宮脇	I B3	鉄	多頭	鉤吊n-2	2	TK47
佐賀 旗巻ST006-a	I B3	鉄	打鉄	鉤吊n-2	1	TK47
大分 須荷山3号	I B3 ?	鉄	打鉄	鉤吊	2	
静岡 爽野向山12号	I Cn	鉄線・別被	—	鉤吊n-1	1	TK23～TK47
静岡 金山4号	I Cn	鉄	擬似新	?	1	TK10
京都 平治二子山南	I Cn	鉄	—	鉤吊n-2	2	
大阪 墓ノ山	I Cn	鉄	—	?	1	○
岡山 四ツ塚13号	I Cb w?	鉄線	—	鉤吊n-1・n-2	3	MT15
鳥取 六郡山1号	I Cb	鉄	—	鉤吊n-2	1	
福岡 田野瀬戸4号	I Cb	鉄線	多頭	鉤吊n-2	3	MT15
佐賀 旗巻ST006-b	I Cb	鉄	擬似新	鉤吊n-2	2	TK47
不明 井上コレクション	I Cb	鉄線	—	鉤吊	1	
鳥取 丸山2号	II B?	鉄線	多頭	鉤吊	2	TK10

【凡例】杏葉の形態分類：本編、杏葉構造：本編の鍛冶構造分類を適用、連結方法：片山2017。須恵器：田辺1981。

※：八代土居原例は複製の可能性が高い。※2：四つ吊りは複数例が田辺2005では「他のもの」と記載。

区画帯のつくりが異なっている。すなはち前2例は区画帯が外形に沿う周囲の縁金とは異なり、斜線文を入れて銀被をするのに対し、その他の例は区画帯にこのような装飾はない。また、赤尾崩谷3号墳例では、3枚の同形の多頭鉄製剣菱形杏葉が出土しているが、うち1枚（図53-1b）は別造の区画帯がなく他の2枚（図53-1a）では区画帯が置かれるこの部分にも飾鉄が打たれている。こうしたことから、前二者は区画帯が付加される前後の剣菱形杏葉の特徴を示しているといえよう¹⁹⁾。

鉤吊金具には吊手部の平面形が正方形に近いものと長方形に近いもの大きく分けて2種があるが、鉤配は両側縁に沿う2列と中央に配置する5鉤配置のものと、5鉤配置の内側にさらに4鉤を配置するものや、四辺にさらに鉤を配置するものがある（いずれも筆者分類では鉤吊a類に分類される）。すでにみたその他の属性との関係からみる限り、多頭ではない鉄製・金銅製剣菱形杏葉と同様の5鉤配置の吊金具が古く、それ以上の新を配置するのは、杏葉本体の多頭装飾に合わせた新相を示す要素とみられる。

以上の諸特徴に、田中の形態分類を加えてみれば、例示した多頭剣菱形杏葉については、赤尾崩谷2号墳例→上曾毛竺堂1号墳例→倭文6号墳例→大室241号墳例→宮脇古墳例→田野瀬戸4号墳例→八代土居原例→丸山2号墳例の順に出現したものと考えることができる。

共伴（基本的にはセット構成を）する馬具のあり方からも変遷觀は妥当である。表11にはf字形鏡板巻と雲珠辻金具の貴金属具を合わせて示した。また、須恵器の共伴例から、TK47型式期には確實に副葬され、MT15型式期までみられる。

②多頭鉄製剣菱形杏葉出現の意義

a. 鉄製剣菱形杏葉として

ここまでみてきたように鉄製剣菱形杏葉については、以下の2点が明らかになった。1点目は鉄製剣菱形杏葉の編年上の位置づけである。多くの型式の盛行は須恵器編年との関係で示せばTK23～MT15型式期で

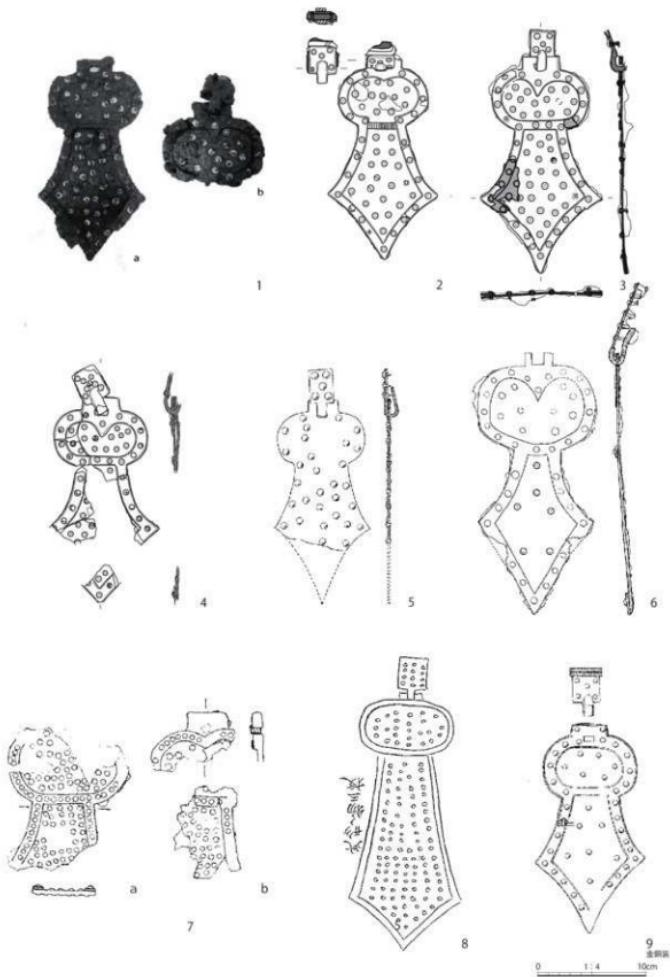


図 53 多紙刻菱形杏葉の諸例 (S=1/4)

- 1：赤尾崩谷3号墳 2：上狹天竺堂1号墳 3：倭文6号墳 4：大室251号墳
 5：宮脇古墳 6：田野瀬戸4号墳 7：丸山2号墳 8：八代土居原 9：恵下古墳

表 11 多鉢杏葉・鏡板巻一覧

【例】「尻繁・山繁」古集型式：本橋分橋。材質：鉄-鉄製、鉄-鉄-錫地錫張、鉄-金-鉄地金鋼張。吊金具：片山2017。繁：片山2016。
〔セッタ黒丸〕二字形繩板橋の分橋：本橋。板金具：双棒-双脚で脚の間に棒を有するもの。又从一复脚で脚端部を「ル」字形に曲げるもの。單一脚のもの。磯-鍵金具を有するもの。

ある。当該期は既存の編年観からいえば、f字形鏡板轡の導入、定型化の時期にあたり鉄製f字形鏡板轡や鉄製(内湾)楕円形鏡板轡などの他の系列の鉄製馬具、鍛銅製の鈴付鏡板轡や鈴付鍵轡、鈴杏葉などがみられる時期であり、系譜として同じ意匠(本稿ではこれを基本意匠と呼ぶ)をもつ馬具を材質転換(内山2013)させて馬具にバリエーションを発現させる時期にあたる。鉄製剣菱形杏葉も同時期の金銅装剣菱形杏葉の材質転換の一種とみることができる。

2点目は直接的な材質転換が平面形の点からもうかがえる一群がある一方で（I A式・I B3式）、倭では鉄製剣菱形杏葉のみにみられる平面形態の一組がある点である（I Ca・I Cb式）。田中が示したように（田中2004・2005）、鏡板や杏葉の平面形態の共通性に「型紙」や「ためし」などの存在が想定されるのであれば、本稿で仮に設定した I C式はこれまでのところ金剛装の剣菱形杏葉とは「型紙」や「ためし」などが共有されなかった可能性が考えられる。

そのようななかで、倭文6号墳例を含む初期の多鉢製剣菱形杏葉は金銅装のものと形態が共通するB3式である点には注意する必要があるだろう。

b. 多鉢装飾の意義

多額装飾は、先に述べた5世紀後半から6世紀前葉の限られた基本意匠の鏡板や杏葉を材質転換により多様化させ、さらに機能とは関係なく付加的に加えた装飾要素であるとみることができる（本稿ではこれを付加装飾と呼ぶ）²⁰⁾。多額装飾は中心的な基本意匠の馬具である剣菱形杏葉に特に多くみられることが注目される。ただし、表12、図54に示したようにそれ以外の馬具にもみられることにも注意が必要である。杏葉は後では類例の少ない下半部がのび綾長の心葉杏葉が多額装飾をもつ点が注目される。また、鏡板では京都府大耳尾2号墳第1主体部の鉄製円柏脂円鏡板（図54-9）²¹⁾、大分県飛山4号横穴の「字形鏡板」（図54-8）などにみられる。しかし、これらの類例は少ないとからもそれぞれの基本意匠の中では積極的に用いられた付加装飾ではなかった可能性がある。

朝鮮半島では多鉢装飾の馬具はみられるであろうか。鏡板や杏葉では今ところ確認できないが、木心鉄板張輪鎧や木心鉄板張杓子形壺蓋、鞍の覆輪や縁金具に認められる(図54-1~6、表13)。その中でも木心鉄板張輪鎧I B3式(図54-4)、I B5式(図54-3)やII B式に多くの事例が認められる。鉢の形態は基本的に円頭鉢で、銀被などがなされているかどうか不明なものも多い。多鉢装飾は壺本体が短柄から長柄、

部分鉄板張から全面鉄板張、輪鎧から壇鎧に変化しても継続的に見られる要素であり、機能的な意味がないとしても朝鮮半島では主として鎧の装飾技法として用いられた付加装飾であったのであろう^{22) 23)}。

倭でも舶載か列島内生産品かの問題をひとまず保留すれば、木心鉄板張輪鎧（図 54-12）や木心鉄板装杓子形壇鎧（図 54-16）にみられる。また、系譜が不明な木心鉄板装三角錐形壇鎧で鳩胸金具など金属補強をもつ一群（図 54-17）に多銅装飾があること、これがのちにも擬似鉢として残ること（図 54-18）には注目してよい（内山 2013・大谷 2016）。地域を問わず、鎧との関係が特に強いのが多銅装飾であった可能性があるからである。こうしたことと、多銅装飾が鉄製剣菱形杏葉をはじめとする鉄製馬具に目立ててみられることが想定すれば、倭文 6 号墳例のような鉄製多銅剣菱形杏葉は、金銅装の剣菱形杏葉の平面形態を決めた工人と、鎧に関わる多銅装飾を施す工人とに結ばれた関係性の中で成立した馬具である可能性が提示できるであろう。同時期の馬具生産が器種や装飾、材質ごとにどの程度の分業体制がとられていたかの解明にはまだまだ課題が多いが、倭独自の定着期の馬装体系の構築が材質転換と、付加装飾という器物生産の発想に基づいて試行錯誤的に行われていた状況の一端を示す馬具として評価できるであろう²⁴⁾。

c. 縁金への斜線文装飾

倭文 6 号墳では「字形鏡板にみられ、赤尾崩谷 2 号墳や上狛天竺堂 1 号墳例では多銅鉄製剣菱形杏葉にみられる斜線文入銀被の付加装飾の系譜」どこにたどれるであろうか²⁵⁾。諫早によれば馬具に斜線文や菱杉文（交互斜線文）が現れるのは大加耶Ⅲ段階の陝川玉田 M3 号墳が最初である（図 55-1）（諫早 2012a）。玉田 M3 号墳では、大加耶地域ではもっとも初期の「字形鏡板轡や剣菱形杏葉が出土していることから、倭では大加耶地域で初期の「字形鏡板轡・剣菱形杏葉などにみられる特徴が、最初期の一群ではなく、編年上やや後出する馬具にまとまってみられることになる²⁶⁾。玉田 M3 号墳を含む大加耶地域の剣菱形杏葉をはじめとする馬具のセットにこの特徴が比較的まとめてみられることから、諫早の示すように大加耶地域の特徴とみることができるであろう。玉田 M3 号墳とほぼ同時期に位置づけられる龍院里 1 号墳をはじめとする百濟地域の馬具にこの付加装飾技法がみられないことからすれば、倭文 6 号墳例や埼玉稻荷山古墳例を含む「字形鏡板轡別被 II～IV 式と、斜線文をもつ剣菱形杏葉の系譜は現状では大加耶地域に求めるのが適当であろう。多銅鉄製剣菱形杏葉の初期の 2 例（赤尾崩谷 3 号墳（図 53-1a）・上狛天竺堂 1 号墳（図 53-2））と同様に、区画帯にのみ斜線文を入れる例が、大加耶の山清生草 M13 号墳例（図 55-2）にみられるのも、この傍証であろう。ただし、鉄製剣菱形杏葉の多銅装飾のあり方などからみる限り、その製作は倭でなされたとみるべきであろう。百済、新羅、加耶、倭の馬具は同時期においては、基本意匠をそろえつつも材質転換や付加装飾により、微妙な差異を表すことに力が注がれた（図 56）。当該期において、馬装に差異が必要であったのであれば、なぜ、各地域社会がまったく独自の形態をもつ馬具を積極的に生み出さなかつたのかを器物の生産のメカニズムの可能性と限界性という点からも検討していくことが必要であろう。

（3）杏仁形鞍飾鉢の系譜

補足的ではあるが、平面杏仁形の鞍飾鉢も「字形鏡板轡や剣菱形杏葉、斜線文の付加装飾を持つ馬具の系譜を考える上で重要である。杏仁形の鉢は新羅や大加耶にみられるが、斜線文と同様に、大加耶で積極的に用いられていた可能性が考えられる（図 57-1～7、表 15）。倭では倭文 6 号墳例にみるように鞍橋の鉢鉢として用いられることが多かったと想定されるが、鏡板や杏葉では、千賀久により大加耶産の可能性が指摘されている（千賀 2004）滋賀県鴨稲荷山古墳の十字文格円形鏡板轡と三葉文格円形杏葉（図 57-13・14）、滋賀県円山古墳の不明鏡板の吊金具（図 57-9）で採用されているほか、埼玉稻荷山古墳（1）例では鞍縁金具（図 57-11）のほか鞍座金具（図 57-12）にも用いられている。倭文 6 号墳の杏仁形鞍飾鉢は初

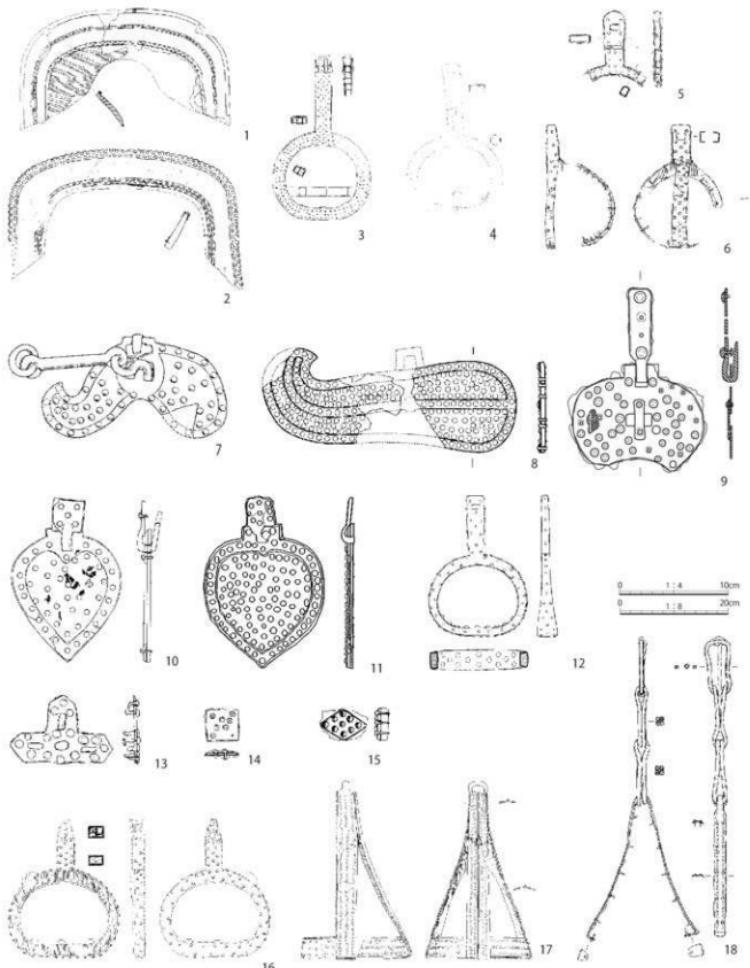


図54 多銅装飾の馬具 (1~6・12・16~18:S=1/6, 7~11・13~15:S=1/4)

- 1:玉田M1号墳 2・3:皇南大塚南墳(副) 4:雲化里1号墳 5:大成洞1号墳 6:林堂6A号墳(副)
 7:宮脇古墳 8:飛山4号横穴 9:大耳尾1号墳(1) 10:山伏山1号墳 11:芝山古墳 12:長持山古墳(1)
 13:万久里マシバ4号墳 14:西堂古賀崎古墳 15:御鷺山古墳 16:大谷古墳 17:藤ノ木古墳 18:西山6号墳

表 12 倭の多頭装飾馬具一覧

【凡例】二重線より下位は鍔。上位はそれ以外の馬具を示す。〔馬具の種類〕材質：木鉄・本心頭板張。〔新材質〕鉄頭地頭張、鍛金・鉄地頭張。〔頭器類〕田辻1981。その他の、多新馬具とはできないが、大阪府韋茶古墳、和歌山県大谷古墳の木心頭板張子形鍔の最も地頭張である。

期のものと考えられ、鏡板や杏葉だけでなく鞍にも大加耶に系譜がたどれる要素がみられる点が注目される。

2 中期後半における倭の馬装体系の予察

倭文6号墳の「字形鏡板巻」と「劍菱形杏葉」の型式学的検討により、当該期の倭と朝鮮半島南部の馬具が基本意匠と材質転換、付加装飾という3つの側面から理解できることが明らかになった。また、こうした3要素から構成される装飾馬具は、個別の馬具の差異と組み合わせ関係の差異により様々な社会的な関係を示していた。このような差異にはこれまで指摘してきたように階層差（中條1998、内山2011）も含むが、それ以外の関係も示唆される。筆者はこれを「馬装体系」と呼んでいる（片山2017）。ここでは、倭文6号墳の「字形鏡板巻」と「劍菱形杏葉」のセットの類例を中心で当該期の馬装体系の中での位置づけを検討し、馬装体系の全体についても予察する。

当該期を含めて、畿内地域の大王墓に相当する大型埴から馬具の全容は不明な点が多いため、新羅や大加耶のように馬装体系の全体像を知ることはできないが、大型埴の周囲にある陪塚出土の馬具からみる限り、最も優品の馬具セットの一つは、金銅装の f 字形鏡板轡と剣菱形杏葉に金銅装の磁金具鞍を組み

表 13 朝鮮半島の多銅装馬具一覧

遺物名	馬具の種類	馬具質	出島施用
慶尚道・昌永里 1 号 (馬頭)	木駒輪綱 (J.B.1)	?	慶州織成
慶尚道・林栗洞 1 号	木駒輪 (J.B.2)	鉄綱	慶州織成
木駒輪	木駒輪	金綱	金綱
慶州 皇南洞 2 号 (南頭)	木駒輪綱 (J.B.3)	金綱	慶州織成
	木駒輪 (J.B.4)	鉄	鉄
慶尚道・象浦大尾 (北)	木駒輪綱 (J.B.5)	?	慶州織成
慶尚道・大尾 2 号 (北) 頭及足 (副)	木駒輪綱 (J.B.6)	鉄	?
慶尚道・子馬頭 (北) 頭及足 (副)	木駒輪綱 (J.B.7)	鉄	慶州織成
慶尚道・道行綱	木駒輪綱 (J.B.8)	?	慶州織成
慶尚道・鬼首洞 1 号 (北)	木駒輪綱 (J.B.9)	?	慶州織成
固城道・内山頭 1 号 (標)	木駒輪子形綱綱	?	?
西黃海道・西山頭 1 号	木駒輪子形綱綱	?	大加那頭
高麗道・池山洞 75 号 (主)	木駒輪子形綱綱	?	大加那頭
	木駒輪綱 (J.B.10)	鉄	大加那 II
全羅南道・大成洞 1 号 (主)	木駒輪綱 (J.B.11)	鉄	金綱 II
全羅南道・牛津洞 25 号	木駒輪子形綱綱	鉄綱	大加那 IV
古津郡・汝山頭 1 号	木駒輪綱 (J.B.12)	?	?
陜川道・玉田 1 号	金綱及薄金具馬具	鉄綱	大加那 II 後
	木駒輪子形綱綱 (J.B.13)	?	?
陜川道・玉田 28 号	木駒輪綱 (J.B.14)	鉄	大加那 II
陜川道・玉田 95 号	木駒輪綱 (J.B.15)	?	大加那 II
京畿道・大草洞 1 号	木駒輪綱 (J.B.16)	?	?
蔚山道・雲化洞 30 号	木駒輪綱 (J.B.17)	鉄?	蔚山頭
蔚山道・桂渓洞 31 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.18)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 32 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.19)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 33 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.20)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 34 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.21)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 35 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.22)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 36 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.23)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 37 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.24)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 38 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.25)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 39 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.26)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 40 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.27)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 41 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.28)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 42 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.29)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 43 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.30)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 44 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.31)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 45 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.32)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 46 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.33)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 47 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.34)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 48 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.35)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 49 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.36)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 50 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.37)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 51 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.38)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 52 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.39)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 53 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.40)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 54 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.41)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 55 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.42)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 56 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.43)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 57 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.44)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 58 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.45)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 59 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.46)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 60 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.47)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 61 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.48)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 62 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.49)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 63 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.50)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 64 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.51)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 65 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.52)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 66 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.53)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 67 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.54)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 68 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.55)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 69 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.56)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 70 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.57)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 71 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.58)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 72 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.59)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 73 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.60)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 74 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.61)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 75 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.62)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 76 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.63)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 77 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.64)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 78 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.65)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 79 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.66)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 80 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.67)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 81 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.68)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 82 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.69)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 83 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.70)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 84 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.71)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 85 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.72)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 86 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.73)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 87 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.74)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 88 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.75)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 89 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.76)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 90 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.77)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 91 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.78)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 92 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.79)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 93 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.80)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 94 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.81)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 95 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.82)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 96 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.83)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 97 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.84)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 98 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.85)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 99 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.86)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 100 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.87)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 101 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.88)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 102 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.89)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 103 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.90)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 104 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.91)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 105 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.92)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 106 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.93)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 107 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.94)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 108 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.95)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 109 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.96)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 110 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.97)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 111 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.98)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 112 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.99)	?	桂渓頭
蔚山道・桂渓洞 113 (扶綱) (北) (副)	木駒輪綱 (J.B.100)	?	桂渓頭

【図例】(馬具の種類) 材質：木鉄／心木鉄抜形。編紐の分類は柳吉浩(1995)による。(馬具質) 新規、既存複合、既存複合金屬。(馬具施用) 慶州織成、慶州、慶山、金海、大加那、百濟。(譜年：李忠延2012年、長寧：李忠延2014年以上)

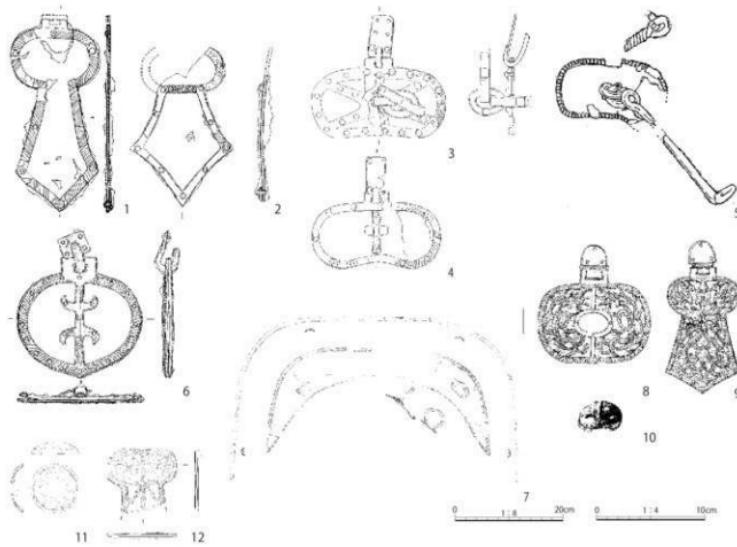


図 55 朝鮮半島における斜線文・綾杉文馬具の諸例 (1~6・8~12:S=1/4, 7:S=1/8)

- 1 : 玉田 M3 号 墓
2 : 生草 M13 号 墓
3 : 池山洞 44 号 墓 (主)
4 : 池山洞 44 号 (25)
5 : 道項里 14-1 号 墓
6 : 池山洞 45 号 墓
7 : 茶戸里 B1 祀
8 ~ 10 : 馴覆塚
11 : 大成洞 91 号 墓
12 : 蓮山洞 8 号 墓

表14 朝鮮半島の斜線文・縞杉文の馬具一覧

遺跡名	馬具の種類	材質	馬具編年
慶州 船尾塚	馬具透板・板刀頭鏡板轡	▲金銅板に集文、 透文透板・板刀頭鏡板轡	慶州IV
慶州 金谷原	馬具透板・板刀頭鏡板轡	▲金銅板に集文、 透文透板・板刀頭鏡板轡	慶州V
慶州 周城 松城原〔LA-1〕	馬具透板・板刀頭鏡板轡	▲金銅板に集文、 透文透板・板刀頭鏡板轡	慶州V
高麗 池山洞4号〔主〕	内透椎円形鏡板轡・貴金属	鉄組	大加那里
高麗 池山洞4号〔副〕	内透椎円形鏡板轡・貴金属	鉄組	大加那里
高麗 池山洞6号〔主〕	透葉文透刀形杏葉	鉄組	大加那里
高麗 池山洞6号〔副〕	透葉文透刀形杏葉	鉄組	大加那里
金海 大成洞1号〔主〕	透文透刀形杏葉・貴金属	▲鉄組	金海I段
金海 大成洞1号〔副〕	透文透刀形杏葉・貴金属	鉄組	金海I段
釜山 漢川8号	透刀形杏葉・貴金属	▲金銅板に集文、 透文透刀形杏葉	釜山IV
山浦 生草M3号	透刀形杏葉・〔金銅板〕・貴金属	鉄組	大加那里
昌原 茶戸里則祭祀	金銅製鏡具・貴金属	鉄組	大加那里
咸羅 白川里M-3号	貴金属	鉄組	大加那里
咸安 道明里14-1号	内透椎円形鏡板轡	9	大加那里
陝州 玉田里M1号	透葉文透刀形杏葉・〔金銅板〕・貴金属	鉄組	大加那里
陝州 玉田里M2号	貴金属	鉄組	大加那里
陝州 玉田里M3号	貴金属	鉄組	大加那里
昌原前原 金浦原古墳	貴金属	鉄組	大加那里
新羅 小白山古墳	透刀形杏葉・貴金属・板刀頭鏡板轡	▲金銅板に集文	新羅

【凡例】〔材質〕▲は貴金属や鍍金への透刻文・鍍文文の施文とは異なり。他の文様と同時に同じ文様に施されたもの。鉄組・鉄地鉄組、鉄金・鉄地鉄金（馬具編年）譲る2012による



図56 中期後半の馬具の特徴

この特徴がもっともよく表れているのが、倭文6号墳から出土したf字形鏡板轡と多鋸鉄製剣菱形杏葉の馬具セットである。倭文6号墳を含めた類例出土古墳の諸特徴を表17に示した。埴丘規模でいえば、大型の前方後円墳から倭文6号墳にみると小規模墳、あるいは積石塚が含まれ、埋葬施設も礫構、木棺直葬、初期の横穴式石室と合わせて多様である。分布地域も東は関東から倭文6号墳例にみると山陰地域にまでみられる²⁷⁾。こうした出土古墳やその分布地域はf字形鏡板轡や剣菱形杏葉、梢円形鏡板轡のそれと重なるが、馬具そのものの「線的」な関係性をこそ重視すべきであろう。この点で注目されるのは桃崎祐輔が埼玉稻荷山古墳（1）例と赤尾崩谷3号墳のf字形鏡板轡について指摘した（桃崎2016）ように、ワカタケルに関係する側近や官僚クラスの被葬者が想定される古墳からこれらの馬具が出土している点である。文献史上の当該期の因幡地域の位置づけなどについては不明な点が多いものの、倭文6号墳の被葬者の活躍した時期はワカタケル期に重なる部分もあり（鈴木2017）、こうした時期にワカタケルを中心におく畿内地域との接点をもつたことが、埼玉稻荷山古墳や赤尾崩谷古墳群と共通する馬具を保有することになった歴史的背景とみることができるであろう。倭文6号墳が古墳時代前期までの古墳群の中に時をおいて

表15 朝鮮半島の杏仁形鉄馬具一覧

遺跡名	馬具の種類	材質	馬具編年
慶州 榮南大塚南〔副〕	鞍透轡	銀金、慶州Ⅲ後	
慶州 逸林窟14号	鞍祿金具	金銅、慶州VI	
高麗 池山洞75号〔主〕	鞍具	鉄組	大加那II
高麗 池山洞44号〔主〕	鞍祿金具	鉄組	大加那III
金海 大成洞1号〔主〕	鞍祿金具	鉄組	金海II
陝州 玉田M1号	鞍祿金具	？	大加那II後

【凡例】〔材質〕銀金・鉄地鉄金組、鉄組・鉄地鉄組（馬具編年）譲る2012による

合わせたものであったと推測される（大阪府長持山古墳：図58-1～3）。ただし、鍍金具を有する鞍を除いて、f字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットは畿内以外の各地にもみられる。また、当該期のf字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセットよりも優品とみられる馬具も畿内地域以外で出土している（福井県十善の森古墳（後）：図58-4～5、熊本県江田船山古墳：図58-6、和歌山県大谷古墳：図58-7～8）。こうした馬具は共伴するその他の副葬器物などにも優品が多い古墳に目立つという特徴はあるけれども、古墳の規模や副葬品により厳然とした階層秩序が基本意匠、材質転換、付加装飾を駆使することによって組み立てられていたとは少なくとも当該期においては考えにくい。むしろ、そうした装飾馬具のあり方が必ずしも古墳の築かれた地域の脈絡や埴丘規模、埴形と必ずしも厳密に対応しないことこそを評価すべきであろう。

この点で注目されるのは桃崎祐輔が埼玉稻荷山古墳（1）例と赤尾崩谷3号墳のf字形鏡板轡について指摘した（桃崎2016）ように、ワカタケルに関係する側近や官僚クラスの被葬者が想定される古墳からこれらの馬具が出土している点である。文献史上の当該期の因幡地域の位置づけなどについては不明な点が多いものの、倭文6号墳の被葬者の活躍した時期はワカタケル期に重なる部分もあり（鈴木2017）、こうした時期にワカタケルを中心におく畿内地域との接点をもつたことが、埼玉稻荷山古墳や赤尾崩谷古墳群と共通する馬具を保有することになった歴史的背景とみることができるであろう。倭文6号墳が古墳時代前期までの古墳群の中に時をおいて

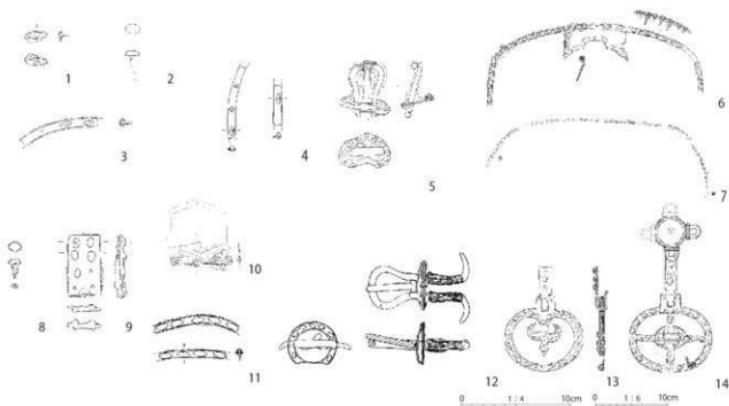


図 57 杏仁形馬具の諸例 (1~5・8~12: S=1/4, 6・7・13・14: S=1/6)

1・3: 池山洞44号墳(主) 2: 斗洛里32号墳 4: 大成洞1号墳 5・6: 池山洞75号墳 7: 鶴林路14号墓
8: 七ツ塚4号墳(1) 9: 円山古墳 10: 野神古墳 11・12: 埼玉稻荷山古墳(1) 13・14: 鶴稻荷山古墳

表 16 傷の杏仁形鉢の馬具一覧

遺跡名	馬具種類	枚	材質	本質	備考	須惠器
棚木[益子大王塚]	鞍継金具	1	鉄銀			
埼玉[稻荷山(1)]	鞍継金具	1	鉄銀			TK23~TK47
滋賀[鶴稻荷山]	鞍座金具	1	鉄銀			TK10
滋賀[円山]	鞍板	1	鉄銀			
滋賀[円山]	鞍板古葉吊金具	1	鉄銀			
奈良[ホリノウチ4号]	方形鉤金具	1	鉄銀			TK10
奈良[野神]	鞍継金具or鞍or胡継	1	鉄銀			
奈良[天保12号]	鞍継金具	1	鉄銀			
福岡[勝浦峯ノ塚]	鞍継金具or胡継鞍頭	1	鉄銀			
静岡[茶屋辻1号]	鞍継鉢	6	鉄銀?			TK10
静岡[松長6号]	鞍継鉢	5	鉄銀? 直交1・平行3			MT15~
愛知[小幡茶臼山]	鞍継鉢	4	鉄銀?			TK10
岐阜[船木山G29号]	鞍継鉢	13	鉄銀? 直交6・平行1			円崩継を作出
岐阜[船木山G19号]	鞍継鉢	2	鉄銀?			円崩継を作出
三重[井田川茶臼山]	鞍継鉢	6	鉄銀?			黒形継を作出
三重[天保12号]	鞍継鉢	10	鉄銀? 直交2			MT15~TK10
京都[上猪天竺堂1号]	鞍継鉢	1	鉄銀?			TK23~MT15
京都[井ノ内種荷塚(後)]	鞍継鉢	11	鉄銀? 直交9			TK10~TK43
京都[七ツ塚4号(1)]	鞍継鉢	34	鉄銀 直交13・並行9・斜行6			TK10
京都[弁財1号]	鞍継鉢	3	鉄銀?			TK10~TK43
京都[物集女東塚]	鞍継鉢	15	鉄銀? 直交5・斜行2			花形継を作出
奈良[石上北AS号]	鞍継鉢	4	鉄銀?			異地に康陵?
奈良[忍海H-35号]	鞍継鉢	4	?	直交1	やや丸・唐頭	MT15~TK10
大阪[剪戸1号]	鞍継鉢	5	鉄銀?	直交3		TK43
兵庫[小丸山2号]	鞍継鉢	3	?	直交2	やや丸	TK43~TK217
岡山[若田1号]	鞍継鉢?	1	新銀	直交1		TK10~
岡山[持坂20号]	鞍継鉢	14	鉄金?	直交11・斜行1		TK10~
岡山[中宮1号]	鞍継鉢	15	鉄銀	直交4・平行11	やや丸	MT15~TK10
鳥取[備文6号]	鞍継鉢	9	鉄銀	直交9		TK47
佐賀[ヒヤーガンサン]	鞍継鉢	5	?	直交1・平行1・斜行2	三日月形	TK10~TK209

[凡例] 太線より下は直角打たれた輪郭線を示す。上位はそれ以外の馬具を示す。[須惠器] 鉄鉢・鉄地鉢頭、鍍金・鉄地金鉢頭。[本質] 直交・斜行に対して直交する木質。平行・斜行に対して平行する木質。斜行・斜行に対して斜交する木質。[須惠器] 並行/96による

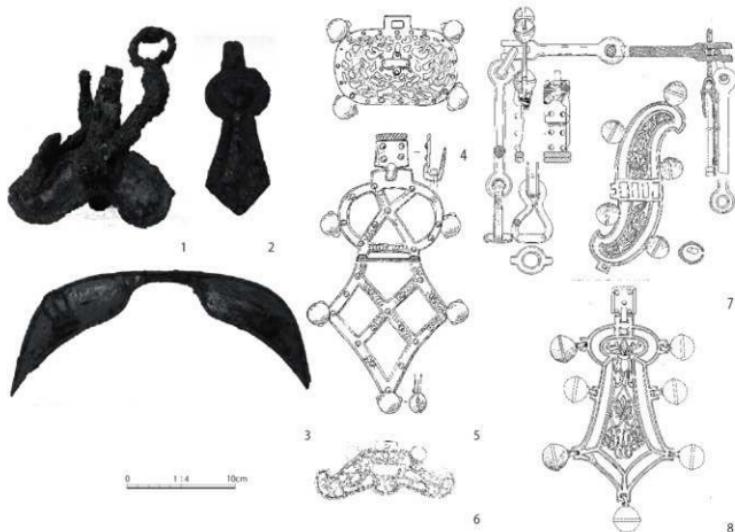


図58 中期後半における馬装体系 (S-1/4, 1~3は縮尺不同)
1~3:長持山古墳 (1) 4・5:十善の森古墳 (後) 6:江田船山古墳 7・8:大谷古墳

突然施かれた一小古墳である点も見方によれば整合的であろう。

3 山陰における馬具出土古墳と倭文6号墳

では、山陰における馬具出土古墳としての、倭文6号墳はどのように位置づけることができるであろうか。6世紀前葉以降は出雲地域で装饰馬具出土古墳が増加するが、当該期には山陽や近畿地域北部に比べて馬具出土古墳は限られる。近年、米子市東宗像21号墳から鉄鏡別被I式のf字形鏡板轡が出土しており、倭文6号墳の馬具セットとの厳密な製作時期差は判断し難いが、因幡と伯耆の両地域でほぼ同時期にf字形鏡板轡を含む馬具セットをもつ有力者が現れることを示す。現状では装饰馬具の導入が出雲地域よりも先行する可能性も高い。やや時期が下るf字形鏡板轡を含む馬具セットや、鉄製内湾横円形鏡板轡を含む馬具セットも伯耆、因幡の両地域でみられる点も注意される。古墳群は異なるが、千代川両岸の倭文古墳群と六部山古墳群で、TK23~MT15型式期のf字形鏡板轡、剣菱形杏葉を中心とする馬具セットが出土していることは特に注目すべきであろう。

倭において定型化装饰馬具の導入は上毛や伊那地域にみるように馬匹文化の導入との関係が伺える。因幡地域では倭文6号墳や六部山1号墳前後の馬埋葬はまだみつかっていないが、伯耆では長瀬高浜跡地でTK23型式期以降、古墳に伴う馬埋葬がみつかっており(図59-1、表17)、その他にも百塚古墳群の周溝内の埋葬施設などから馬具が出土しており(図59-3)、馬の埋葬の可能性がある。近年、因幡でも鳥取市

表 17 烏取県の古墳時代の馬埋葬等遺構一覧

所在地	出土遺構	馬具	馬骨	土壤 (m)	時期
鳥取 御岳山1土壤	35号墳北側周溝	鉢形立圓腹状鏡板磚・木心鉄板筒頭蓋・鋸具・瓦形熊食具・瓦形熊食具	—	長さ1.8・幅0.74・ (深さ0.37)	
鳥取 大鶴802段路	—	—	馬骨	—	TK23～ TK47
南濃 早原14号SXI	14号墳北東側周溝溝底	鉢形立圓腹状鏡板磚	—	長さ1.7・幅0.93・ (深さ0.45)	TK209
湯梨浜 長瀬高浜2号	2号墳周溝内16F NEG	—	馬齒2・馬骨1	—	
湯梨浜 長瀬高浜3号	3号墳周溝内	—	馬齒・馬骨	—	
湯梨浜 長瀬高浜4号	4号墳丘東側周溝外肩	—	馬齒	—	
湯梨浜 長瀬高浜7号	4号墳南側周溝内	—	馬齒	—	
馬具	馬轡1	—	馬骨1頭分	長さ1.43・幅1.10・ (深さ0.43)	
馬具	馬轡2	—	馬上下顎臼齒	長さ1.86・幅1.15・ (深さ0.39)	
馬具	馬轡3	—	馬下顎臼齒	—	
湯梨浜 長瀬高浜8号	8号墳周溝北側10ENWG	—	馬齒5以上	—	
湯梨浜 長瀬高浜28号	146地区SE02井戸跡上	—	馬齒14	—	
米子 百塚26号	26号墳周溝内側	筒	—	—	TK23
米子 百塚49号	49号墳周溝北側理土	鉄製内溝内鏡板磚	—	—	TK10
米子 百塚112号	112号墳周溝北側理土	鉢形立圓腹状鏡板磚	—	—	TK43

表 18 類例出土古墳の特徴

地名	丁字形鏡版の類例資料			多面鏡版馬具類別分類の類似資料		
	施	年	出	施	年	出
所在地	鳥取 塙本11号	昭和24年	東干	大山田41号・八代上野原・大山田1号	昭和24年	丸山2号・田野原2号
地形	海抜	10m	自然地盤	野原伊勢地	10m	山梨盆地
地質	四國諸島	—	砂質土	野原伊勢地	—	砂質土
地影	四方	—	砂質土	野原伊勢地	—	砂質土
埴丘 (m)	13×2.0	120×12	12×4.5	14×9	?	27×9
埋葬施設	木棺直葬	硬梆	木棺直葬	懸穴式石室・合掌形石室	?	横穴式石室
副葬品	鐵刀・衝角 青銅・三角新 短甲・歎 刀・小札 鐵鍔・石突 工具	圓型鏡・輪 金具・象嵌 金具・劍 玉軸・鍔 輪・劍・鍔 先・鍔・鍔 鐵・須然 器・土師器	圓型鏡・玉 輪・劍・鍔 金具・劍 輪・劍・鍔 玉軸・鍔 輪・刀子 玉軸・刀子 二チユニアツ 器	便製鏡・玉 輪・劍・鍔 鐵刀・ガタ 鐵刀・鐵 鐵器、ミ 鑑・刀子 鑑・刀子 ニチユニアツ 器	鐵刀・刀 子・須然 甲・鐵鍔 器・土師器	胡蘿・小札 甲・鐵鍔 刀・鐵鍔 須然器
馬具	丁字形鏡版 組合仕合 金具・輪 金具・劍 鐵鍔・輪 工具	組合仕合 金具・輪 金具・劍 鐵鍔・輪 工具	兵庫県立 鏡板	不明鏡版 物・組合仕 合金具・輪 鐵鍔・輪 工具	丁字形鏡版 物・組合仕 合金具・輪 鐵鍔・輪 工具	組合仕合 金・輪・鏡 組合仕合 金具・鏡 組合仕合 金具・鏡
消逝地	TK47	TK23～47	TK47	MT15	MT15	—
					TK23～47	TK47
					TK10	MT15
					TK47	—

大柄遺跡から TK23～TK47 型式期の土器を伴って溝の祭祀に用いられた馬骨がみつかった（図59-2）。馬具の存在からは当然、馬の存在が想定されるが、因幡・伯耆両地域での5世紀後半段階での馬と騎馬文化の導入は、馬資料、馬具資料の存在から着実に跡付けられる（表18）。伯耆においては、大山等の火山活動によって形成された海と川、山地によって細かく区切られた低丘陵は牧に適していた可能性があり、これが律令期における伯耆への諸国牧の設置と関わり、歴史的な名馬飼養地域につながった可能性がある。因幡地域では地形環境はやや異なるが、細かく区切られた地形が古墳の築造単位などからもうかがえる。また、馬匹の動きに関する伯耆と畿内地域を結ぶ地域としての背景も想定すべきかもしれない。

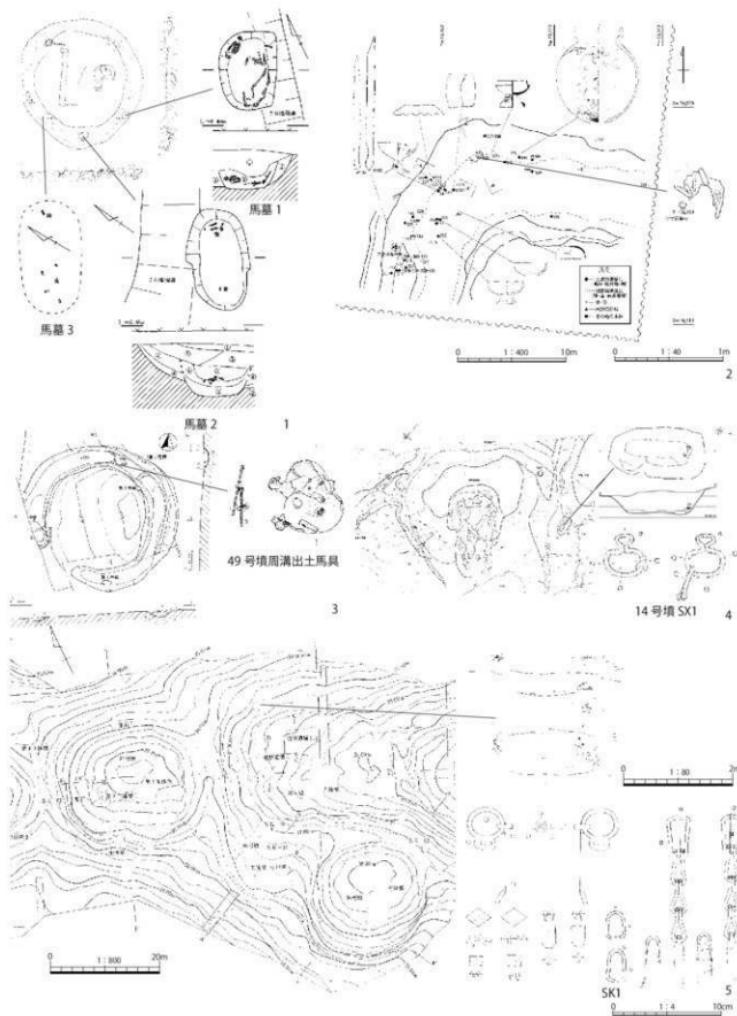


図 59 烏取県の古墳時代馬埋葬等の遺構

1：長瀬高浜7号墳 2：大柄遺跡802流路 3：百塚49号墳 4：早里14号墳 5：面影山古墳群

まとめ

本稿では、f字形鏡板轡と剣菱形杏葉を中心に倭文6号墳の馬具の型式学的位置、馬具出土古墳としての位置、山陰という地域的な枠組みの3点から位置づけた。後2点については、やや雑駁な議論になったが、当該期の馬具のあり方が倭文6号墳の具体例をもとに基本意匠、材質転換、付加装飾という3側面から理解できることを示した。倭文6号墳は山陰の小古墳ではあるが、その被葬者が保有した馬具は当時の後の馬具の特質をよく示す。セットの全体像や良好な出土状況から一定程度の確度をもって馬装復元を示せる点も重要な要素である。なお、倭文6号墳からは馬具以外にも、極めて良好な武器武具セットが出土している。当該期には馬具による馬装大系だけでなく、甲冑や刀剣などの器物によっても様々な社会的関係性が示されていた。倭文6号墳の被葬者の社会的位置づけは、馬具のみでなく、こうした被葬者を取り巻く様々な関係をそれが表示された器物の関係性を丹念に読み解いていくことによって可能になる。その他の器物に馬具と同様の複雑な体系が存在していたのかどうか、これについても稿を改めて追及していきたい。

謝辞

本稿に關係する資料調査におきましては下記の方々・機関にお世話になりました。倭文6号墳出土馬具を整理・報告する機会と本稿を執筆する機会を与えていただき鳥取大学高田健一先生・中原計先生、加川崇氏はじめとする鳥取市教育委員会、関連する馬具についてご教示を賜った諫平直人氏には大変お世話になりました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

なお本稿は日本学術振興会特別研究員奨励賞（課題番号：26・3950）、平成29年度財团法人高梨学術奨励基金による「奈良時代における「新羅系」馬具の再検討」の成果の一部である。

飯塚健太 石坂俊郎 大坪州一郎 風間栄一 小池浩平 佐伯純也 酒井雅代 阪口英穂 下端哉 新谷勝行
鈴木一有 野中仁 橋本輝彦 益田雅司 柳世耕 山田広幸 横須賀倫達 李在煥
木津川市教育委員会 京丹後市教育委員会 京都大学総合博物館 群馬県立歴史博物館 延北大学校博物館 埼玉県立さきたま史跡の博物館 桜井市教育委員会 鳥取県立博物館 長野市教育委員会 文化庁 宗像市教育委員会 米子市教育委員会 米子市埋蔵文化財センター 和歌山市立博物館 京丹後市立丹後古代の里資料館

註

- 1) 千賀久も倭と朝鮮半島における初期のf字形鏡板轡の鏡板に二系統があることに注目しているが、両者の関係性については具体的に述べられていない（千賀 1994）。
- 2) 調査担当者である桜井市教育委員会橋本輝彦、飯塚健太両氏のご厚意で赤尾崩谷古墳群の馬具全体を実見させていただき、共伴須器や築造時期についてもご教示を得た。
- 3) 特に、セットをなす杏葉との技法上の共通性を検討するうえでは、鏡板轡にだけみられる轡としての構造は適していない。
- 4) 剣菱形杏葉の類型は（田中 2005）に基づく。
- 5) 雪珠辻金具については、環状雲珠や組合せ辻金具で貴金属に斜線文や綾杉文をもたないものが古く、もつものが新しく、鉢状雲珠や辻金具の採用はさらには新しい要素とみる編年觀をとる。
- 6) 鞍については（宮代 1990）を参考にし、鞍の構造は双脚式で間に棒を挟むものが最も古相を示し、双脚式で脚墊部を「ル」字形に曲げるものの、一脚式のものの順に新相を示すという編年觀をとる。
- 7) 甲の編年は（川畑 2016）に基づく。小札甲については、内山（2008）に基づく鈴木（2017）の整理を参考にする。
- 8) 鉄讃の編年は中期後半から後期初頭の例にのみ示したが（鈴木 2016）に基づく。
- 9) 須恵器編年は（田辺 1981）に基づく。
- 10) 固定式遊環という名称のほかに二重衝先環（大谷 2014、神 2017）という名称もあるが、ここでは、事実報告と同様に固定式遊環を用いる。

- 11) f字形鏡板轡で覆金具を用いるものは神の研究からも明らかなように、細分は可能であるが（神 2017），本稿では、倭文 6 号埴例を前後する時期を検討の中心とするため、ここでは詳述しない。
- 12) 内湾梢円形鏡板轡で固定式遊環環境をもついるものには、長野県諫原古墳例、同県北木城古墳例、奈良県亘勢山 75 号埴例、出土地不明の井上コレクション例がある。いずれも内湾梢円形鏡板轡では少數の金銅装で緑金をもつものである点は注意される。
- 13) 朝鮮半島南部における編年については基本的に諫早の編年に基づく。諫早編年は轡の製作技術を基軸に地域編年を組み立て、地域編年を統合して朝鮮半島南部編年を組み立てる（諫早 2012 : pp.70-71）。大加耶では朝鮮半島南部 I 段階に相当する馬具がまだ出土していないので、大加耶の地域編年とその他の地域編年は表記上 1 段階ずつずれるが、ここでは、統合編年を用いる。
- 14) f 字形鏡板轡を含めた後・朝鮮半島の固定式遊環の轡については、大谷宏治の集成がある（大谷 2014）。大谷の集成に含まれないものとして、倭では栃木県助戸十二天古墳例（f 字）、茨城県三昧塚古墳例（f 字）、群馬県井出二子山古墳例（f 字？）、群馬県姥山古墳例（鉢付鍵）、愛知県大須二子山古墳例（f 字）、三重県大里西沖遺跡 SK5 例（f 字）、奈良県赤尾崩谷 3 号埴例（f 字）、奈良県新沢 451 号埴例（f 字？）、岡山県勝負砂古墳（鉢付鍵）、福岡県山の神古墳 A 例（f 字）、福岡県飯田 1 号横穴例（鍵）、福岡県新行方古墳例（鍵）、福岡県竹並 F-22 号横穴墓例（鍵）、伝・群馬県出土（天理参考館蔵）例（f 字）、井上コレクション例（内湾梢円）などがある。また、朝鮮半島の事例として、慶州鶴林路 14 号墓例（鍵）、高靈池山洞（巣）I-107 号例（鍵）、宜寧景山里 2 号埴例（鍵）などがある。
- 15) 倭では、これまでのところ古墳時代中期後半から後期前半にかけての固定式遊環を用いた鍵轡は確認されていないが、群馬県姥山古墳例や岡山県勝負砂古墳例にみるとように鉢付の鍵轡で轡構造がわかる例では固定式遊環が用いられている点は注目される。これらの位置づけについては勝負砂古墳の報告、考察を準備しているので稿を改めたい。
- 16) 田中の劍菱形杏葉の分類は、緑金をもつものを対象とし、第一の分類属性として緑金上の鍛数を挙げる。この点では、本稿分類の鉄式の構造をもつ鉄製劍菱形杏葉への適用は適切ではないかもしれないが、緑金上の鍛数という属性を除いても、平面形態の分類が妥当であることも明らかである。
- 17) 上狹天竺堂 1 号埴の例については、未報告であるが木津川市教育委員会大坪州一郎氏のご厚意により実見することができた
- 18) 大室 241 号埴例については、未報告であるが長野市教育委員会風間栄一氏のご厚意により実見することができた。
- 19) 赤尾崩谷 3 号埴例のこのような特徴から考えると、区画帯は周囲の緑金とは一体ではない可能性がある。これは、上狹天竺堂 1 号埴例にもあてはまる。なお、上狹天竺堂 1 号埴例については、X 線写真を拝見したが、別造なのか、一体造なのかを確認することはできなかった。
- 20) 緑金を有する鏡板や杏葉、鞍などは緑金上の鍛が新しくなるにつれてまばらなものから、密なものへと変化する。ただし、どこからを多鍛とするのかは難しい。本稿では、鏡板や杏葉では、緑金以外の内区などへの打鍛が目立つものを多鍛馬具とする。また、鞍でも図 55-1・2 などは、他の資料と比して明らかに必要以上の打鍛が認められる。鍔については、判断が難しいが、やや主観的に必要以上に打鍛しているものを仮に多鍛馬具と判断した。今後、定義を明確にしていきたい。
- 21) 大耳尾 2 号埴（1）例については諫早直人氏より実測図の提供を受けた
- 22) 装飾鍛の可能性は造永 E 1-1 号（副）、玉田 28 号、玉田 95 号の木心鉄板張輪轡について報告書でも指摘されている。
- 23) また、馬具ではないが、胡籠の筒金具や吊金具に多鍛装飾がみられる点も注目される。鏡板轡や杏葉はセットを構成し馬装を構成するまではほとんどが金属素材の加工という点から成り立っているのに対し、鞍や鍔は一つの製品の製作に木材、織物、皮革などが関係する。胡籠もこういった製作工程の特徴をもつ器物である。それらの付加装飾が多鍛装飾である点に注意すべきである。
- 24) これらの鍔と同時に存在する他の鞍金具も本体は鉄製で鍔は銀被で多鍛のものもあり、こういった馬具以外の金属製品との関係も今後追及していく必要がある。

- 25) 日本列島では、斜線文をもつ馬具は、本稿で紹介した「字形鏡板轡の諸例の他に、鉄製内湾梢円形鏡板轡（千葉県宿崎1号墳例、長野県月の木1号墳周溝例、福岡県本郷野原101号土壙例）、鞍緑金具（奈良県野神古墳例、和歌山県天王山古墳例）、そして膨大な量の資金具がある。
- 26) こういった諸要素の発現の錯綜した状況が、固定式遊環の問題と同様に、後の「字形鏡板轡と剣菱形杏葉の系譜地、船載元の問題と関連している可能性がある。
- 27) 多様の鏡板轡、杏葉が日本海沿岸地域に比較的よくみられることは注意すべきかもしれない。

引用・参考文献

日本語

- 諫早直人 2005 「朝鮮半島南部三国時代における轡製作技術の展開」『古文化談叢』第54集、九州古文化研究会
- 諫早直人 2012a 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣出版
- 諫早直人 2012b 「統一新羅時代の轡製作」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所学報第92冊
- 井上貴央 1983 「長瀬高浜遺跡より出土した人骨と動物遺体について」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI』鳥取県教育文化財団報告書14(財)鳥取県教育文化財団
- 内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」大谷晃二編『96特別展 黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘
- 内山敏行 2008 「挂甲の変遷と交流—古墳時代中・後期の威孔2列小札とΩ字型腰札—」「王權と武器と信仰」同成社
- 内山敏行 2013 「馬具」—漸和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社
- 大谷宏治 2014 「古墳時代終末期の遞轡の新例—菊川市篠ヶ谷S A 8号横穴墓出土轡の復原—」『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号、静岡県埋蔵文化財センター
- 大谷宏治 2015 「古墳時代後期以降の鞍具式・板状掛留式立聞遞轡の特質」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』河上邦彦先生古稀記念会
- 大谷宏治 2016 「擬似鏡表現のある鍍金具の特質」『静岡県考古学研究』No.47、静岡県考古学会
- 岡安光彦 2003 「五世紀の馬具と稻荷山古墳」小川良祐・狩野久・吉村武彦編『ワカタケル大王とその時代—埼玉稲荷山古墳』山川出版社
- 小野山節 1964 「剣菱形杏葉をともなう馬具の性格」『日本考古学協会昭和39年度大会 研究発表要旨』日本考古学会
- 小野山節 1992 「古墳時代の馬具」日本馬具大鑑編集委員会『日本馬具大鑑』第1巻古代上、日本中央競馬会・吉川弘文館
- 片山健太郎 2016 「古墳時代馬具における繋の基礎的研究」『史林』99卷6号、史学研究会
- 片山健太郎 2017 「古墳時代馬具における繋の変化とその背景」『考古学研究』64卷3号、考古学研究会
- 門脇隆志 2017 「鳥取県域におけるウマの導入について—大柄遺跡・長瀬高浜古墳群のウマの出土例から—」水村直人ほか『大柄遺跡I』(財)鳥取県教育文化財団
- 川畠純 2016 「甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究」平成24~27年度科学研究費(学術研究助成基金助成金(若手研究(B))研究成果報告書(課題番号:24720368)奈良文化財研究所
- 坂本美夫 1985 「馬具」考古学ライブラー34、ニュー・サイエンス社
- 神啓崇 2016 「西都原古墳群出土心葉形十字文梢円形鏡板付轡・心葉形三葉文杏葉の再検討」『七隈史学』第18号、七隈史学会
- 神啓崇 2017 「馬具の構造変化とその意義—西堂古賀崎古墳馬具の再検討—」『平成29年度九州考古学会総会 研究発表資料集』九州考古学会
- 鈴木一有 2003 「中期古墳における副葬鏡の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集、帝京大学山梨文化財研究所
- 鈴木一有 2017 「志段味大塚古墳と5世紀後半の倭王權」深谷淳編『志段味大塚古墳群Ⅲ』名古屋市教育委員会、名古

屋市文化財調査報告 94

- 田中由理 2004 「丁字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第 51 卷第 2 号、考古学研究会
- 田中由理 2005 「劍菱形杏葉と 6 世紀前葉の馬具生産」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』
- 千賀 久 1994 「日本出土初期馬具の系譜 2—5 世紀後半の馬装具を中心にして」奈良県立橿原考古学研究所『橿原考古学研究所論集』第 12、吉川弘文館
- 千賀 久 2004 「日本出土の『非新羅系』馬装具の系譜 大加耶圓の馬具との比較を中心に」白石太一郎・上野祥史編『東アジアにおける倭と伽耶の交流』国立歴史民俗研究博物館第 110 集、国立歴史民俗博物館
- 宮代栄一 1993 「5・6 世紀における馬具の「セット」について—丁字形鏡板付轡・鉄製梢円鏡板付轡・劍菱形杏葉を中心にして」『九州考古学』第 68 号、九州考古学会
- 桃崎祐輔 1993 「古墳に伴う牛馬供犠の検討—日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例と比較して—」『古文化談叢』第 31 集、九州古文化研究会
- 桃崎祐輔 2016 「日本列島の初期の馬具」古代史シンポジウム「発見・検証 日本の古代」編集委員会『発見・検証 日本の古代 II 騎馬文化と古代のイノベーション』KADOKAWA

ハンガル

- 柳昌煥 1995 「伽耶古墳出土 鏈子에 대한 研究」『韓國考古學報』33、韓國考古学会
- 이현정 2014 「馬具 與 본 昌寧地域 의 馬事 文化」김학중ほか『미사벌의 지배자, 그 기억을 더듬다』国立金海博物館・昌寧博物館・ウリ文化財研究院
- 이현정 2013 「울산 지역 원 삼국 ~ 삼국 시대 마구 의 등자의 변천』『울산 철 문화』울산박물관 학술총서 V

挿図・表出典

- 表 8 ~ 表 18 : 筆者作成 () は筆者実測もしくは写真撮影で、所蔵機関を示す。特に明記しないものは遺跡出典による。
- 図 41 : 内山 1996・2014 を再構成。図 42 : 2. 本書、(鳥取市教委), 3. (桜井市教委)。図 43・45・47 ~ 49 : 筆者作成。図 44・46 : 漢早 2012 を改変再トレース。図 50 : 1. (三重県埋文センター 1994), 2. (望月 1981), 3. 本書、(鳥取市教委)。4. (高崎市史編さん委員会 1999), 5. (芦井市教委 1999), 6. (御所市教委 2002), 7. (新庄町教委 1988), 8. (群馬県教委ほか 1999), 9. (財)鳥取県埋文センター 2002), 10・11. (川江 1992), 12・13. (漢早 2009), 14. (韓國考古環境研究所ほか 2010), 15. (忠清南道文化財研究所ほか 2013), 16. (漢早 2016), 17. (伊藤 1979), 18. (正成齋 2009), 19. (慶尚大学校博物館 2004), 20. (国立光州博物館 1984), 21. 国立慶州博物館 2010, 22~23. (漢早 2012), 図 51 : 関安 2003, 図 52:1. (宇治市教委 1991), 2. (阪田市教委 2000), 3・4. (佐賀県教委 1993), 5. (近藤 1992), 図 53 : I. (桜井市教委), 2. (木津川市教委), 3. 本書、(鳥取市教委), 4. (長野市教委), 5. (高島ほか 1973), 6. 実見上の上. (宗像市教委 2007) 図面を改変。7. (日高町史編纂審議委員会 1984), 8. (川見 2017), 9. (小野山ほか 1980). 図 54 : 1. (慶尚大学校博物館 1992), 2・3. (文化財管理局ほか 1993・1994), 4. (蔚山文化財研究院 2008), 5. (慶星大学校博物館 2010), 6. (慶南大学校博物館 2003), 7. (高島ほか 1973) 8. (大分県教委 1973), 9. 漢早氏実測図を筆者トレース, 10. (寺門市史編さん委員会 1973), 11. (富山 2009), 12. (小野山 1966), 13. (閑宮町教委 1992), 14. (前原市教委 1994), 15. (南河内町史編さん委員会 1992), 16. (樋口ほか 1959), 17. (樋口研 1990), 18. (岡山県教委 1996), 図 55 : 1. (慶星大学校博物館 1990), 2. (慶尚大学校博物館 2009), 3・4. (高麗大加耶博物館ほか 2009), 5. (昌原大学校博物館 1992), 6. (高麗大 1979), 7. (国立中央博物館 2001 ほか), 8・9. (馬日 1980), 10. (梅原 1932), 11. (大洞洞古墳博物館 2015), 12. (釜山博物館 2014), 図 56 : (左上から右下へ) 俊文 6 号墳・本書、鯨江亀塚・(柏原市史編さん委員会 1985), 志段味大塚・(名古屋市教委 2017), 鮫塚塚・(馬日 1980), 玉田 M3 号・(慶尚大学校博物館 1990), 池山洞 4 号・(高麗大加耶博物館ほか 2009), 恵下・(小野山ほか 1980). 図 57 : 1・3. (高麗大加耶博物館ほか 2009), 2. (全北大学校博物館ほか 2015), 4. (慶星大学校博物館 2010), 5・6. (高麗大 2012), 7. (国立慶州博物館 2010), 8. (長崎京市教委 2002), 9. (野洲町教委 2001), 10. (千賀 1977), 11・12. (埼玉県教委 1980), 13・14. (京都大学文学部考古学研究室 1995). 図 58:1 ~ 3 : (京都大学総合博物館 1997), 4・5 : (福井県教委 1997), 6 : (和水町 2007), 7・8. (樋口ほか 1959). 図 59:1 : (財) 1983), 2. (財) 2017), 3. (淀川町教委 1996), 4. (財) 鳥取県埋文センター 1998), 5. (財) 鳥取市教育福祉振興会 1996) 遺跡出典 (機関名は次のように略した)。教育会員: 教委。(奈良県立) 橿原考古学研究所: 橿原考古、鳥取県教育文化財団: (財)、財團法人: (財)、埋藏文化財: 理文)
- 【山形】大之越: 山形県教委 1979 「大之越古墳発掘調査報告書」[福島] 中田 1 号: いわき市史編さん委員会 1971 「いわき市史・別山中田装飾横穴」、八幡 2 号: (財) いわき市教育文化事業団 2011 「八幡横穴群・首長墓級の副葬品を出土した横穴群の調査」[柄木] 足利公園體: 東京国立博物館 1980 「東京国立博物館図版目録」、上野原 18 号墳・御磐山: 南河内町史編さん委員会 1992 「御磐山古墳」[南河内町史] 史料編 I 考古, 助戸十二天: 望月幹夫 1981 「櫛木県足利市十二天古墳の再検討」東京国立博物館「MUSEUM」、益子天王塚: 持田大輔ほか 2009 「益子天王塚古墳出土遺物の調査 (2)」[早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要] 第 10 号 [群馬]

井出二子山：高崎市教委 2009『史跡保護田古墳群 井出二子山古墳 史跡整備事業報告書』越山：高崎市史編さん委員会 1999『新編高崎市史』資料編Ⅰ原始古代Ⅰ、恵下：小野山館ほか 1980「上毛野・伊勢崎下恵下古墳出土のガラス玉と須恵器と馬貝』『MUSEUM』東京国立博物館美術誌 No.357。劍崎大塚：東京国立博物館 1983『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅱ）、山名伊勢塚：高崎市教委 2008『山名伊勢塚古墳・前方後円墳の確認調査』。藤岡市：米田文孝 1987『群馬県藤岡市出土馬具考—地形杏葉を中心にして』横田健一先生古稀記念会『文化史論叢』上、鶴賀貞吉山：群馬県教委ほか 1999『群馬県音山古墳II石室・遺物編』茨城】上野：関城町史編さん委員会 1988『関城町史』別冊史料編。三昧塚：茨城県教委 1960『三昧塚古墳』。茨城県立歴史館 2016『三昧塚古墳とその時代・宮代榮一2017「馬具」『考古学研究会第45回東京例会シンポジウム三昧塚古墳を考える』資料集、水神峯古墳：江戸崎町教委ほか 2000『鎌谷古墳群1・2号墳水神峯古墳』。大日塚：伝、舟堀：明治大学博物館 2010『古の埴輪』下葉江子田金環塚：市原市教委 1985『上総江子田金環塚古墳』。金鈴塚：濱口常一『上總金鈴塚古墳』。白井久美子ほか 2002『千葉県史編さん資料千葉県古墳時代関係資料』。木更津市郷土博物館のすすめ 2013『金鈴塚古墳』。宮代栄一 2014『金鈴塚古墳出土馬具の研究』『金鈴塚古墳研究』第2号。禪昌寺山：杉山晋作ほか 1987『佐原市・禪昌寺古墳の遺物』『古代』第83号【埼玉】埼玉五稜荷山（1）：埼玉県教委 1980『埼玉五稜荷山古墳』。東京】鶴谷塚：鶴巻市史編さん委員会 1985『鶴巻市史』長野】新井原12号4号土塙：下伊那教育会 1991『新井原12号古墳』。下伊那】第一巻、大室241号：宮代栄一 2015『長野県出土馬具の研究』『信濃大室積石塚古墳の研究IV』。明治大学文学部考古学研究室、塚原（開善寺）：松尾昌彦 1995『下伊那の鉄製板状鏡板』『伊那』第43巻第6号伊那史学会、如来堂：伊那市史編纂委員会 1984『駒場堂古墳』『伊那市史』歴史篇、上伊那誌編纂会 1965『上伊那の古墳』『上伊那誌』2史跡編、宮原SK64：飯田市教委 2000『宮原外遺跡・高屋遺跡』。山梨】豊富大塚：坂本美夫 1997『甲斐における部民制の成立とその態様』。山梨県立研究室 6号。八代】尻原：川見典久 2017『集古十種・兵器類と十八世纪の古武道調査』『黒川古文化研究器記考古文化研究』第16号【静岡】愛野向山B12号：袋井市教委 2004『愛野向山II遺跡』。石乃形（西）：袋井市教委 1996『石乃形古墳』。岩山4号：藤枝市史編さん委員会 2007『藤枝市史』資料編1考古。鶴山6号：藤枝市史編さん委員会 2007『藤枝市史』資料編1考古。金山4号：袋井市教委 1996『金山古墳群』。金山古墳群I・II】。櫛塚：鶴田市 1992『鶴田市史』資料編1考古・古代・中世。既機山：川江秀孝 1952『馬具』『静岡県史』資料編3考古3・静岡県教委 1953『静岡既機山古墳』。崇信寺10号：森町教委 1996『静岡県森町板田の遺跡』。大門大塚：袋井市教委 1987『大門大塚古墳』。高根森8号：川江秀孝 1992『馬具』『静岡県史』資料編3考古3。多田大塚4号：鈴木敏則ほか 2001『並山町・多田大塚古墳群』『静岡県の前方後円墳』個別報告編。茶臼辻 B1号：掛川市教委 2003『東名掛川1・C周辺土地区画整理事業に伴う埋文发掘調査報告書』。平井衛兵：川江秀孝 1992『馬具』『静岡県史』資料編3考古3。松長6号：沼津市教育委員会 2015『松長6号発掘調査報告書』。谷口原10号：静岡県教委 1965『東海道新幹線静岡工事に伴う文理发掘調査報告書』『愛興】大須二子山：伊藤秋男 1978『名古屋市大須二子山古墳調査報告』。小林先生教授退職記念考古学論文集、寺西典子 1983『南山大学所蔵の馬具について』。南山大学人類学博物館報』第11号：小幡茶臼山：深谷淳 2003『小幡茶臼山古墳の研究』『美濃の考古学』10号。志段味大塚：名古屋市教委 2017『志段味古墳群III』。名古屋市博物館：宮代栄一 2010『名古屋市博物館所蔵の馬具について』『美濃の考古学』11【岐阜】後平白茶：岐阜県教委 2002『後平茶白古墳・後平跡』。大牧1号：各務原市理文調査センター 2003『大牧1号発掘調査報告書』同2号・3号：発掘調査。虎溪山1号：多治見市教委 1996『虎溪山1号古墳発掘調査報告書』。伝、二又：津村一郎 2002『伝、二又古墳群出土馬具について』『美濃の考古学』第5号会。船来山G29号・19号：糸貫町教委・本郷町教委（船来山古墳群発掘調査團）1999『船来山古墳群』【三重】井田川白山：三重県教委 1988『井田川白山古墳』。大里西沖SK5：三重県理文センターアー 1994『大里西沖遺跡（2次）』。キラト：川畑由紀子ほか 1999『キラト古墳出土の馬具』『上野市埋文年報』5。天保1号：三重県教委 1991『近畿自動車道（久居～勢和）埋文发掘調査報告第3分冊3-天保古墳群』。薬師谷14号：一志町教委 2004『ヒジリ谷・薬師谷古墳群』【石川】山伏1号：羽吻市史編さん委員会 1973『羽吻市史』原始・古代編『薬師谷』春日山：松原町教委 1979『改訂松岡古墳群』。神南備山：2001『薬師谷・神南備山古墳と横山古墳群』。福井県立博物館記録』8号。十善の森（後）：上中町教委 1970『若狭上中町の古墳』。福井県教委 1997『若狭地方主要古墳後圓墳総合調査報告書』。鳥越山：伝、西塚：清喜二 1997『若狭西塚古墳出土馬具調査報告書』『書陵部記要陵墓篇』第49号：清喜二裕・二田真吾・土屋隆史 2016『若狭鳥越參帝地埴丘地形調査および出土品調査報告書』。『書陵部記要陵墓篇』第68号【滋賀】鶴荷山：京都大学文学部考古学研究室 1995『鶴荷山古墳出土遺物の調査』『琵琶湖周辺の6世紀を探る』。木部天神前：野洲市教委 2007『西河原宮ノ内』。比田田沼跡发掘調査報告書。円山：野洲町教委 2001『赤隊大岩山古墳群 天王山古墳・円山古墳 古墳調査整備報告書』。山津照神社：森下草司・高橋克壽 1995『副葬品の検討』『琵琶湖周辺の6世紀を探る』。【京都】井ノ内車塚（後）：大阪大学文学部考古学研究科考古学研究室『井ノ内鶴塚古墳の研究』；宇治二子山南：宇治市教委 1991『宇治二子山古墳』。大耳尾1（1）：岡林峰夫 2010『大耳尾古墳群』『京丹後の考古資料』。上柏天竺山1号：山城町教委 1999『天竺山遺跡説明地図説明会資料』（上柏天竺山古墳群）。『第46回埋文研究集会渡来文化の愛着と展開』。天竺1号：花谷浩 1991『馬具』。川上・丸井古墳発掘調査報告書。長府町教委、長法寺七ツ塚4号（1）：長岡京市教委 2002『長岡京市における後期古墳の調査』。物集女塚：向日市教委 1988『物集女塚』。弁財1号：京都国立博物館 1994『京都国立博物館藏品図版目録考古編』。弁財1号：福知山市教委 1997『牧正一古墳』。鹿谷18号：富山直人 2009『ガウランドと鹿谷古墳』。日本考古学第28号。謙早直人ほか 2016『大英博物館ゴーランド・コレクション京都府鹿谷古墳出土馬具の調査』『日本考古学協会第82回総会研究発表要旨』。謙早直人 2016『鹿谷古墳の馬具』。ゴーランド・コレクション総合研究の新見聞に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築』。No.2【奈良】赤尾崩谷2・3号：木場佳子 2005『赤尾崩谷古墳群の発掘調査』。平成16年度 奈良県内市町村文发掘調査報告書資料』。橋本輝彦・木場佳子 2004『赤尾崩谷古墳群の調査』『今來才伎古墳・飛鳥の渡来人』大阪府立近つ飛鳥博物館・

桜井市文化財協会 2013『金属利用の歴史』石上北 A8 号：奈良県教委 1976『天理市石上・豊田古墳群 II』上 5 号：権研考 2003『上 5 号墳』、巨勢山 75 号：御所市教委 2002『巨勢山古墳群 IV』、芝塚 2 号：権研考 1986『芝塚古墳群発掘調査報告』『奈良県遺跡調査概報』1985 年度千賀久 2003『春季特別展 古墳時代の馬との出会い』権研附属博物館特別展図録第 59 冊：権研附属博物館、寺口忍海 H-35 号：新庄町教委 1988『寺口忍海古墳群』、東大寺山 6 号：山田良三 1970『東大寺山古墳群の調査』『青陵』15、山田良三 1975『古墳出土の鏡の形態の変遷』『権研研究集創立三十周年記念』千賀久 1988『古墳時代鏡の系譜と変遷』森浩一編『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ IV、権研附属博物館 2003『春季特別展古墳時代の馬との出会い』、新訳 178・451 号：権研考 1981『新津千塚古墳群』、新訳 510 号：千賀久 2003『馬具』『大和の古墳』II 新近畿日本農業大和の考古学第 3 卷：野神：千賀久 1977『奈良市南京町経穴古墳出土の馬具』『古代学研究』82、藤ノ木：権研考 1990『斑鳩藤ノ木古墳群第 1 次調査報告書』、ホリゾン 4 号：奈良県教委 1970『天理市石上・豊田古墳群 I』三里：奈良県教委『平群・三里古墳』八約マキト 1 号：明日香村教委 2001『1999-3 八約・東山古墳群の調査』『明日香村遺跡調査概報』平成 11 年度『大院』牛石 7 号：大阪府教委『陶邑 VI』、大石：1995 八尾市文化財調査研究会『大石古墳』河内愛宕塚：八尾市立歴史民俗資料館 1994『河内愛宕塚古墳の研究』、唐櫃山：北野耕平 2002『唐櫃山古墳とその墓制をめぐる諸問題』藤澤一夫先生卒寿記念論文集、藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会 2009 堺市博物館『仁徳陵古墳祭壇』、吉田山古市・古市山の古墳群からさざる』、輕里 1 号：羽曳野市 1994『羽曳野市史』第 3 卷史料編 I、寛弘寺 18 号：大阪府教委 1983『18 号墳の調査』『鹿弘寺古墳群発掘調査概要』、切り戸 1 号：羽曳野市教委 1985『古市道路群』VI、シヨコツカ：大阪府教育委員会 2009『加納古墳群・平石古墳群』、七ノ坪：大阪市教委ほか 1987『昭和 60 年度大阪市内埋文包蔵地発掘調査報告書』芝山：大塚初重 1977『大阪府芝山古墳出土物をめぐる諸問題』松崎寿和先生退官記念事業会『考古論集』、富山直人 2009『芝山古墳の遺物出土状況からみた横穴式石室の利用実態』『古代学研究』184、城ノ山・鈴木康高・小森牧人 2010『同志社大学所蔵堺市城ノ山古墳出土資料調査報告(2)』『同志社大学歴史資料館館報』13 号、青松塚：小林行雄 1951『日本考古学概説』創元社・小林行雄 1962『青松塚古墳の調査』『大阪府の文化財』大阪府教委・富木軍保(後 1)：大阪市立美術館 1960『富木軍塚古墳』、長持山・小野川 1963『日本発見の初期の開拓』『考古学雑誌』第 52 卷 1 号・京都大学総合博物館 1997『王者の武装』【和歌山】大谷：櫛田健康ほか 1959『大谷古墳』京都大学文学部考古学研究室『兵庫』小丸山 2 号：秋枝芳 2010『姫路市史』第 7 卷下資料編考古、万里里マシバ：閑宮町教委 1992『万里里マシバ古墳群』、東見寺：兵庫県立歴史博物館 1996『大王の世紀』【岡山】岩田 1 号：山陽町教委 1977『岩田古墳群』、王墓山：倉敷市教委 1974『王墓山遺跡群』、岡山県 1986『岡山県史』第 18 卷考古資料、正崎 2 号：山陽町教委 2004『正崎 2 号墳』勝負筋：岡山大学考古学研究会 2009『勝負筋古墳調査概報』学生社、築山：増田精一 1966『馬具』『日本の考古学』V 古墳時代下河出房新社・長船町史編さん委員会 1998『長船町史』史料編(上)考古古代中世、天狗山：村井嘉雄 1972『岡山県天狗山古墳出土の遺物』『MUSEUM』250・岡山県 1988『岡山県史』第 18 卷考古資料・松木武彦ほか 2014『天狗山古墳』、中宮 1 号：近藤義郎 1952『佐良山古墳群の研究』第 1 冊津山市・岡山県 1988『岡山県史』第 18 卷考古資料、西山 6 号：岡山県教委 1996『田益新田遺跡西山古墳群』、持板 20 号：県道清音真金線建設に伴う文化財調査委員会 2005『持板 20 号』、四塙 1 号：岡山県 1986『岡山県史』第 18 卷考古資料・近藤義郎 1992『蒜山原四つ塙古墳群』八束村四ツ 13 号：近藤義郎 1992『蒜山原四つ塙古墳群』八束村【広島】：二子塚(後 2)：福山市教委 2007『広島県史跡二子塙古墳発掘調査報告書』【鳥取】家ノ後 11 号：吉市教委 1978『ごりよう塙』塙他発掘調査報告書、間地谷 6 号：亀井照人 1964『間地谷古墳小群調査報告』『郷土と科学』鳥取県立博物館 9(2)・東方仁史 2008『企画展団体・伯善の王者たる』鳥取県立博物館、小畑 3 号：(財)鳥取県理文センター 2002『小畠古墳群』而影山(財)：鳥取市教育福報発行会 1996『而影山古墳群発掘調査報告書』、伝文 6 号：(財)鳥取県文化財団 2004『鳥取市文政以前在地跡・倭文古墳群』、大柄 802 流路(財)：2017『大柄遺跡 1 号』、高下：久保郡二郎 1985『鳥取県内出土の馬具(鉢)』『鳥取埋文ニュース』No.12、長瀬高浜 3・4 号：(財)1981『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』、長瀬高浜 7・8 号：(財)1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』、長瀬高浜 28 号：(財)1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ』、早里 14 号：(財)鳥取県埋文センター 1998『福原早里遺跡』東京像 21 号：百澤 26・49・112 号：淀川町教委 1996『百瀬遺跡群 VI』、丸山 2 号：日南町史編纂審議委員会 1984『日南町史』自然・文化、六部山 1 号：東方仁史 2017『鳥取市六部山 1 号出土資料について』『鳥取県立博物館研究報告』54【鳥取】上島：花谷浩 2007『上島古墳出土馬具の再調査』『出雲市埋文発掘調査報告書』第 17・集・代崇一 1997『鳥原根島古墳出土馬具の再検討』『島根考古学会誌』第 14 集、妙蓮寺山：島根県教委 1964『妙蓮寺山古墳調査報告書』、めんぐる：島根県古代文化センターほか 2009『めんぐる古墳の研究』【山口】北方：山口県史編さん室 2000『北方古墳』『山口県史』資料編考古 2【香川】王墓山：普通寺市教委 1992『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』、川上：長尾町教委 1991『馬具』『川上・丸井古墳発掘調査報告書』【愛媛】絆ケ岡：(財)愛媛県埋文調査センター 1984『四国縦貫自動車道関係埋文調査報告書』、御所所權現山：松山市教委ほか 2013『福角 2 号墳・永塚古墳・御所所權現山古墳』、猿ヶ谷 2 号：(財)愛媛県埋文調査センター 1999『四国縦貫自動車道埋文調査報告書 XII』【福岡】飯田 1 号：飯塚市教委『池田横穴群 II』、小正西：穂波町教委 2000『小正西古墳』、鶴浦塚 1 号：福津市教委 2011『津原崎古墳群 II 烟根塚・烟古墳』、福岡県教委 1977『新原・奴山古墳群』、寿命王塚：原木末治はか 1939『筑前国嘉德郡王塚装飾古墳』、新池南：九州歴史資料館 2014『土佐井遺跡 2 号・土佐井小追跡 原山城・穴ヶ堀山南古墳群 2 次・新池南古墳』、新行坊古墳：嘉德町教委 1981『新行坊古墳』、高崎 2 号：福岡県教委 1970『今宿バイパス関係埋文調査報告書』福岡市大字拾六町所在の遺跡群、竹並 F-22 号横穴墓：竹並遺跡調査会 1979『竹並遺跡』、寧楽社、田野瀬原：宗像市教委 2007『田野瀬戸古墳』、西宮古賀：前原市教委 1994『井原遺跡群井原地区周辺の古墳群』、花見：九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室 2004『倭人伝の道と北部九州の古代文化』、番塚：岡村秀典ほか 1993『番塚古墳』、菊田町教委・九州大学文学部考古学研究室、羽根戸 E11 号：宮代栄一 1995『飯氏二塙古墳出土の馬具』福岡市教委『飯氏二塙古墳』。

本郷野間 102 号：大刀洗町教委 2009「本郷野間遺跡 V・VI」、宮脇：高島忠平ほか 1973「宮脇前方後円墳」「墓地地方史」先史編、山の神：辻淳一郎ほか 2015「山の神古墳の研究」【佐賀】猿猴 ST006：佐賀県教委 1993「切畠遺跡 猿猴 A 遺跡 猿猴 C・D 遺跡 猿猴跡 大久保三本松遺跡」、潮見：武雄市教委 1975「武雄市潮見古墳」；宮代栄一ほか 1994「佐賀県出土の馬具の研究」『九州考古学』第 69 号、永田 ST106・109・ヒヤーガンサン：佐賀県教委 2002「袖比遺跡群 2」【大分】稻荷山 3 号：大分市歴史資料館 2008「第 27 回特別展馬とのつきあい～おおいた馬物語～」、宮代栄一 2012「大分県出土の古墳時代馬具の検討」『平成 24 年度九州考古学会総会発表資料集』、飛山 4 号：大分県教委 1973「飛山」【熊本】江田船山：水町誌編纂委員会 2007「菊水町史」江田船山古墳編、才國 2 号：宮代栄一 1999「熊本県才國古墳出土遺物の研究－鏡金鏡と 8 セットの馬具が出土した小円墳－」『人類史研究』第 11 号、場主店：和水町 2007「菊水町史」江田船山古墳編【宮崎】木本原 3 号：宮代栄一 1999「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』第 9 号・田中茂 1974「えびの市木本原地区式横穴 6 号出土品について－地下式横穴と埴丘－」『宮崎県総合博物館研究紀要』第 2 号、島内 SKO-2：えびの市教委 2001「島内地下式横穴墓群」【不明】井上コレクション：小川貴司編 1983「井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録」言叢社。名古屋市博蔵：宮代栄一 2010「名古屋市博物館所蔵の馬具について」『美濃の考古学』11、天理参考館所蔵：天理大学・天理教友社 1988「ひとのこころ天理大学附属天理参考館蔵品」第 2 期第 3 章叢文・弥生・古墳（国）

【慶尚北道】慶州 鶴林路 14 号：国立慶州博物館 2010「慶州鶴林路 14 号墓」、金鉢塚・施闕塚：梅原末治 1932「慶州金鉢塚施闕塚發掘調査報告」『大正 13 年度古墳調査報告』第 1 冊、施闕塚：馬目順一 1980「慶州施闕塚古新羅墓の研究」、瀬口宏生古稀記念考古学論集編集委員会「古代探秘」、チヨセキム・B1 号・B2 号：国立慶州文化財研究所 2013「慶州 雪峯地区 新羅古墳群」、皇吾洞 14 号（1）：朝鮮統督府 1937「昭和九年度古墳調査報告」第 1 冊、施闕塚：金載元 1948「施闕塚と施闕塚」、国立博物館、皇南大塚塚（副）：文化財管理局ほか 1993・1994「皇南大塚塚発掘調査報告書」、皇南大塚北（副）：文化財管理局ほか 1985「皇南大塚北発掘調査報告書」、白山城：慶州文化財研究所 2009「白寧・白山城内 蓮池」、済早直人 2011「統一新羅時代の製作」『文化財論叢 IV』奈良文化財研究所第 92 号冊、弥勒寺：文化財管理局文化財研究所 1989「弥勒寺」、国立扶余文化財研究所 1996「弥勒寺」、済早直人 2012「統一新羅時代の製作」奈良文化財研究所「文化財論叢 IV」（慶州）林堂 6A（副）：嶺南大学校博物館 2003「慶州 林堂地域 古墳群Ⅶ 林堂 5・6 号墓」、造永 E1-1 号（副）：嶺南大学校博物館 2000「慶州 林堂地域 古墳群 V」（大邱）汶山里 4 号：慶尚北道文化財研究所 2004「達城 汝山古墳群 1 地区」（安東）太華洞 7：安東大学校博物館 1998「安東 太華洞古墳群」【慶尚南道】（園城）内山 28-1：立原昌哉文化財研究所 2005「園城 内山里古墳群 II」、松鶴洞（1A1）：東亜大学校博物館 2005「金城 松鶴洞古墳群」（高靈）池山洞（崇文）I-107 号：嶺南文化財研究所 2004「高靈池山洞古墳群 I」、池山洞 32 号：啓明大学校博物館 1982「高靈池山洞古墳群」、済早直人 2009「大伽倻 馬具 生産の展開と 特質」、「高靈 池山洞 44 号」、池山洞 44 号：高靈郡大加倻博物館ほか 2009「高靈 池山洞 44 号埴」、池山洞 45 号：高靈郡 1979「大伽倻古墳発掘調査報告書」、池山洞 75 号：高靈郡ほか 2012「高靈 池山洞第 73 ~ 75 墳」〔金海〕大成洞 1 号：慶星大学校博物館 2010「金海大成洞古墳群 IV」大成洞 70 号（主）：大成洞古墳博物館 2015「金海大成洞古墳群 -70 立・主・主墓、95 立・主」、大成洞 91 号：大成洞古墳博物館 2015「金海大成洞古墳群 -85 立・91 立・主・主」〔宜寧〕景山里 2 号：慶尚大学校博物館 2004「宜寧 景山里古墳群」〔釜山〕蓮山洞 8 号：釜山博物館 2014「蓮山洞 M8 墳」、福泉洞（東）1 号：東亜大学校博物館 1970「東萊福泉洞第一号古墳発掘調査報告書」、済早直人 2016「新羅における初期金工品の生産と流通」奈良文化財研究所「日韓文化財論集」（蔚山）：雲化里 1：蔚山文化財研究院 2008「蔚山雲化里古墳群」〔咸安〕道里 14-1 号：昌原大学校博物館 1992「咸安阿羅迦耶列古墳群（1）」、馬甲塚：国立昌原文化財研究所 2002「咸安馬甲塚」〔咸城〕白川里 1-3 号：釜山大学校博物館 1986「咸陽白川里 1 号埴」〔陜川〕玉田 M1 号：慶尚大学校博物館 1992「陜川玉田古墳群」、玉田 M3 号：慶尚大学校博物館 1990「陜川玉田古墳群 II」、玉田 M6 号・玉田 M7 号：慶尚大学校博物館 1993「陜川玉田古墳群 IV」、玉田 28 号：慶尚大学校博物館 1997「陜川玉田古墳群 VI」、玉田 95 号：慶尚大学校博物館 2003「陜川玉田古墳群 X」〔山浦〕生草 M13 号：慶尚大学校博物館 2009「山浦 生草 M12・M13 号埴」〔昌原〕桂城里（桂南）1 号（副）：嶺南大学校博物館 1991「昌原 桂城里古墳群」、校洞 1 ~ 3 号：東亜大学校博物館 1992「昌原校洞古墳群」〔昌原〕茶戸里 B1 祭祀：国立中央博物館 2001 ほか「昌原茶戸里遺跡」〔忠清北道〕〔清州〕新鳳洞 92-80 号・新鳳洞 92-97-1 号：忠北大学校博物館 1995「清州 新鳳洞古墳群」、新鳳洞周辺：忠北大学校博物館 1983「清州 新鳳洞百濟古墳群 発掘調査報告書」1982 年度調査一〔忠清南道〕〔公州〕水村里 2-4 号：忠清南道文化財研究所ほか 2013「公州 水村里古墳群 I」、伝・宋山里：伝・宋山里：伊藤秋男 1979「公州 宋山里古墳出土羽馬具」「百濟文化」第 12 輯公州師範大学附設百濟文化研究所、〔燕岐〕松院里 KM-025：韓国考古環境研究所ほか 2010「燕岐 松原里・松院里 遺跡」〔天安〕龍院里 1 号：公州大学校博物館 2000「龍院里古墳群」〔全羅北道〕〔南原〕斗洛里 32 号：全北大学校博物館ほか 2015「南原西谷里および斗洛里 32 号墳」〔益山〕笠店里 86-1 号：文化財研究所 1988「益山笠店里古墳 発掘調査報告書」、成正羅 2009「益山 莺店里石室墓出土 馬具の製作技術 検討」『歴史外談論』第 53 桃湖西史学会【全羅南道】〔海南〕道山：国立光州博物館 1984「海南月松里 道山古墳」〔不明〕半島南道：天理参考館 2016「天理ギャラリー第 159 回展 古代東アジア馬ものがたり」、不明（旧小倉コレクション）：東京国立博物館 1982「寄贈小倉コレクション目録」東京国立博物館、支那民族雑誌社 2005「支那民族雑誌叢書」〔支那民族雑誌叢書〕：日本通商貿易出版社

2. 千代川左岸における古墳築造動向と倭文6号墳

高田健一

はじめに

倭文古墳群の発掘調査原因となった姫路鳥取線整備事業、およびそれに接続する山陰道鳥取西道路整備事業など、ここ10数年の道路建設事業とともに、千代川左岸域で多くの発掘調査が行なわれてきた。その結果、大規模な前方後円墳については未だ不明な点が多々残っているものの、小規模古墳については資料的な蓄積が確実に増した。『前方後円墳集成』によって構築された因幡地域の編年観（中原1991）は、大枠で活かされ続けているが、その理解を新資料によって補強、修正する作業が求められている現状と言えよう。

倭文古墳群、とりわけ6号墳の歴史的位置付けを探るにあたっては、周辺の古墳群の築造動向を整理し、どのような地域的、歴史的文脈の中で見るべきか、検討すべきと考える。本論では、倭文古墳群を含む千代川左岸域の8つの古墳群を主な検討対象に、特に中期から後期の築造動向を把握し、倭文6号墳築造の歴史的背景を理解する一助としたい。

1 対象地域の古墳群の概観

まず、千代川左岸域で比較的多数の古墳が調査されたり、時期比定の有力な手がかりが得られた古墳について、概観しておこう。北から順に述べる。出土遺物の編年的位置付けが詳しく検討できるものもあるが、そもそも出土遺物が少なく、年代的な位置を決めがたいものも多い。また、土師器や埴輪は、個別研究が進んでいないために大まかな位置付けにとどまらざるを得ないものもある。本論では、古墳時代を前期、中期、後期に3区分し、それぞれを前半、後半に2分する程度でひとまず検討を進める。前方後円墳集成編年との対比をあえて記せば、前期前半は集成編年1, 2期、前期後半が3, 4期、中期前半が5, 6期、中期後半が7, 8期、後期前半が9期、後期後半が10期となる。

古海古墳群　これまでに1, 2号墳、37～40号墳、58～64号墳の14基が調査されている。このうち、64号墳は7世紀代に降る横穴式石室をもつ円墳のため、ここでの検討には含めない（表19、図60）。

古く遡るのは平成4年度調査地（西浦・小谷1993）の1号墳で、中心埋葬である第1主体の墓壙上から低脚環、埴丘上の土器棺（第8主体）は複合口縁をもつ壺で、やや肩が張る形態をなす。遅くとも前期後半には位置付けられよう。1号墳の周辺埋葬もしくは2号墳の中心埋葬と考えられた第2主体部棺内からは、枕に転用された土師器高环の杯部が出土している。高环は、後述する本高12号墳とよく類似し、中期前半に下ると考えられる。

1号墳を取り巻くように築造された円墳である37～39号墳は、それぞれ須恵器や埴輪によってその時期が知られる。39号墳はB種ヨコハケを施す円筒埴輪から、中期後半に位置付けて良いであろう。38号墳はTK10段階の須恵器を副葬し、埴丘上に高環形器台と広口壺のセットを置く。

表19 古海古墳群の築造時期

古墳名	墳形	規模	前期		中期		後期		備考
			前半	後半	前半	後半	前半	後半	
1号	方	16*10							低脚环
2号	方?	8*8+							高环埴
39号	円	17							円筒埴輪
38号	円	18							TK10、器台
37号	円	12							TK43
40号	円?	18+							円筒埴輪棺
58号	方	11*10							鼓形器台枕
59号	方	12*11							時期不明
60号	方	15*11							時期不明
61号	方	9*7							鏡片、鼓形器台枕
62号	方?	10*8							鼓形器台枕
63号	?	?							時期不明

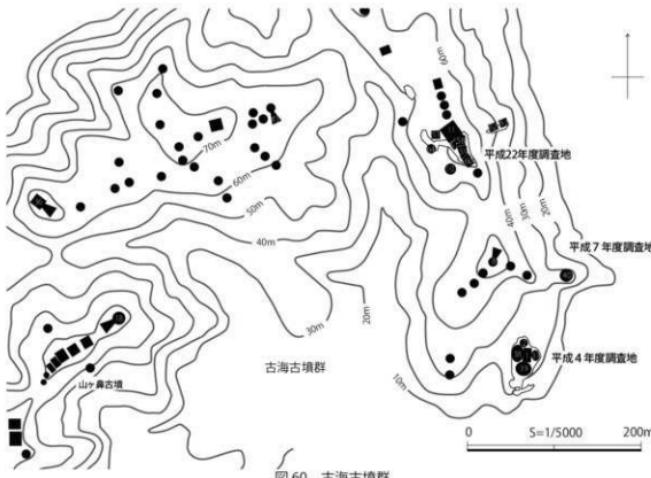


図 60 古海古墳群

表 20 本高古墳群の築造時期

古墳名	形	規模	前期		中期		後期		備考
			前半	後半	前半	後半	前半	後半	
13号	方	20*19+							鼓形器台枕
14号	前方 後円	63	■	■					内行花文後範 鼓形器台枕
19号	方	11*8							鼓形器台枕
17号	方	15*14							
18号	方	12*11							
12号	方	12*12					■	■	高環枕、長頭繩
22号	方	5*5							

37号墳から出土した須恵器は、趣にやや新しい要素を見るが、概ねTK43段階と見ておきたい。

平成7年度調査地の40号墳(谷口他1996)は、出土した高環や円筒埴輪枕から前期末(集成編年4期)に位置付ける意見(東方2007)に同意する。径18m程度の円墳と考えられている。

また、近年調査された別地点(平成22年度調査地、谷口2011)では、連続的に築造されたと考えられる方墳群(58~61号墳)が存在し、枕に転用した鼓形器台からすれば、前期後半までの段階に位置付けられよう。

以上をまとめると、古海古墳群では、前期段階の方墳、前期末段階の円墳を経て、中期~後期にかけて連続的に円墳が築造される。1992年度調査地の中期段階の円墳は、前期の方墳に隣接し、群集して築造されている点に注意しておきたい。

本高古墳群 前方後円墳の14号墳が新たに知られ、中心埋葬は未調査であるものの、周辺埋葬から出土した土器などをもとに前期前半段階に築造された可能性が説かれている(大川2010)。14号墳と同一尾根上に立地する周辺の13、17~19号墳は、出土した土器などから前期後半のうちに位置付けられ、連続的に築造された。

やや時間的間隔を置き、14号墳などとは異なる尾根筋上で築造された12号、22号墳は、出土した高環や長頭繩からすると、中期後半古相の段階と考えられる(表20)。

表 21 服部古墳群の築造時期

古墳名	墳形	規模	前期				中期				後期				備考
			前半	後半											
17号	方	14*11													鼓形器台枕
18号	円	16													擬文鏡
19号	円	17													鼓形器台枕
16号	円?	11													時期不明
34号	円	9													TK47
36号	円	10													TK43

表 22 篠田古墳群の築造時期

古墳名	墳形	規模	前期				中期				後期				備考
			前半	後半											
5号	円	11													鼓形器台枕
6号	円	13													飛禽鏡、高环枕
7号	方	8*9													
8号	方	11*11													?
9号	方	7*7													鉢折り曲げ
10号	方	9*9													時期不明
11号	円	12													鼓形器台枕

表 23 下味野古墳群の築造時期

古墳名	墳形	規模	前期				中期				後期				備考
			前半	後半											
40号	円	15													独立片逆刺長颈瓶
41号	方	12*11													時期不明
42号	円	9			?	?									41号→42号
43号	円	11													42号→43号
44号	円	12													TK23 43号→44号
46号	円	18													時期不明
47号	円	7													46号→47号
50号	方	14*12													高环枕
49号	方	12*10													50号→49号
48号	方	10*8													49号→48号
52号	方	8*5													碗形高环枕
53号	方	8*5													碗形高环枕
51号	方	8*6													

尾根稜線上に立地しており、それらと丘陵の低位部に群集する小円（方）墳群は、同一の古墳群構成主体内での階層差と考えておこう。

これまでに調査された古墳は、下味野古墳群の中では南側に位置し、標高 30m 前後の尾根先端近くに築造された方墳・円墳群であるが、谷を挟んで南側に展開する篠田古墳群は指呼の間に位置し、近い関係にあると考えられる（図 61）。ここでは、両古墳群を一体的に検討しよう。

まず、古く遡るのは篠田古墳群で、方墳はいずれも削平などにより土器資料も不十分で決め手を欠くが、前期に遡ることは確実である（藤本 2004）。5 号墳、11 号墳は円墳であるが、鼓形器台を転用した枕を用い、前期の範囲に含めて問題ない。調査対象地と同一の尾根の下方には、4 基の方墳が連続的に築造されており、古墳群の主要な時期が前期の全般にわたっていると考えられる。最も新しい様相を示すのは円墳の 6 号墳で、周溝内出土土器は前期末～中期初頭に位置付けられる（表 22）。

下味野古墳群の平成 14 年度調査地では、46～55 号墳までの 10 基が調査された（谷口 2004）。このうち、7 世紀台に下る 54、55 号墳を除いて時期的な検討を加えると、出土した土器や墳丘の切り合い関係から 50 号墳、51 号墳を古く位置付けうる。50 号墳は赤色塗装した高环枕を枕に転用するものだが、环部形態が

服部古墳群 有富川を挟んで釣山の南に位置する、八町山丘陵に展開する古墳群のうち、6 基の古墳群が調査された（谷口 2001）。17～19 号墳は、互いに隣接し、出土した土器や墳丘の切り合い関係から、番号順に連続的に築造されたと考えられる。方墳から円墳へ、墳丘形態の転換を示す事例と考えられる点が重要である。

それらとは数 10m の空白を置いた調査地点で、時期の異なる円墳群が調査されており、時期が判明するものは、出土した須恵器から中期末（TK47）、後期後半（TK43）と考えられる。古海古墳群とは異なって、前期古墳の系列的な築造地点とは異なる位置に中期古墳が築造される点に注意しておこう（表 21）。

下味野古墳群・篠田古墳群 下味野古墳群は、かなり広い範囲を対象にしており、同一呼称の元に一つの古墳系列として理解して良いかどうかは、実は悩ましい。全長 70m 規模の 23 号墳やこれと同一尾根上に築造された 3 基の前方後円墳を含んでおり、鳥取平野では有力な古墳築造系列と目されているが、いずれも詳細不明である。前方後円墳をはじめとする比較的大型の墳丘をもつ円墳は、標高 140m 以上の

前期から続く皿形を呈するもので、作りが比較的丁寧であり、単独で枕に転用する点に古い様相が見て取れる。また、51号墳は末期の小型丸底土器が伴っており、中期前半までの段階に位置付けられよう。後続する古墳は、出土遺物が少なく時期比定の決め手を欠くが、碗形高環を3つ並べて枕とする方式は、中期中葉以降一般化する方式で、中期後半段階に位置付けうる（表23）。

これよりも北に位置する平成12年度調査地では、40～44号墳が調査された（藤本2002）。出土遺物がなく、時期不明のものを含むが、埴丘の切り合い関係によって築造順が判明し、最新段階の44号墳は概ねTK23段階に位置付けても良い須恵器が出土しているほか、40号墳からは独立片逆刺付長頸繖が出土しており、TK23～47の段階と考えられる。つまり、平成14年度調査地よりも1段階新しい古墳群と言えよう。

以上をまとめると、前期段階には篠田古墳群で一連の古墳が築造されたのち、それを引き継ぐように中期前半に下味野古墳群・平成14年度調査地が営まれ、さらに同・平成12年度調査地に展開すると考えられる。前期の系列とは異なる地点に中期古墳が群集する点は、古海古墳群、本高古墳群と様相を異にし、服部古墳群と類似していると言える。

横枕古墳群 横枕古墳群は、平成11年度から複数次にわたって多数の古墳が調査され、古墳時代の全時期にわたって興味深い論点を提供してくれる遺跡である。ここでもかなり広い範囲を一つの名称でくっついていたため、適切な区分が必要と考えられる。古墳群が展開する地形を見ると、下味野古墳群などと同じ丘陵に立地し、標高30mよりも高い位置に築造される北群と、平野部に島状に点在する標高20m前後の低丘陵上に展開する南群に分けうる（図62）。それぞれに3箇所の調査地があり、報告書に従って北群は、北から平成11年度調査地（山田他2002）、平成12年度調査地（山田他2002、前田2007）、平成17年度調査地（前田2007）と呼称し、南群は、北からNo.11北区、No.11南区、No.12区と呼んでおく（谷口2003）。

まず、前期段階から展開する南群を概観する（表24）。最古段階に遡るのは、No.11北区の22号墳で、鼓形器台転用枕とともに漢鏡6期の内行花文鏡の破鏡などを副葬する。以後、23～25号墳は、出土する土器や切り合い関係から北から順に連続的な築造が想定でき、尾根の稜線上に列状に展開する。このように尾根上に連続的に方墳が築造される様子は、美和古墳群（山田1994）、広岡古墳群（鳥取市遺跡調査団1992）、倭文古墳群（山田2004）などでも見られ、前期段階の特徴と言える。25号墳に後続して、61号、63号、89号が隣接して存在し、89号墳にいわゆる間地谷型の鼓形器台があることからすると、前期末近くまで築造が続くと見られる。

ところが同一地点では中期前半に位置付けうる古墳ではなく、次の段階の古墳は、26号、59号、60号、62号といった中期後半に降る円墳である。列状に展開した前期の方墳群の一角に中期古墳が集塊状に営まれており、先に見た古海古墳群などと同様のパターンとみなしうる。

No.11北区の前期古墳系列に統いて、古墳築造を開始するのはNo.12区である。方墳の67号墳を起点として、68号墳が後続する方墳であるが、調査範囲内に方墳は他にない。68号墳の鼓形器台は小型化して透し孔を設ける最新型式のもので、前期末に位置付けられよう。前期の新相に至って、No.11北区の系列と並行している点に注意しておきたい。

そして、No.11北区と同様に、中期前半の空白期を挟んだのち、中期後半を中心とする円墳群が集塊状に営まれる。73号墳はやや古相の須恵器をもっているようだが、長頸繖が伴っており、中期後半に一般化する現象を先取りしたものと言える。後続する69～72号墳は、No.11北区の26号墳などと同段階に展開する円墳群であり、横枕古墳群の南群では、2つの築造系列が並存すると考えられる。

前期、中期の段階に造墓地として利用されていなかったNo.11南区は、TK47型式をベースとしつつも、やや新しい様相を加えつつある36号墳を皮切りに、MT15～TK10型式段階に小規模な円墳の築造が進む。

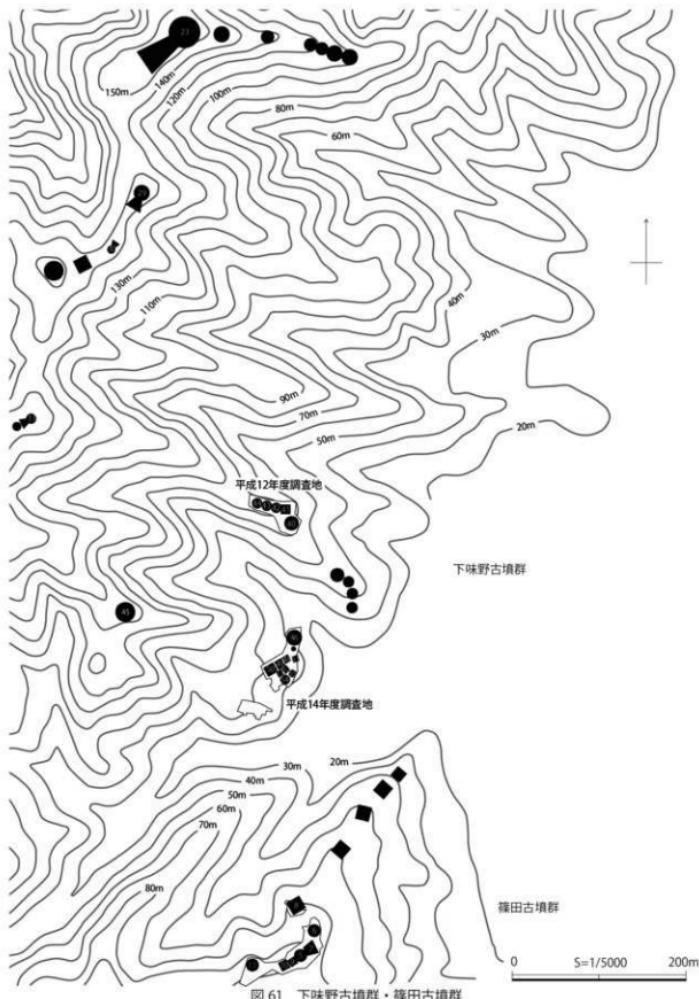


図 61 下味野古墳群・篠田古墳群

表 24 横枕古墳群（南群）の築造時期

古墳名	墳形	規模	前期		中期		後期		備考
			前半	後半	前半	後半	前半	後半	
22号	方	11*10							内行花文鏡 鼓形器台枕
23号	方	14*13							鏡、鼓形器台枕
24号	方	11*10							鼓形器台枕
25号	方	13*13							広口面枕 鼓形器台枕
61号	方	12*10							広口面枕 鼓形器台枕
63号	方	10*10							鼓形器台枕
89号	方	10*10							鼓形器台枕
26号	円	10							TK23、長頭鑿
59号	円	15							TK23、長頭鑿
60号	円	12							TK47
62号	円	10							碗形高环枕
90号	円	8							TK43
36号	円	13							TK47、長頭鑿
11号	円	10							MT15
82号	円	10							MT15
80号	円	11							TK10
10号	円	11							TK10
83号	円	11							碗形高环枕？
87号	円	9						?	碗枕
85号	円	8							TK43
81号	円	11							時期不明
86号	円	8							時期不明
67号	方	16*15							鼓形器台枕
68号	方	10*10							鼓形器台枕
78号	円	10						?	
73号	円	15							TK208、長頭鑿
69号	円	13							碗形高环枕
70号	円	15							碗形高环枕
71号	円	8							長頭鑿
72号	円	15							長頭鑿
76号	円	15						?	碗形高环枕？
77号	円	12						?	
79号	円	8						?	
74号	円	8							時期不明
75号	円	10							時期不明

表 25 横枕古墳群（北群）の築造時期

古墳名	墳形	規模	前期		中期		後期		備考
			前半	後半	前半	後半	前半	後半	
43号	円	15							MT15
44号	円	15							TK43-TK209 横穴式石室
52号	？	？							44号前方部？
58号	円	10?							58号→42号？
42号	円	17							TK23 筒形器台
40号	円	12							TK47
41号	円	12							TK47
53号	円	11					?		
54号	円	15					?		
55号	前方後円	23							TK10
57号	円	11					?		
38号	円	15							TK23、長頭鑿
39号	円	9					?		

現象的には、南北に別れた系列が後期段階に1系列に合流、縮小したよう見える。

次に横枕古墳群・北群を見よう（表25）。北群には、現状では前期古墳は認められない。丘陵裾に近い平成17年度調査地と、中腹の平成12年度調査地の2地区に、TK23段階の円墳が現れる。時期不明のものを含むので明確ではないが、それぞれの地点で系列的な築造が続くと考えられ、後続する古墳がある。南群と同様に、中期後半段階に2つの古墳築造系列が存在する点に注目しておきたい。

一方、平成12年度調査区は、中期後半段階に円墳の築造が続いたのち、後期段階に前方後円墳が築造されている。また、これに後続する古墳が平成11年度調査区に存在し、後期いっぱい古墳の築造が続く。

44号墳は横穴式石室をもつ円墳と報告されているが、隣接する52号墳は方形を呈して埋葬施設が見つかっていない。報告書の図面上だけの判断であるが、両者が実は1基の前方後円墳（全長約36m）である可能性も考慮しておきたい。千代川左岸域は、右岸地域と異なって横穴式石室の導入が遅く、TK43段階まで竪穴系の埋葬施設が主流となる地域である。44号墳が前方後円墳とすると、左岸域では比較的古い横穴式石室導入例となる。新しい墓制の採用に首長層が積極的に関与した事例であり、そのことがTK209段階以降に普及する横穴式石室や横穴築造の先駆けになったと考えることができよう。

なお、後期全般にわたって有力古墳の築造が続く北群の状況は、南群と対照的であり、中期段階に見られた多系列性が失われていると言える。

倭文古墳群 事例概観の最後に倭文古墳群も加えておく（表26）。2~5号墳までは後世の城跡による改変を受けつつも、連

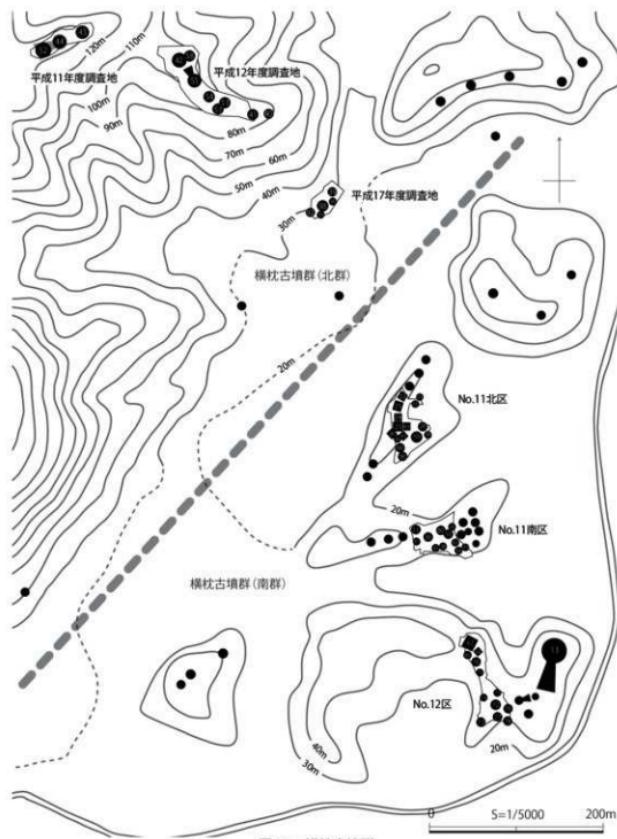


図62 横枕古墳群

統的に築造された方墳群とわかる。前期後半代とみて大過ないであろう。5号墳の棺に転用された円筒埴輪は、鳥取平野では最も古い段階に位置付けうるもので、集成編年3期までに考えることができる（東方2007）。7号墳の下層は墳形不明ながらも、埋葬施設に箱式石棺を採用し始め、円墳の8号墳にも引き継がれていく。9号墳に連続する尾根筋には加工段が設けてあり、土塚墓群が営まれる。時期的には前期古墳と並行するものである。

6号墳と7号墳は、そうした前期古墳の系列的な造墓地の一角に突如現れるという点において、横枕古墳群南群のNo.11北区とよく類似する。見てきたように、そうした築造動向を示す古墳群は、他にも古海古墳

群などでも指摘でき、このようなあり方は、共通する社会的背景に起因すると考えられる。

2 千代川左岸域の中期古墳の築造動向

個別に概要を記してきたことについてまとめる。千代川左岸域の古墳群では、前期段階から連続的な古墳築造が行なわれる6群が指摘できる。前期段階では安定的な築造が見込まれるが、中期前半段階にいたん低調期を迎え、中期後半に古墳築造系列が再開されるものが多い。このことは、有力な首長系譜の変動の影響を受けていると考えられる。

すなわち、前期段階には本高古墳群に盟主的な前方後円墳の14号墳が築造されたが、前期後半～末には千代川右岸の六部山3号墳に盟主的な地位が移り、中期初頭には同地域の古郡家1号墳が引き継ぐことが知られている。また、中期前葉段階は、鰐付円筒埴輪の存在などから、野坂川流域の里仁古墳群が有力になつたと考えられ、未調査ながら全長80mクラスの29号墳を中期前半代の盟主墳とみなす意見が多い（中原1991、君嶋2005、東方2007）。盟主墳の不在が地域の造墓活動の低下と関連している可能性はある。

ただし、因幡地域では大規模な前方後円墳の実態解明が進んでおらず、とりわけ、千代川左岸域の古海36号墳、下味野23号墳、横枕13号墳など60～70mクラスの前方後円（方）墳の編年上の位置付け次第で歴史的な理解は大きく変わる。ただちに解決のつかない問題であり、基礎資料の積み重ねから始める他はないが¹、横枕13号墳については、先の整理から多少根拠のある見通しはつけられそうである。

横枕古墳群・南群の調査を担当した谷口恭子は、他地区に対するNo.12区の優位性を説き、13号墳の編年位置をNo.12区における古墳の欠落期、すなわち中期前葉に置く見方を示した（谷口2003）。具体的には、前期後半の67号墳、68号墳と中期中葉の73号、72号墳の間に置くという意見である。集成編年では6期あたりを想定するということになろうか。

これまでに見てきた通り、横枕古墳群や下味野古墳群の盛期はTK23～47型式期にある。それが大型前方後円墳の築造を契機とするという考え方は理解できるが、6期あたりを想定することになると、後続とのタイムラグがやや大きいようと思われる。むしろ、横枕73号墳や、本高12号墳など、長頸瓶が一般化する時期の古墳が出現し始めるこの背景に大型前方後円墳を位置付けるならば、もう1段階遅く、集成編年7期（TK216～208）あたりに置くことがより資料に即した解釈になるのではないかと思われる。

基礎的な調査が行なわれていない古墳の築造時期について、これ以上推測をめぐらすことはあまり生産的ないので、13号墳などの位置付けについては後日を期すこととし、ここでは、横枕古墳群で見られた、近接した範囲で並列して複数の古墳の築造系列が見られることに注目したい。

すなわち、横枕古墳群では、No.11北区とNo.12区の2カ所で前期後半段階に並列する造墓活動が見てとれた。その造墓地が中期後半段階に至って再利用され、2系列の造墓活動が見られることとなる（図63）。No.12区の方が若干早く開始している可能性があるが、時間的懸隔はそれほど大きくなつてであろう。また、墳丘規模の面でも顕著な差はないと言える。ただし、No.11北区の59号墳は須恵器筒形器台と広口壺のセットを有しており、やや優位性を示す。

一方、北群の方も中期後半には造墓活動を開始し、丘陵裾の平成17年度調査地で38号墳、中腹の平成

表26 傑文古墳群

古墳名	墳形	規模	前期		中期		後期		備考
			前半	後半	前半	後半	前半	後半	
2号	方	17*15							高环枕
3号	方	14*12							鼓形器台枕
4号	方	15*13							鼓形器台枕
5号	方	19*14							円筒埴輪枕
7号下	？	？							鼓形器台、高环枕
8号	円	12							鼓形器台枕
9号	円	11							
6号	円	13							TK47、円筒埴輪、人物埴輪、本書
7号	円	13							TK47

12年度調査地で42号墳などが並列的に存在し、42号墳がやはり須恵器筒形器台と壺のセットを有してやや優位性を示すものの、埴丘規模や副葬品の内容に大きな差は見られない。中期後半の段階では、4つの造墓系列が成立し、個別に、累積的に古墳建築を行なう様子が窺えよう。

このような古墳群の構造の変化は、基本的には初期群集墳論（和田2004）で説かれる中小首長層や有力家長層の台頭を反映したものと捉えられよう。新たに出現してきた小円墳群に、しばしば長頸歿をはじめとする武器の副葬が見られることは、台頭してきた階層に軍事的な役割を担う人びとが一定数存在したことを示す。

初期群集墳の成立については、中央の大王権力による有力家長層の個別支配の強化を読み取るわけだが、これを地域の側から見ると、大王権力とのつながりをテコに、自勢力を拡充させて行こうとする逆の動きを見ることも重要と考える。横枕古墳群のように小規模円墳を連続的に築造する小グループが並列する様子は、大王権力が（地域首長を通じてにせよ）これらを個別に把握したというよりは、地域内部の造墓主体の自己増殖的な動きと見る方が自然ではないか。また、倭文古墳群で顕著に、あるいは古海古墳群などでも見られたように、前期古墳群の延長上に、さらにはその周囲に古墳を築いていく行為は、自らの地域支配の正当性や「由緒・来歴」に関する主張のようでもある。中期に新たに作られる古墳も、埴丘裾を重複させつつ集塊状に築造が進むことは、系譜関係の強調、確認の意味を持つと考えられよう。

倭文6号墳の築造は、このような地域の動静の中で理解すべきであろう。つまり、集成編年7期あたりで横枕地域を中心に千代川左岸地域の重要性が高まり、いくつかの小グループが円墳群の築造を開始する。検証は今後の課題であるが、その契機として横枕13号墳のような前方後円墳の築造があったかもしれない。被葬者の中には「武人」的な性格を持つものが含まれるが、倭文6号墳被葬者は、そのような性格をもつ人びとの中でも飛び抜けて重要な役割を担った人物であろう。5世紀末という時期や、前項で片山健太郎が指摘しているように、埼玉稻荷山古墳と共に通する馬具の副葬という内容からすれば、「ワカタケル大王」に軍事的に奉仕した人物を想定することも、あながち飛躍ではあるまい。短甲の型式と馬具や武具の付属具の型式に時間差があることを考慮すると、年齢的には高齢で、経験豊富な人物であった可能性も考慮すべきかもしれない。あるいは、個人としてそのような武装をすべて持ったわけではない、複数世代にわたりながら軍事的役割を果たした系譜に連なる人物と考える余地もある。

いずれにせよ、こうした人物を輩出することによって、王権とつながりをもち、そのことによって地域支配の拡充も進むという、中央と地方双方のダイナミズムを捉えていく必要があろう。

後期への展開

倭文6号墳以降の動向にも触れておきたい。横枕古墳群では、南群にあった2系列が後期段階に1系列（No.11南区）に集約され、かつ径10mほどの小規模円墳に縮小される。一方、北群においても優勢な古墳

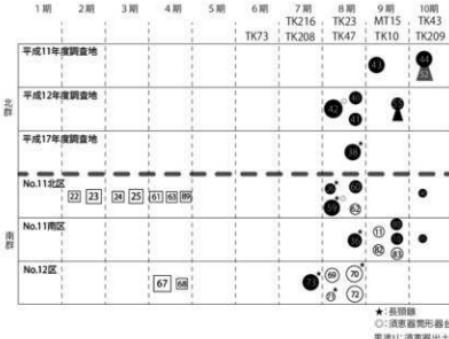


図63 横枕古墳群の展開過程

築造系列が絞られていくが、小規模ながら前方後円墳の築造が継続する。このことからすると、中期段階にあった多様性は失われ、後期段階には地域首長を通じた身分編成の強化が進展していくと考えられよう。この段階の鳥取平野の前方後円墳は、鈎山2号墳（山田他 1992）、桂見6号墳（前田他 1993）、海蔵寺4号墳（中原 1991）など前方部が短いものが多く、地域首長間でも身分的格差が強調される見られる。

古墳時代後期における地域の盟主墳は、布勢・潮山地域に存在する布勢古墳（全長60m）、大熊段1号墳（全長49m）などに移動すると考えられ、千代川左岸地域の優位性は失われる。倭文6号墳被葬者が担っていた役割も別の古墳系列に移ると考えられるが、同等の馬具をもつ古墳としては、六部山1号墳が挙げられる。六部山1号墳は径30m近い大規模な円墳で、古くはT字型鏡板轡や双葉剣菱型杏葉などが採集されていたが、長く資料化されてこなかった。近年になって東方仁史によって資料化が果たされ（東方 2017）、倭文6号墳に後続する6世紀初頭～前半代に位置付けることが可能となった。有能な首長系譜の変動に伴って、中小古墳被葬者の役割にもダイナミックな変化が訪れ、そのことが古墳築造動向に反映していると考えられる。

おわりに一総括に代えて

本書では、倭文6号墳出土遺物の再整理成果を報告し、その位置付けを探ってきた。武器・武具には被葬者の活動時期や活動内容を明らかにし、その性格をよく物語るものが多い。例えば、三角板鎖留短甲は、鉢留技術の導入期に準ずる古い様相を示すものである点が注目される。鉢留の位置や数などに革縫短甲との共通性を色濃く残しつつも、右前胸開閉など鉢留短甲の「定型」化へ踏み出しつつある段階のものと考えておきたい。製作の時期は、TK216段階であろうか。ところが、これと組み合う横矧板鉢留衝角付冑は、衝角底板が外接式であることから、短甲よりも遅れてTK23段階以降に降ると考えられる（鈴木 2010、川畠 2011）。さらに、衝角付冑に付属していたのは小札鎧と小札頬当であった。このような付属具を伴うのは、本来は短甲ではなく挂甲であり、TK47段階の副葬例が多いと考えられる。これらを鈴木一有が示すような年代観（鈴木 2017）に照らして見ると、倭文6号墳被葬者が5世紀半ば頃から活動を始め、5世紀第4四半期にかけて段階的に武装具を充実させていった様子が窺える。

一方、本書第3章3を中心に片山健太郎が検討したところでは、馬具もまたTK23～47段階にセットとして用いられるものであり、馬具一式は被葬者の後半生に追加で入手したものと考えられる。政治的な儀器としての特殊なデザイン性を考慮される独立片逆刺鐵の存在なども考え合わせると、倭文6号墳被葬者が5世紀後半台に、主に軍事的な側面で重要な地位を獲得しながら成長してきた様子を、副葬品は物語っている。

地域を代表する首長レベルの前方後円（方）墳の様子がわからないだけに、隔靴搔痒の感はあるが、小規模古墳の築造動向を検討する中で、まさに倭文6号墳被葬者の活動時期と並行して、横枕古墳群などを中心に千代川左岸地域の古墳築造が活発化する様子を見た。倭文6号墳被葬者が王權と接点を持ち、王權内でさらに重要性を高めていくプロセスと地域の古墳築造動向は表裏の関係にあると考えられる。

資料不足に加えて、筆者の力量不足から十分に論じられなかつた部分も多い。今後も地道な資料の蓄積を継続し、より良い地域の古墳時代史の構築に向けて努力することを約して、本稿を閉じたい。

註

1 烏取県立公文書館が進める新鳥取県史編さん事業の一環で、主要な前方後円（方）墳でありながら墳丘実測図がないものは、順次測量図が整備されつつある。それらを用いた調査研究の進展が今後の課題となろう。

参考文献

- 大川泰広（編）2010『本高古墳群』鳥取県教育委員会
- 川畠 純2011「衝角付冑の型式学的配列」『日本考古学』第32号
- 鈴木一有2010「古墳時代後期の衝角付冑」『待兼山考古学論集Ⅱ—大阪大学考古学研究室20周年記念論集—』大阪大学考古学研究室
- 鈴木一有2017「志段味大塚古墳と5世紀後半の倭王權」『志段味大塚古墳群Ⅲ』名古屋市教育委員会
- 谷口恭子・藤本隆之・神谷伊鶴（編）1996『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』財団法人鳥取市教育福祉振興会
- 谷口恭子（編）2001『服部墳墓群』財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子（編）2003『横枕古墳群Ⅱ』財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子（編）2004『下味野古墳群・下味野童子山遺跡』財団法人鳥取市文化財団
- 谷口恭子（編）2011『古海孤塚遺跡・古海古墳群』財団法人鳥取市文化財団
- 鳥取市遺跡調査団1992『広岡古墳群発掘調査概要報告書—広岡76・77・78・79・80・81・82号墳の調査—』
- 中原 齊1991「因幡」「前方後円墳集成」中国・四国編、山川出版社
- 西浦日出夫・小谷修一1993『古海古墳群・菖蒲遺跡』財団法人鳥取市教育福祉振興会
- 東方仁史2007「因幡・伯耆」「前期の中の両面」第11回中国四国前方後円墳研究会
- 東方仁史2017「鳥取市六部山1号墳出土資料について」『鳥取県立博物館研究報告』第54号、鳥取県立博物館
- 平川 誠・前田 均1991『六部山古墳群発掘調査概要報告書—六部山5・41・42・43・44号墳の調査—』鳥取市教育委員会
- 藤本隆之（編）2002『下味野古墳群Ⅰ』財団法人鳥取市文化財団
- 藤本隆之（編）2004『篠田古墳群』財団法人鳥取市文化財団
- 前田 均（編）2007『横枕古墳群Ⅲ』
- 前田 均・稻浜隆志1993『桂見墳墓群Ⅱ』財団法人鳥取市教育福祉振興会
- 山田真宏・谷口恭子1992『鈎山古墳群発掘調査概報Ⅱ』鳥取市遺跡調査団
- 山田真宏（編）1994『美和古墳群発掘調査報告書』財団法人鳥取市教育福祉振興会
- 山田真宏・神谷伊鶴2002『横枕古墳群Ⅰ』財団法人鳥取市文化財団
- 和田晴吾2004「古墳文化論」「日本史講座」第1巻東アジアにおける国家の形成、東京大学出版会

図 版

図版 1



鉄刀（奥が刀1、手前が刀2）



鞘口部の木質（刀1）

図版 2



鞘の漆膜（刀 1）



柄の糸巻（刀 2）



鉄矛（左から矛2・石突1, 矛3・石突2, 矛1）

図版4

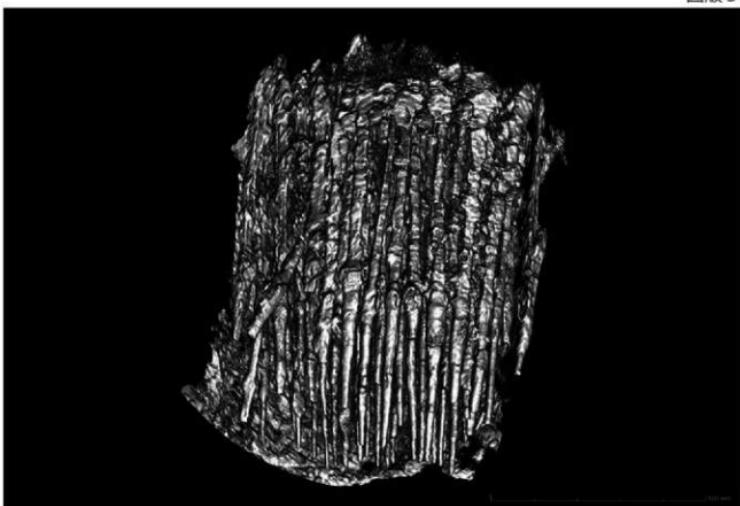


石突1に付着した羽根

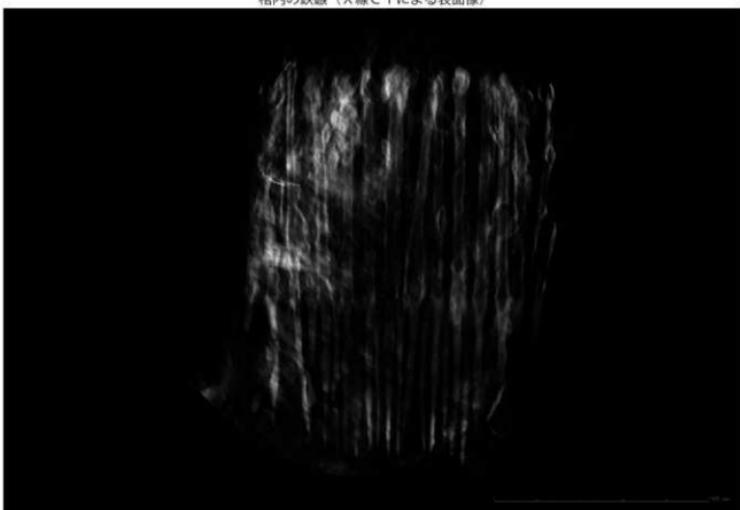


棺外の鉄錆

図版 5



棺内の鉄錆（X線CTによる表面像）

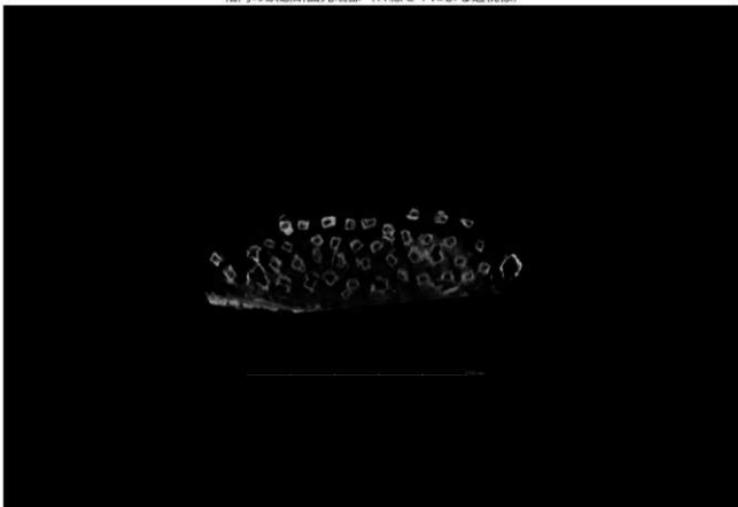


棺内の鉄錆（X線CTによる透視像）

図版6



棺内の鐵鎌断面先端部（X線CTによる透視像）



棺内の鐵鎌断面頸部（X線CTによる透視像）



三角板鋤留短甲（正面）

图版8



三角板腋留短甲（背面）

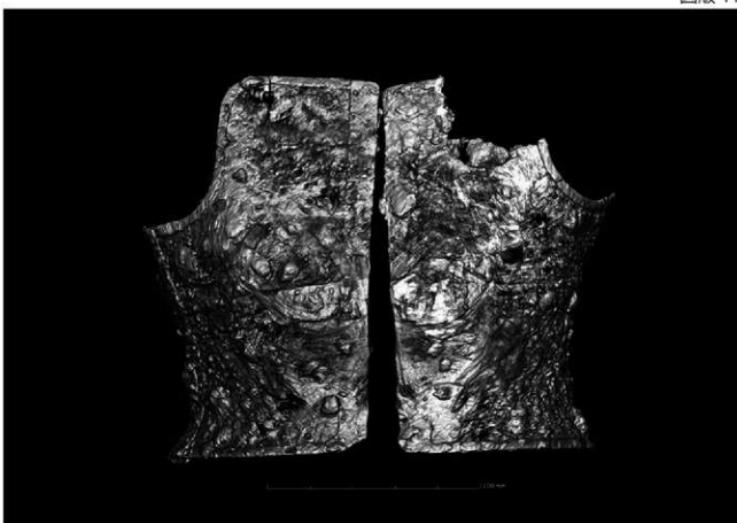


三角板鉄留短甲（右側面）

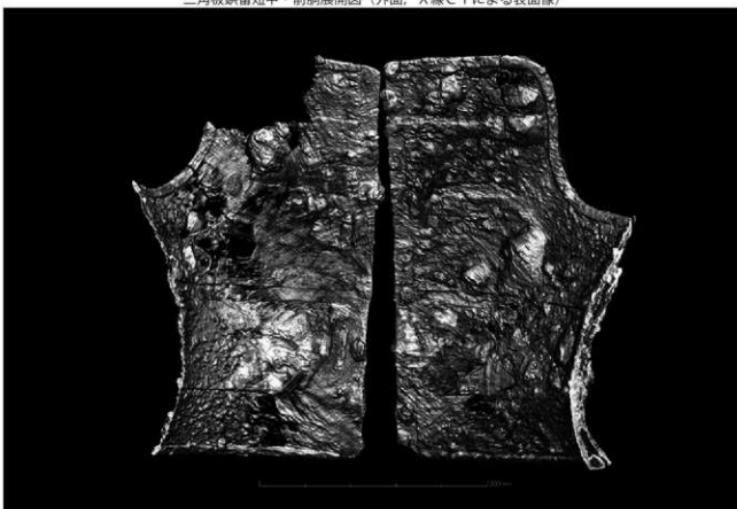
图版 10



三角板斯基留短甲（左侧面）

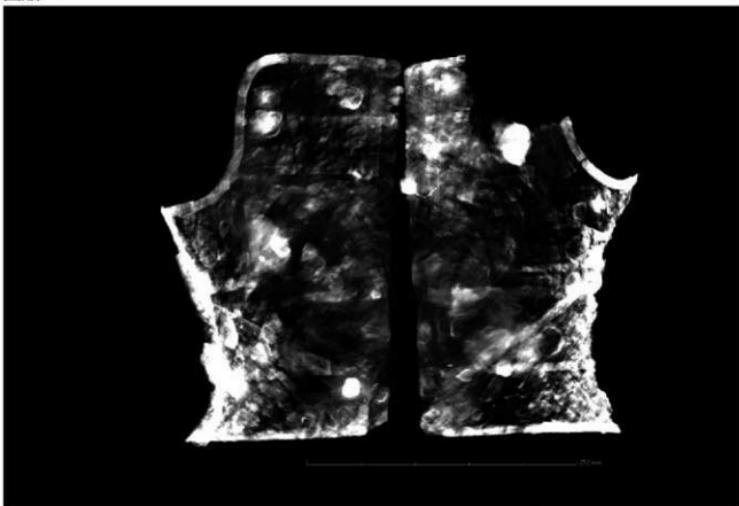


三角板鉄留短甲・前脚展開図（外面、X線CTによる表面像）



三角板鉄留短甲・前脚展開図（内面、X線CTによる表面像）

図版 12

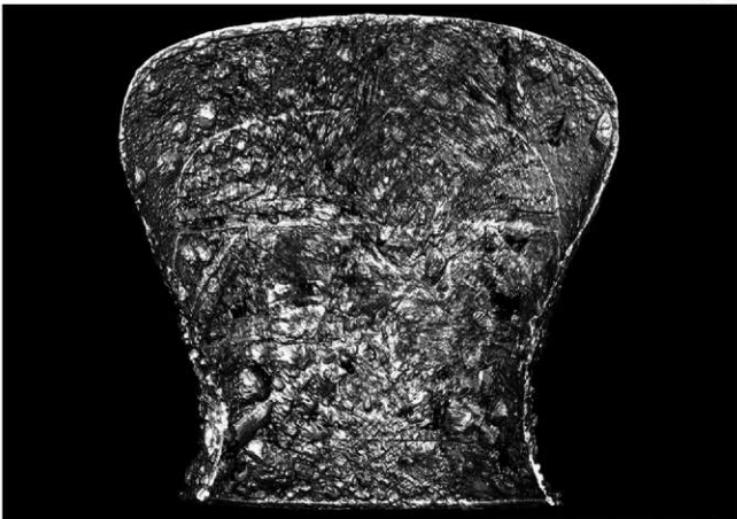


三角板鉄留短甲・前肩展開図（外面、X線CTによる透視像）

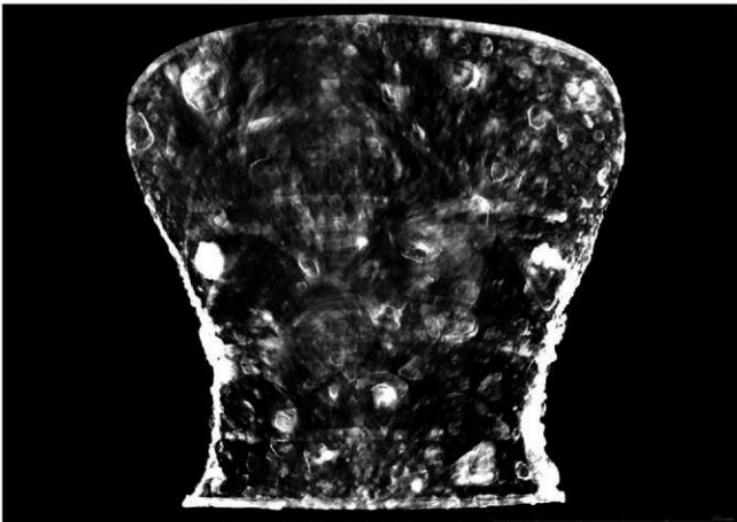


三角板鉄留短甲・後肩（外面、X線CTによる表面像）

図版 13

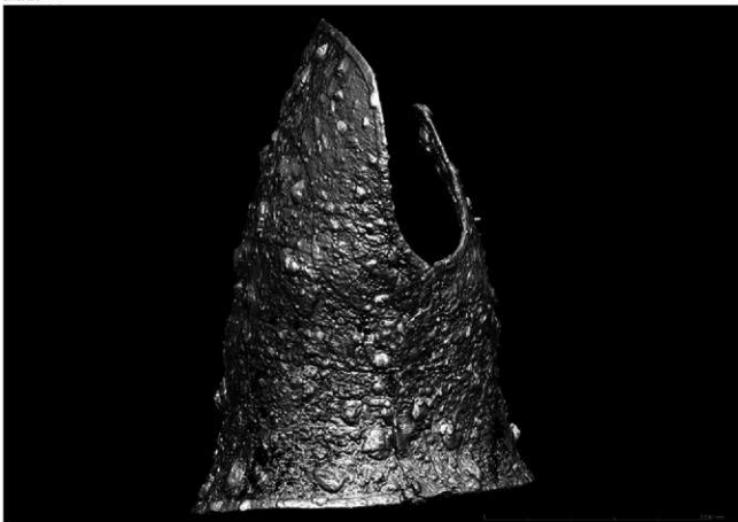


三角板鋸留短甲・後胴（内面、X線CTによる表面像）

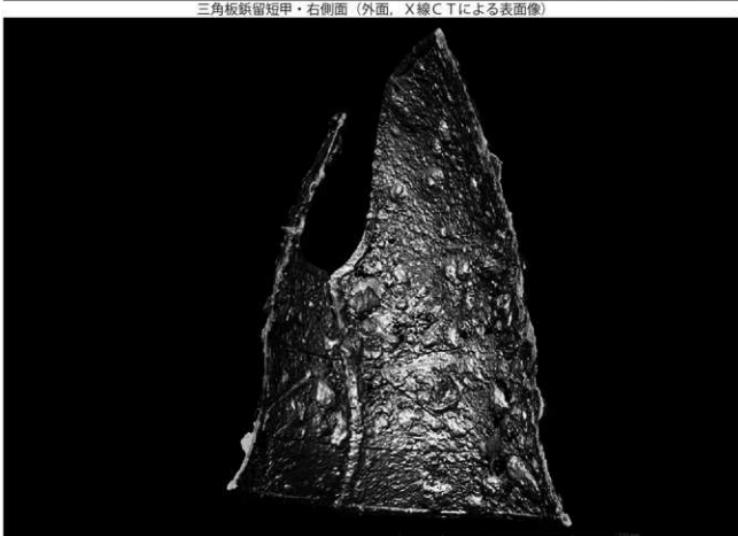


三角板鋸留短甲・後胴（外面、X線CTによる透視像）

図版 14

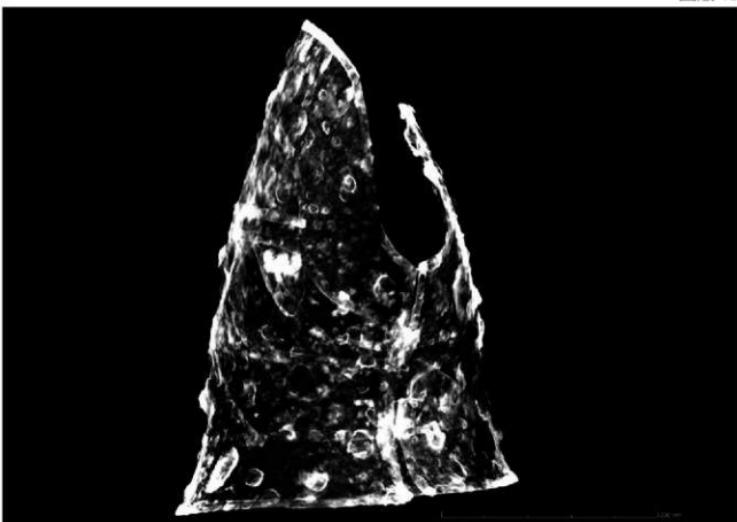


三角板鉄留短甲・右側面（外面、X線CTによる表面像）

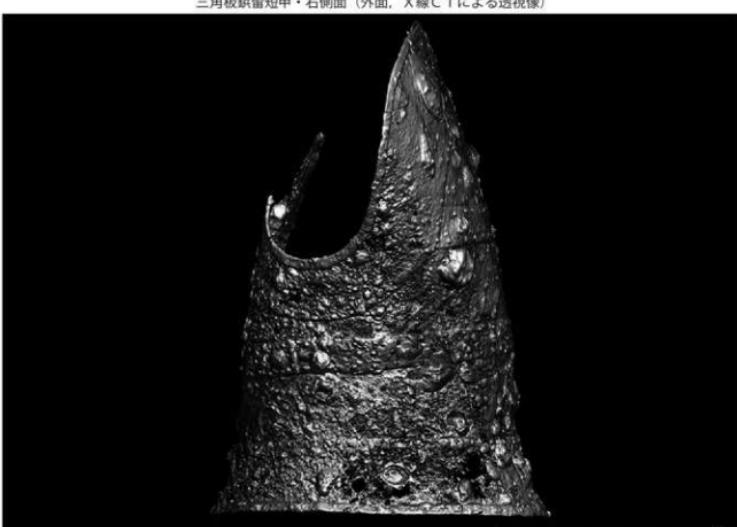


三角板鉄留短甲・右側面（内面、X線CTによる表面像）

図版 15

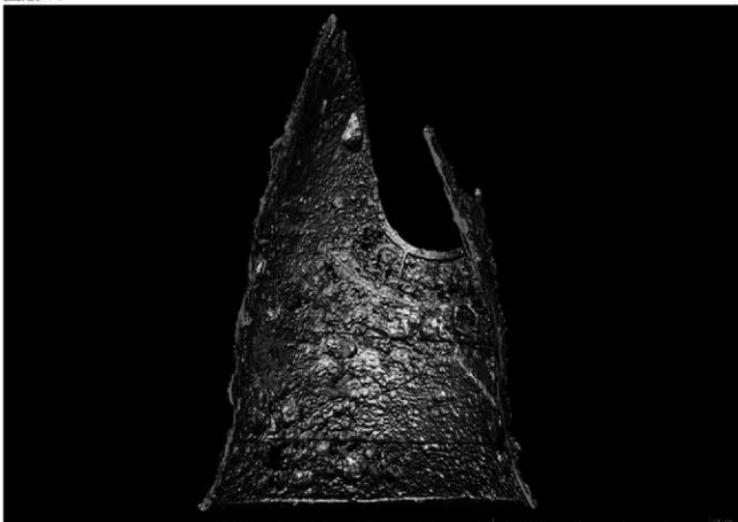


三角板鋸留短甲・右側面（外面、X線CTによる透視像）

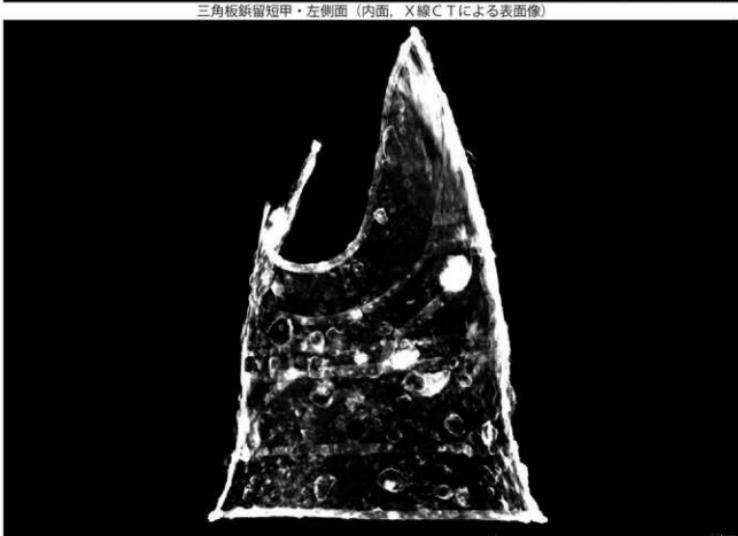


三角板鋸留短甲・左側面（外面、X線CTによる表面像）

図版 16

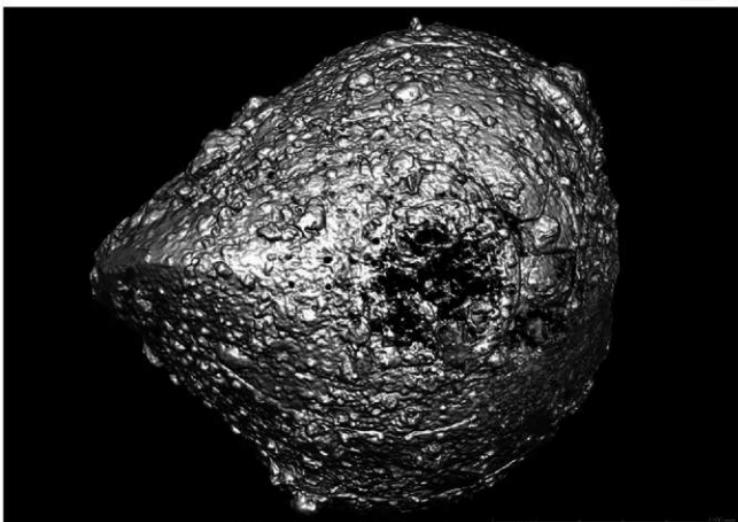


三角板鉄留短甲・左側面（内面、X線CTによる表面像）

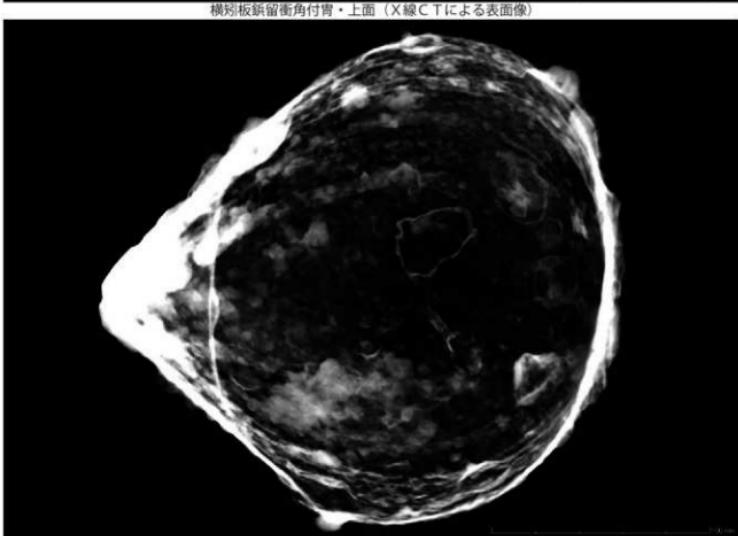


三角板鉄留短甲・左側面（外側、X線CTによる透視像）

図版 17

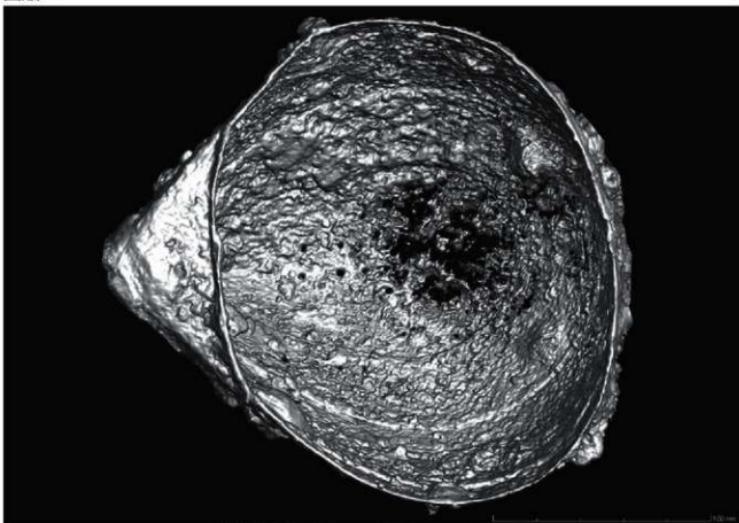


横矧板鉄留衝角付腎・上面（X線CTによる表面像）



横矧板鉄留衝角付腎・上面（X線CTによる透視像）

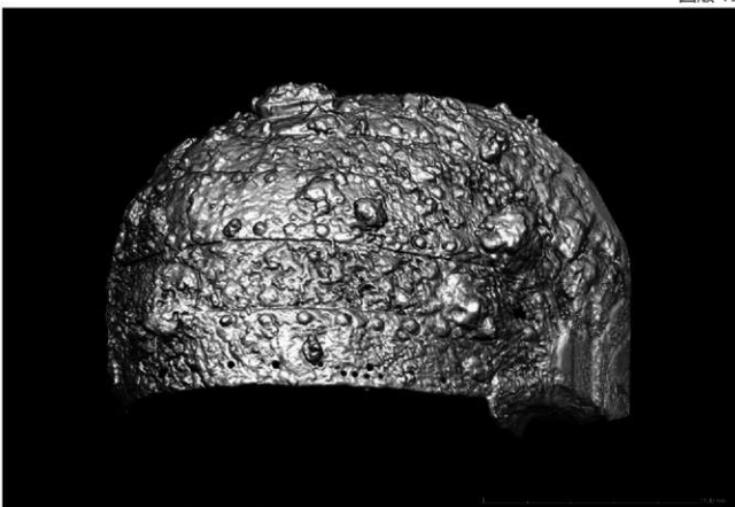
図版 18



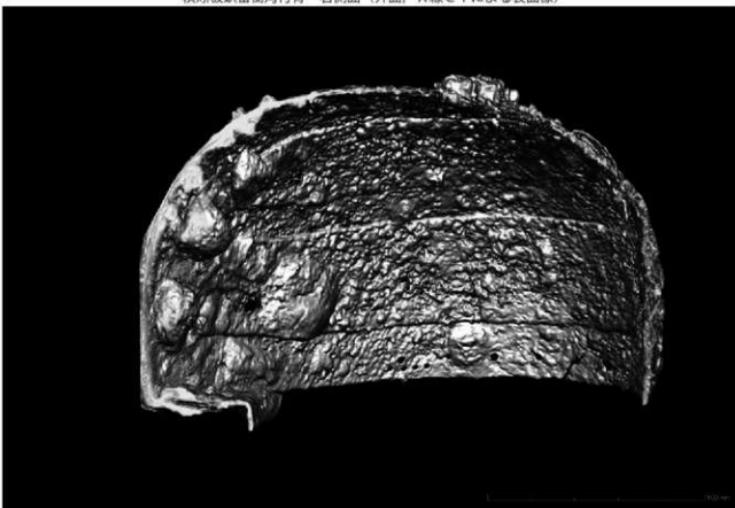
横矧板銅留衝角付骨・下面（X線CTによる表面像）



衝角底板の形状（X線CTによる表面像、透視像）

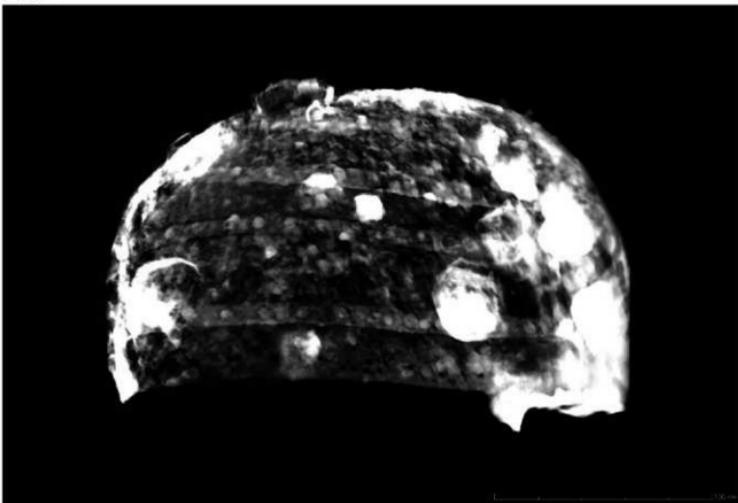


横矧板鉄留衝角付骨・右側面（外面、X線CTによる表面像）

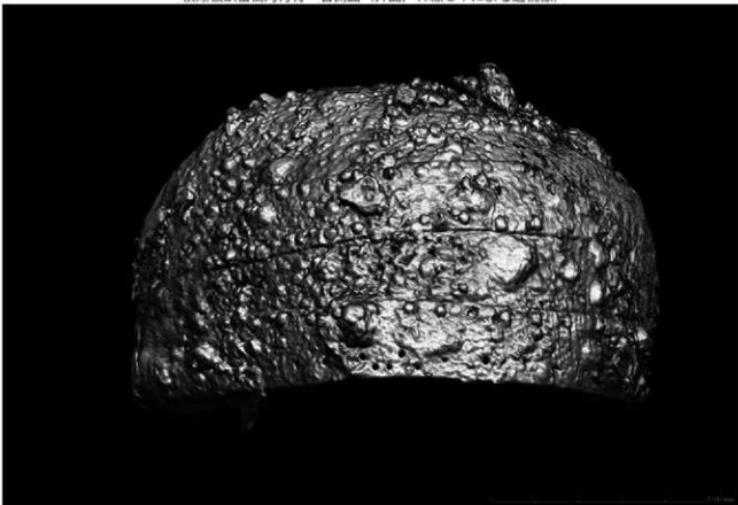


横矧板鉄留衝角付骨・右側面（内面、X線CTによる表面像）

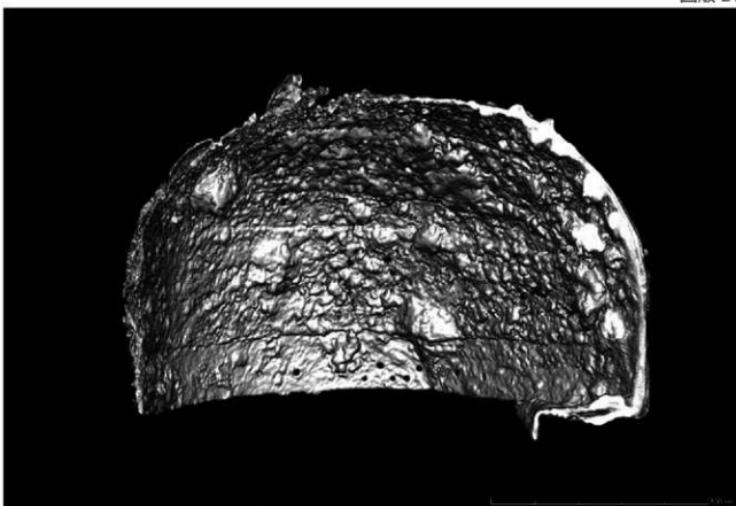
図版 20



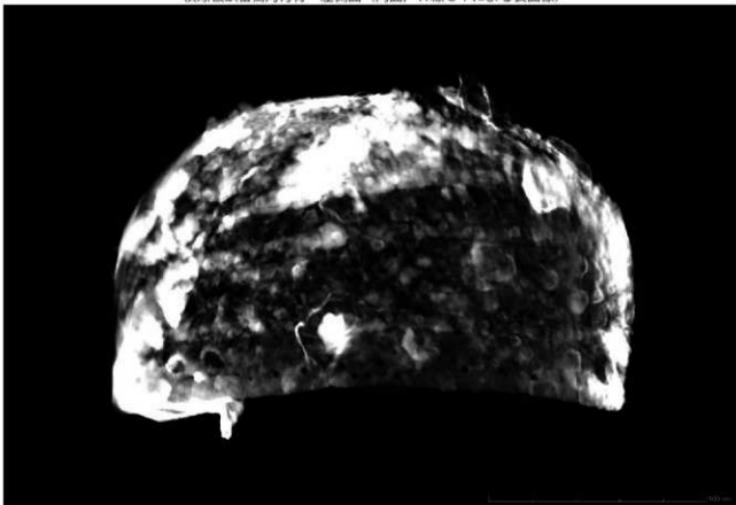
横矧板鉄留衝角付骨・右側面（外面、X線CTによる透視像）



横矧板鉄留衝角付骨・左側面（外面、X線CTによる表面像）

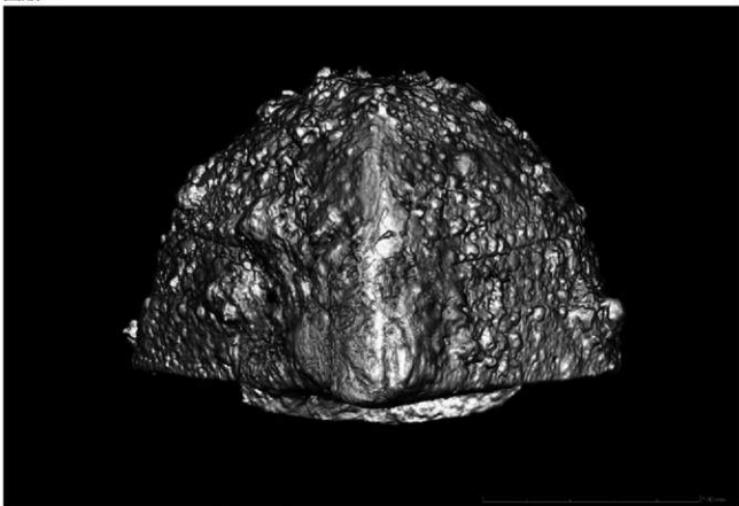


横列板鰓留衝角付骨・左側面（内面、X線CTによる表面像）

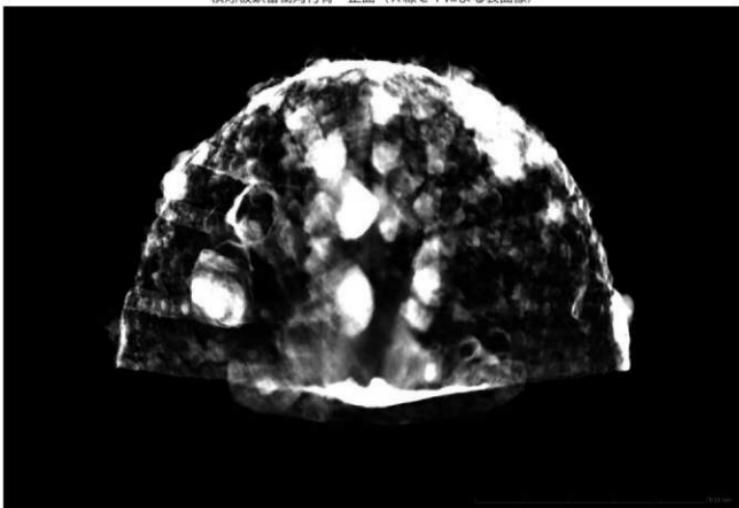


横列板鰓留衝角付骨・左側面（外面、X線CTによる透視像）

図版 22



横矧板鉄留衝角付骨・正面（X線CTによる表面像）



横矧板鉄留衝角付骨・正面（X線CTによる透視像）

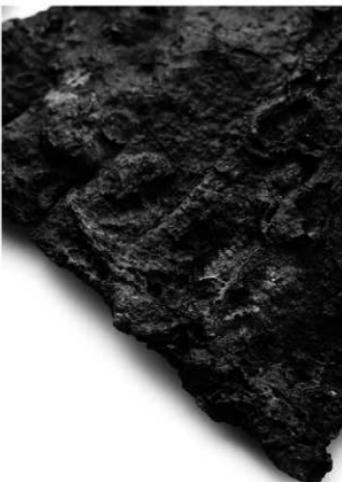


頬当

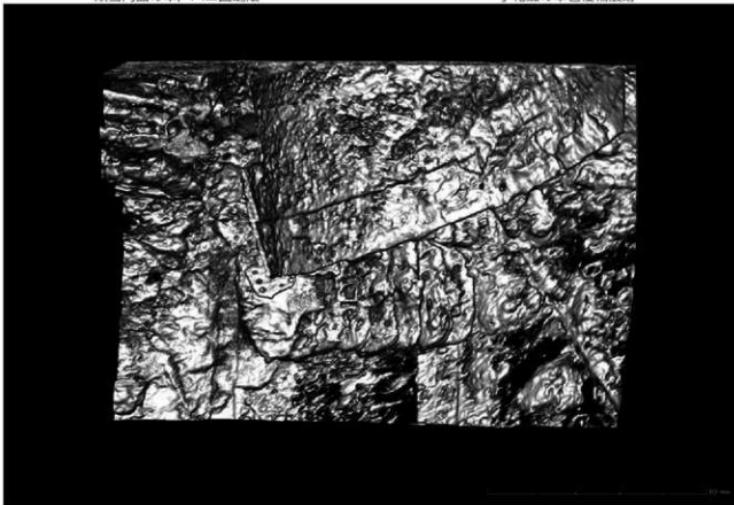
図版 24



頬当内面の革。ハ工団彫殻



小札鑑の革包覆輪痕跡



短甲内に執着した小札と衝角付骨（X線CTによる表面像）



f字形鏡板裏面（右）

图版 26

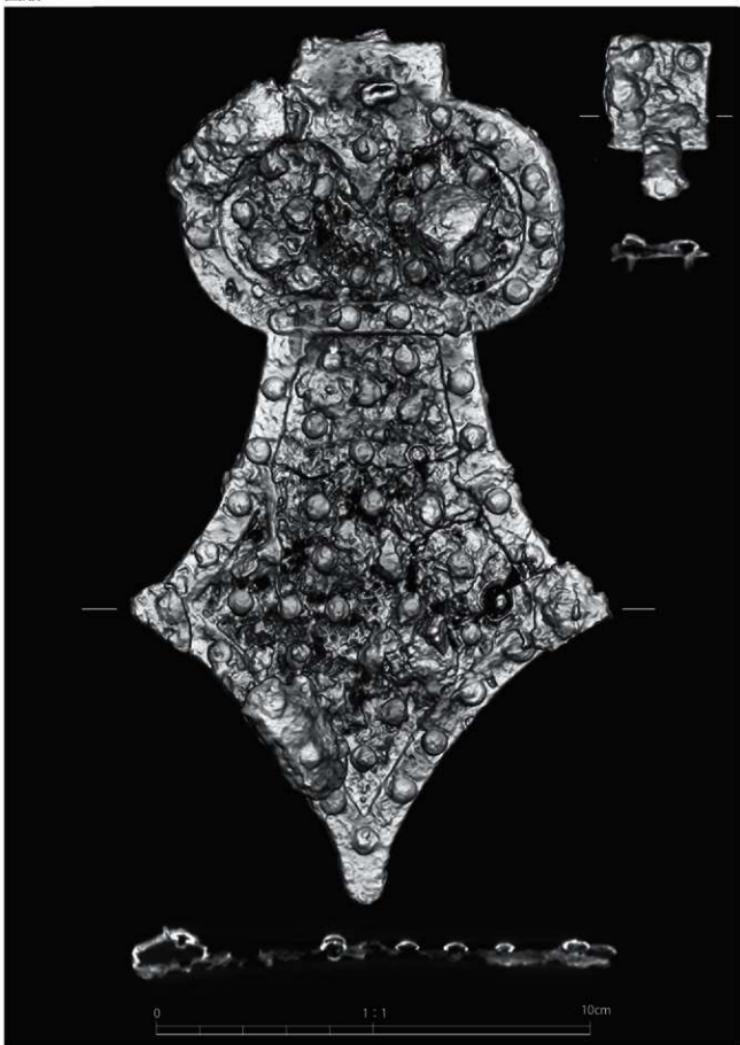


f字形鏡板裏面（左）



刻菱形杏葉 1

図版 28

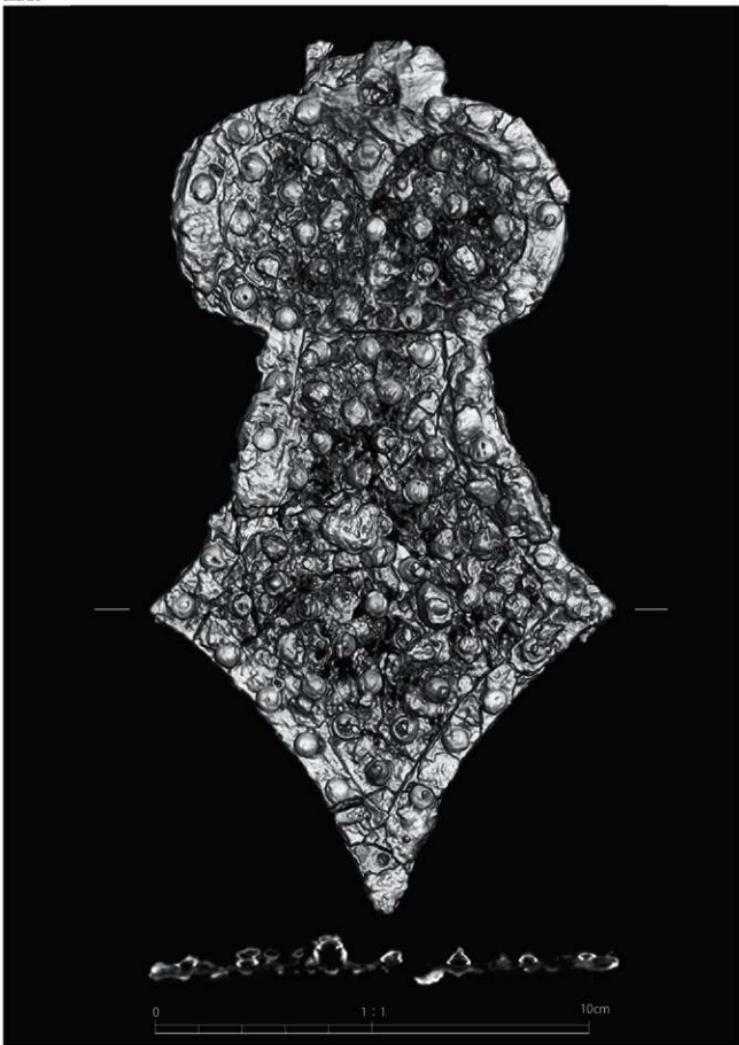


剣菱形杏葉 1 (X線CTによる透視像)



刻菱形杏葉 2

図版 30

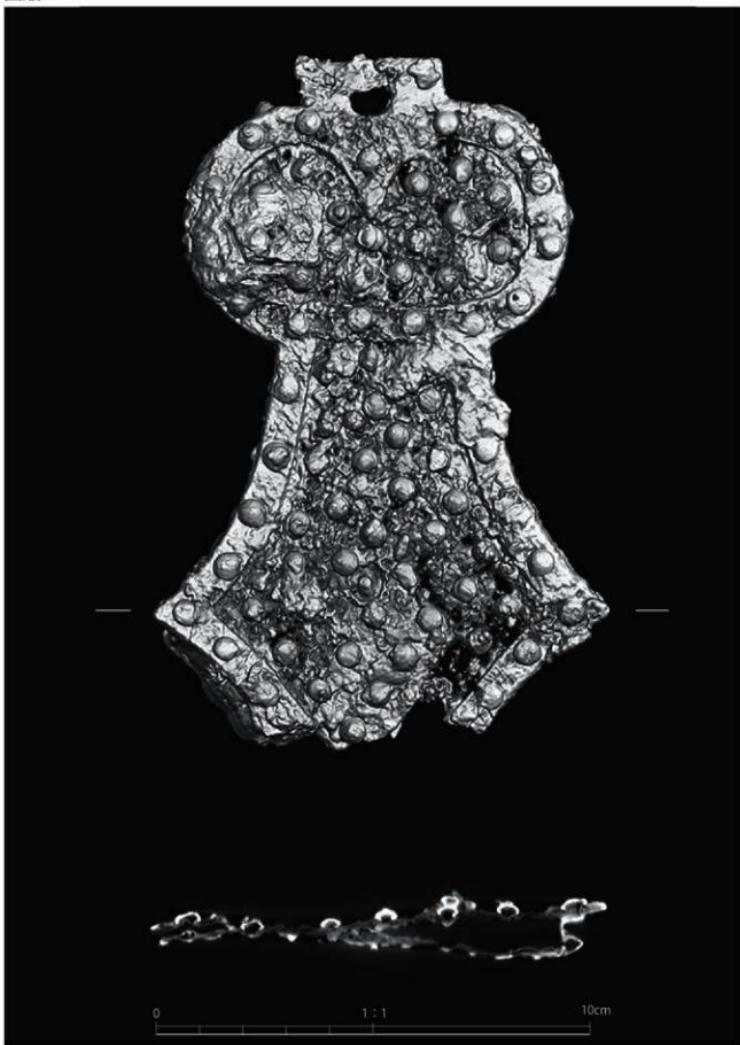


剣菱形杏葉 2 (X線CTによる透視像)



劍菱形杏葉 3

図版 32



剣菱形杏葉3（X線CTによる透視像）

**倭文6号墳出土遺物の研究
出土品再整理報告書**

平成30（2018）年3月23日印刷・発行

発行 烏取市教育委員会
印刷 勝美印刷株式会社
